

第6節 墳丘と埋葬施設の特徴

(1) 墳丘構築方法

1. 正直35号墳（第201・202図）

正直35号墳は、旧表土と地山のローム質土を削り出して墳丘基底部を形成している（第201図）。35号墳が位置する場所は、東へ向かって傾斜する微高地の突端にあり、古墳は南北方向の斜面に沿って築造されている。明確な山上墳のように丘陵を切断し墳丘を形成するものではないが、微高地を利用していことが分かる。明確な周溝が確認されないことも、こうした点に起因するであろう。なお、第7トレンチで確認された後方部南辺に平行する溝は、区画あるいは築造に際しての溝である可能性が高い。

土層堆積状況の特徴を概観する。各トレンチで共通する点は、地山とその上層に旧表土が確認されることである。また第7トレンチでは、前方部と後方部では墳丘盛土に切れ目があり、堆積層が連続していない。後方部側堆積層の上に前方部の盛土が堆積することから、主丘部となる後方部の盛土を先に行い、後から継ぎ足すようにして前方部に盛土したと考えられる。

後方部中央の第8トレンチでは、上下に堆積する盛土の間に黒色土の薄い層が形成されている。そのため、少なくとも墳丘構築段階で平坦にする行為が1回以上行われている。黒色土の間層上では、後方部南半部では南下がりの斜めの堆積層が、後方部北端部では北下がりの斜めの堆積層が確認された。このことから、概ね墳丘中央部北寄りの位置から、墳丘外側に向かって盛土が行われたと考えられる。

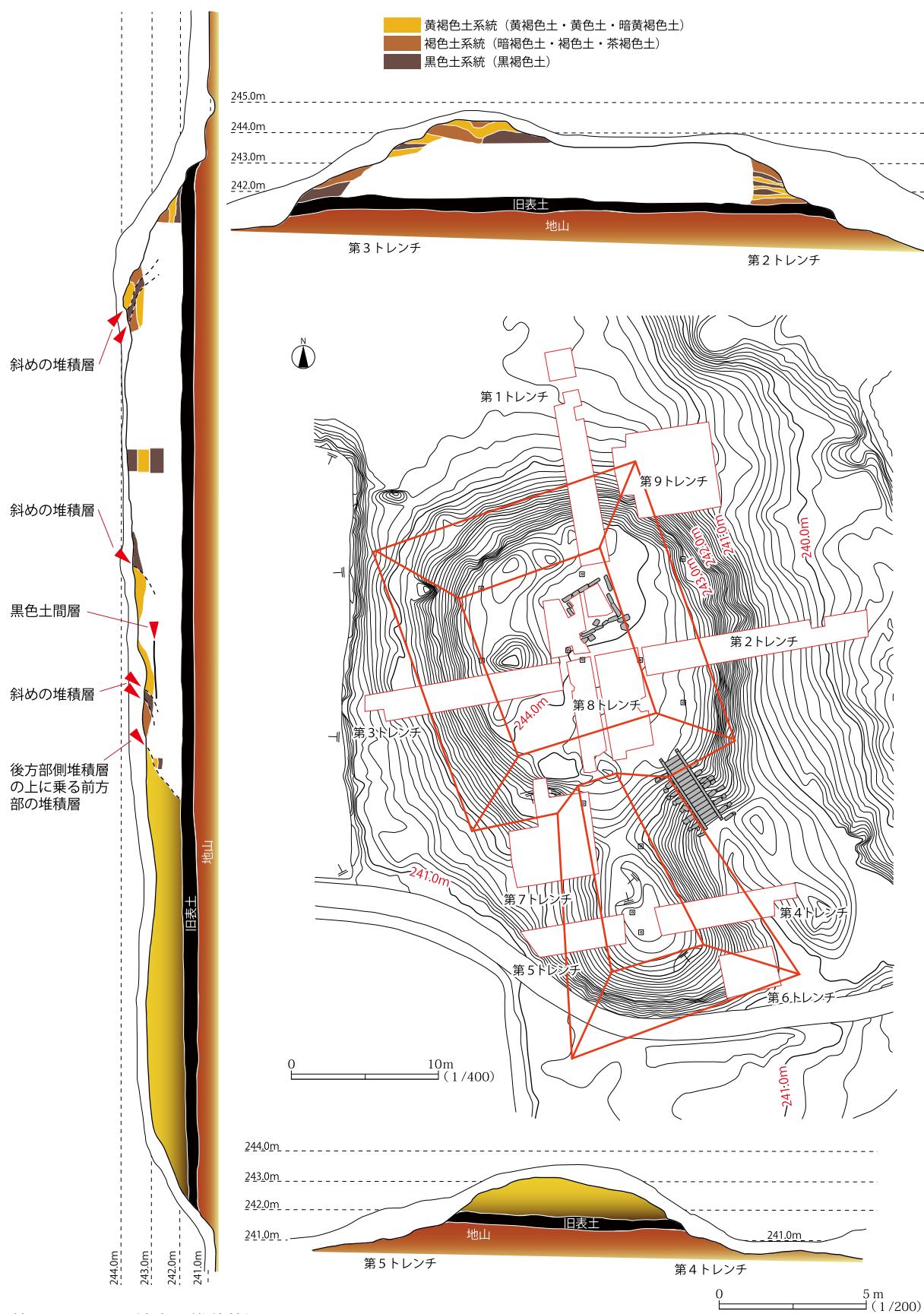
こうした各トレンチの土層堆積状況から、次のような墳丘構築方法を想定することが可能となる（第202図）。①周囲より南北方向にわずかに高い場所が古墳築造場所に選ばれる。②後方部となる場所に積み土を行う。ただ、下方の状況は判然としない。③後方部の上段に積み土を行う。その際、後方部の中央北寄りの位置から積み土を行っている。下段との間に黒色土の薄い層が確認されるが、構築作業上に生じた層か、時間差によるものかは明らかではない。④前方部の積み土を行う。これは、西側くびれ部で、前方部と後方部の墳丘盛土の堆積層が連続しないことから判明した。なお、墳丘の表面は黄褐色土系統の積み土となる。

2. 正直13号墳（第203図）

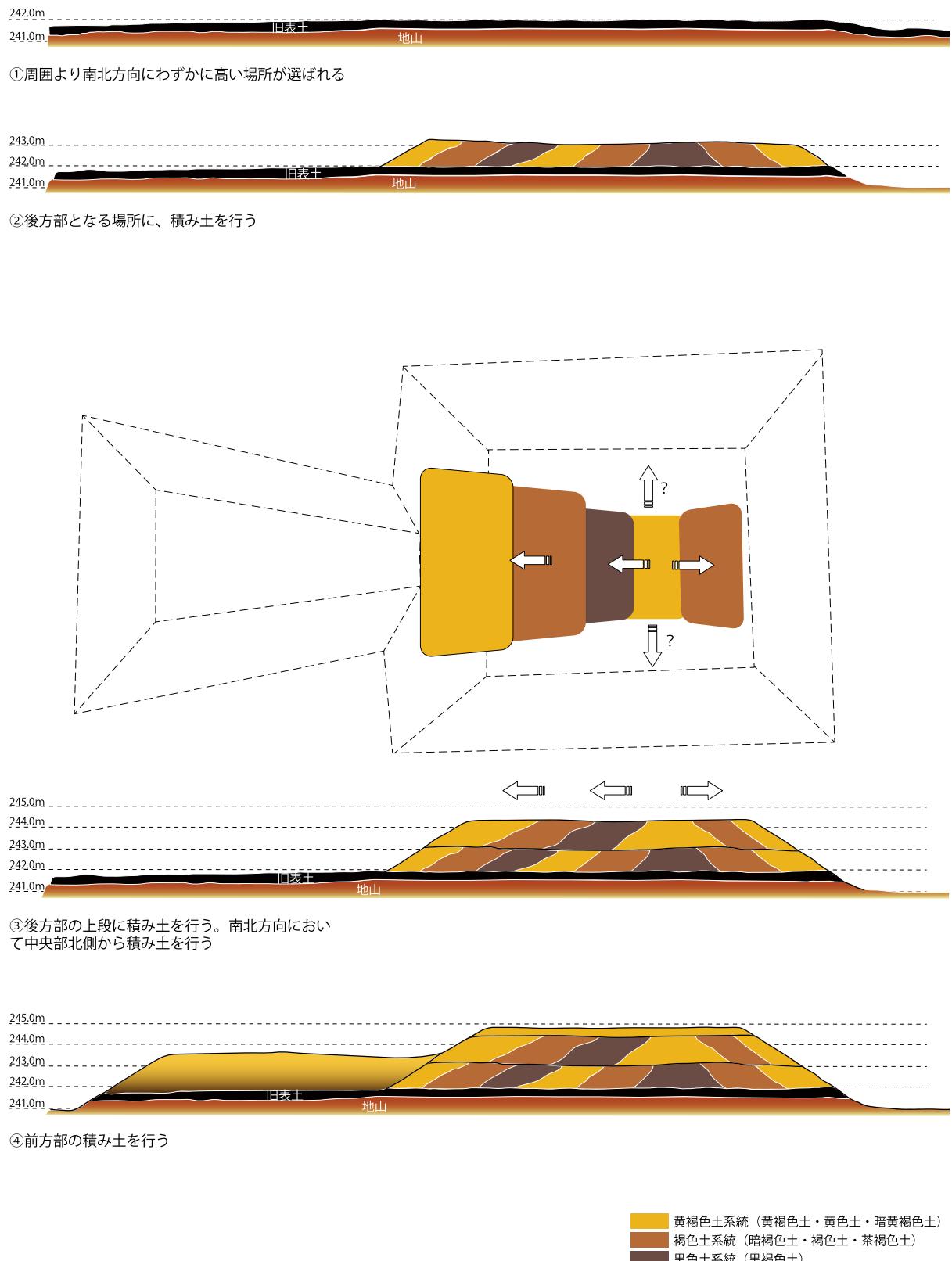
正直13号墳は、直径22mを測る、正直古墳群では比較的規模の大きな円墳である。墳丘の遺存状態も比較的良好で、墳丘構築方法を復元することが可能であった。

正直13号墳は、旧表土と地山を削り出して墳丘基底部を形成している。墳丘構築方法を復元すると、第203図のようになる。①旧表土が墳丘となる場所の中央に寄せられる。②墳丘の中央部分に暗黄褐色土が積み上げられる。③さらに墳丘の中央部分に黄色土が積み上げられる。④茶褐色土が積み上げられる。その際、中央から周縁部に向かって積み上げられていく。⑤周縁部に褐色土・黄褐色土が積み上げられる。⑥黄色土を主体とする積み土を行う。その後墳丘表面は表土化し、攪乱を受ける。

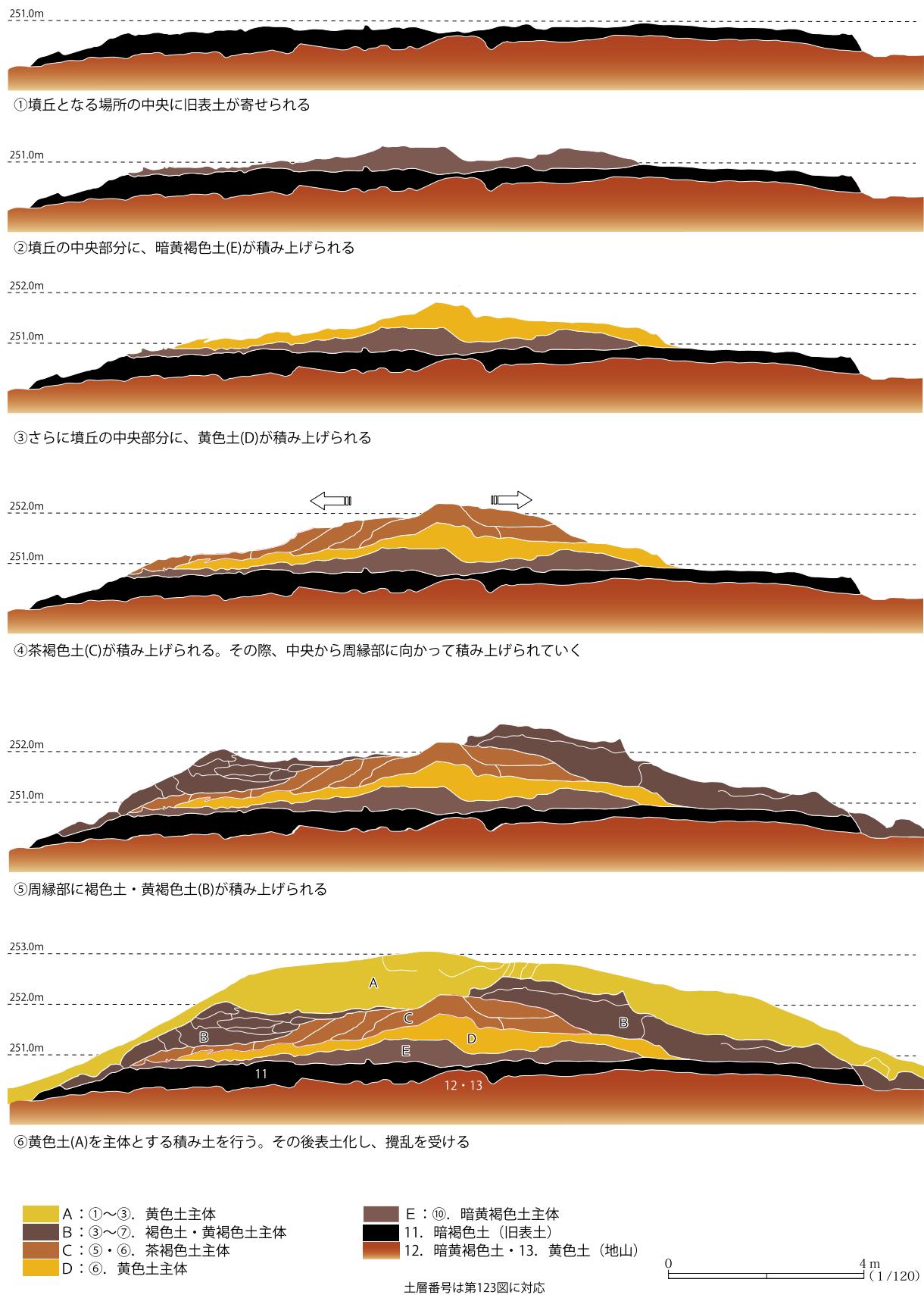
正直13号墳は、先ず墳丘中央部から積み土を行い、次に周縁部に向かって積み土を行う。最後に墳丘表面に黄色土系統の積み土を行う方法であった。墳丘の遺存状態が良くない古墳においても、基底部が残る古墳では旧表土を確認できることから、同じように、旧表土を除去するなどの整地は行っていない



第201図 35号墳土層堆積状況図



第202図 35号墳墳丘構築方法復元図



第203図 13号墳墳丘構築方法復元図

ことが分かる。

3. 正直 15 号墳（第 204 図）

正直 15 号墳は、積み土を行う過程で、上から見てリング状の積み土を行っており、他の円墳とは異なる構築方法が確認されている。

墳丘構築方法を復元すると次のようになる。①墳丘となる場所の旧表土上に、周囲の旧表土・旧表土のブロックが寄せられる。②旧表土に由来する土壤の上に、暗褐色土が周溝のわずかに内側に積み上げられる。この時、上面から見るとリング状に積み上げられた状態となる。③リング状に積み上げられた暗褐色土の内側に褐色土が充填される。その際、平坦面を形成している。④上部に黄色土の積み土を行い、墳丘を完成させる。

こうした正直 15 号墳の構築のあり方は、正直古墳群で確認されたものとしては唯一のものである。

古墳の構築方法については、青木敬氏の研究に詳しい。氏によれば、中心部分に行った盛土（小丘）に墳丘外縁付近及び墳頂まで順次積み土をしていく「東日本の工法」と、墳丘となる場所に土手状の盛土を行い、その土手状盛土の内側に同じ高さまで盛土を行う「西日本の工法」があると指摘する（青木 2017）。

氏の考察の中心は、前方後円墳あるいは大型円墳が対象であり、正直 15 号墳のような小規模古墳の例があてはまるかは注意を要する。しかし、同じ古墳群でありながら、墳丘構築方法を異にする要因については、改めて考えなければならない問題である。

（2）土器配置（第 205～208 図）

正直古墳群の各古墳では、土器の出土状況により、その使用状況が推測可能なものがいくつか見られた。

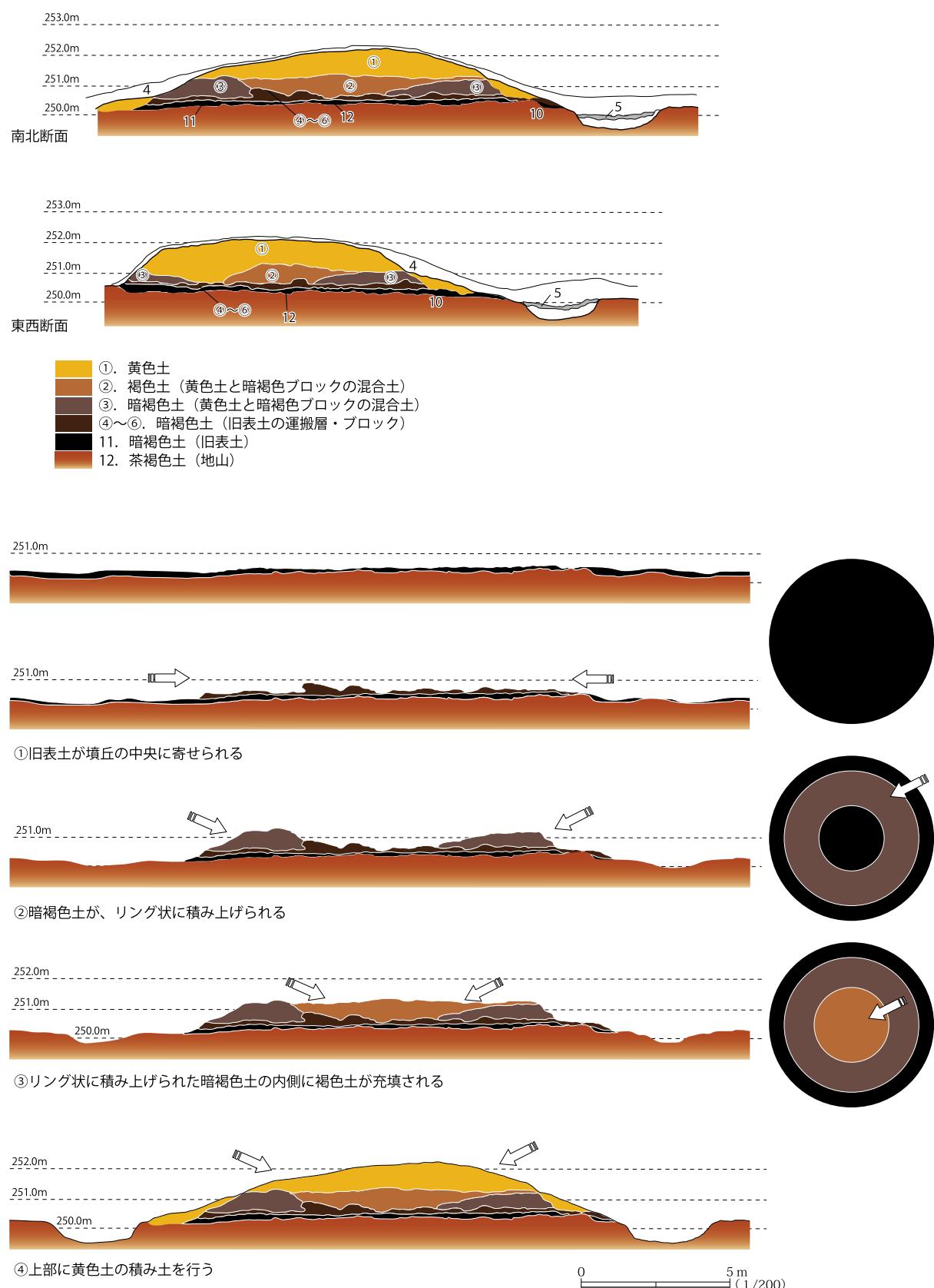
正直 35 号墳では、後方部墳丘上にあった壺（第 205 図 5）が、古墳完成後にくびれ部に転落したと考えられる。第 1 トレンチで出土した 2 も、後方部上からの転落と想定できる。さらに壺あるいは鉢と思われる口縁部 3・4 も同様の出土状況を示す。こうした土器は後方部上に立て並べられていたか、あるいは祭祀や儀礼などで使用されたものと思われる。これに対し、6 の甕はくびれ部に置かれていたもので、壺とは異なるあり方を示す。

正直 27 号墳では周溝から中型の壺が 2 点出土している（第 206 図）。いずれも底面付近から出土しているが、第 11 トレンチの 1 は正位の状態で出土し、第 10 トレンチの 2 は破碎した状態で出土している。

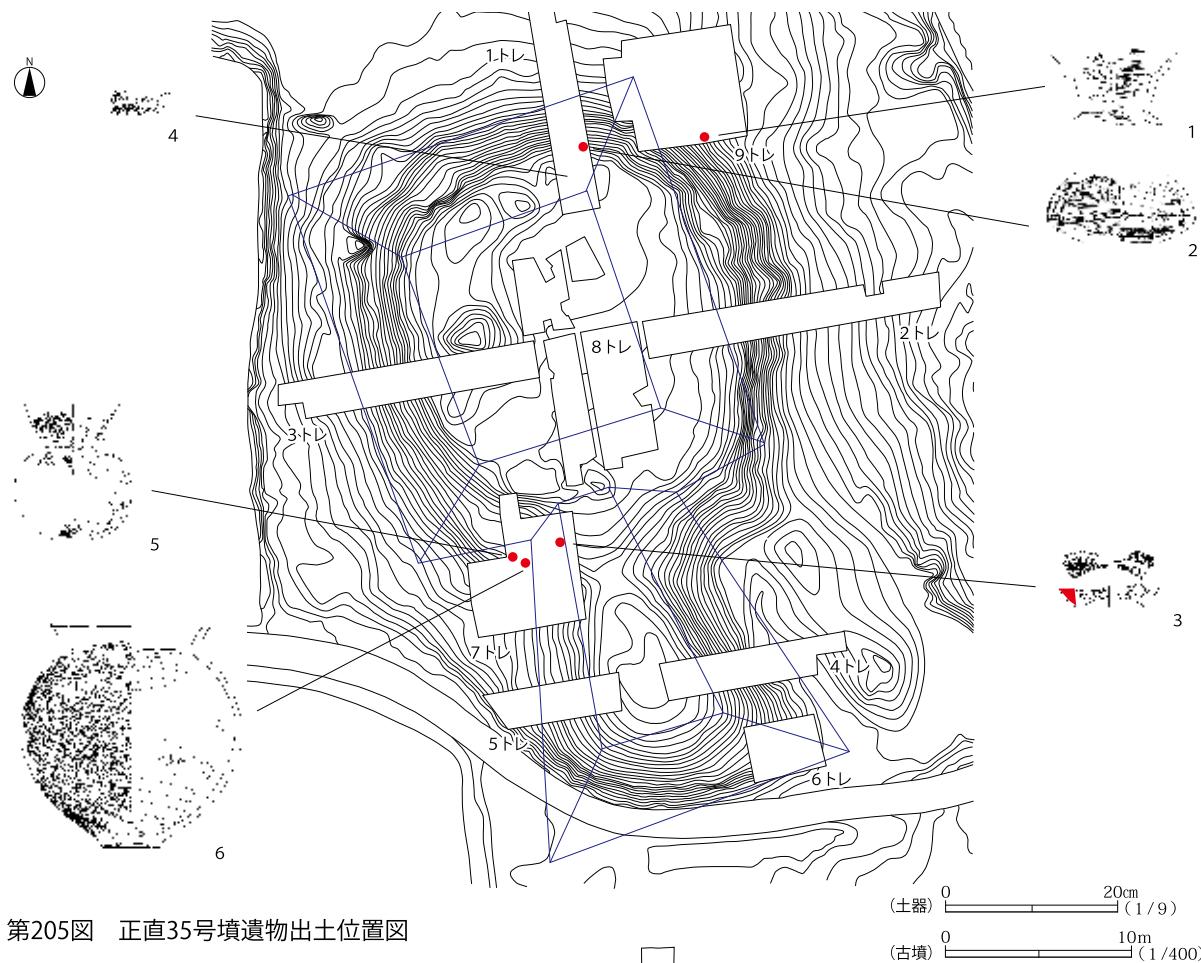
正直 11 号墳では、周溝底面付近から、正位の状態で壺（第 207 図 1）が出土している。27 号墳と同様の出土状況を示すものと言える。

正直 12 号墳でも特徴的な出土のあり方が見られる（第 208 図）。特徴的なほぼ完形に近い高壺が間隔を置いて、周溝の底面付近から出土している。墳丘上にあったものが転倒したか、あるいは周溝に置かれたか判然としない。ただ、それぞれの高壺は、良好な遺存状況であることなどから、後者の可能性が高いと考えられる。

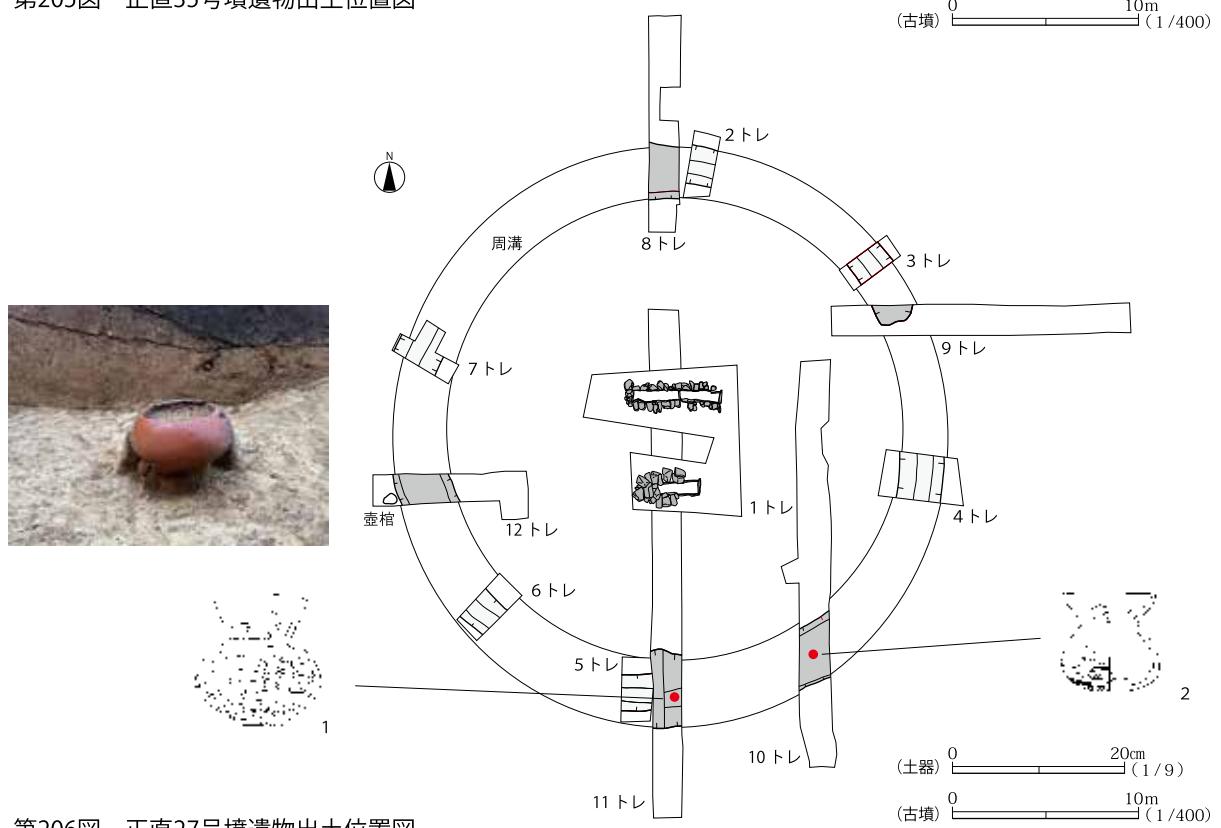
山田俊輔氏は、中期の古墳における土器使用を論じている。氏は、墳裾や周溝内で原位置をとどめる土器を対象とし、周溝の底面に土器を配置する I 型、埋葬施設内に土器を副葬する II 型、埋葬施設上近くの地表面に土器を配置する III 型の 3 つのタイプがあるとする。その内、関東地方の多くの群集墓が属



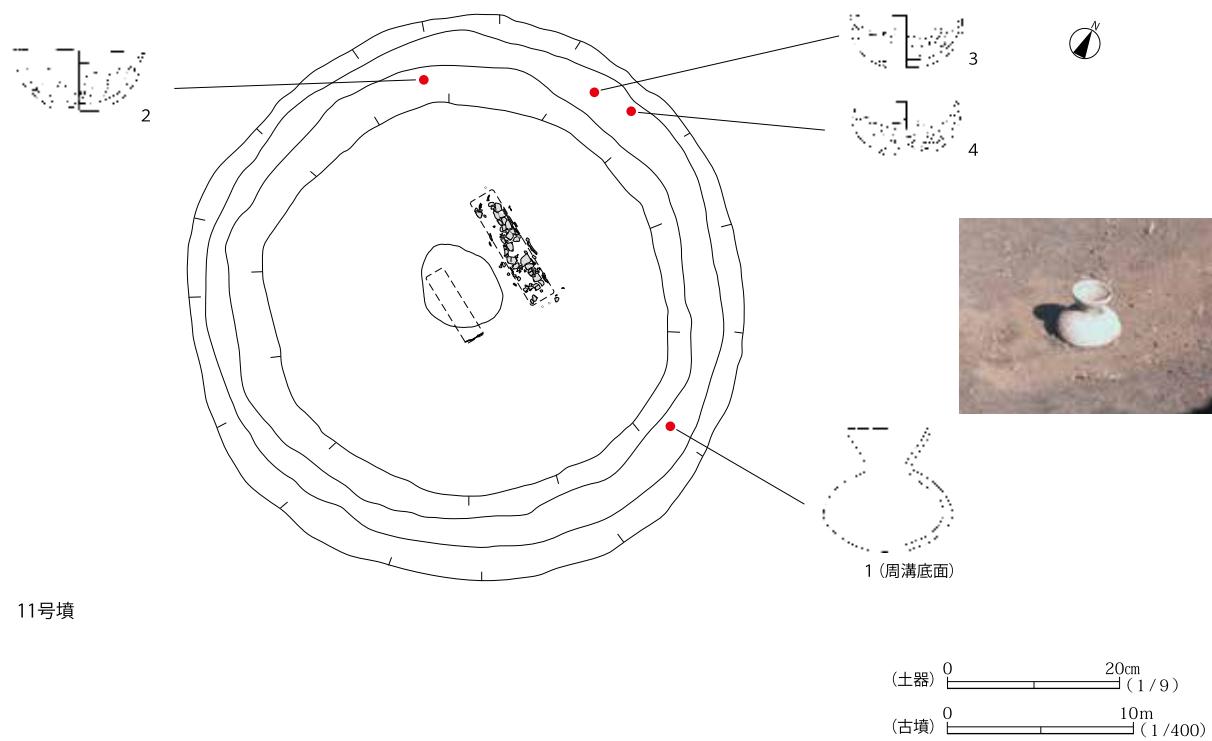
第204図 15号墳墳丘構築方法復元図



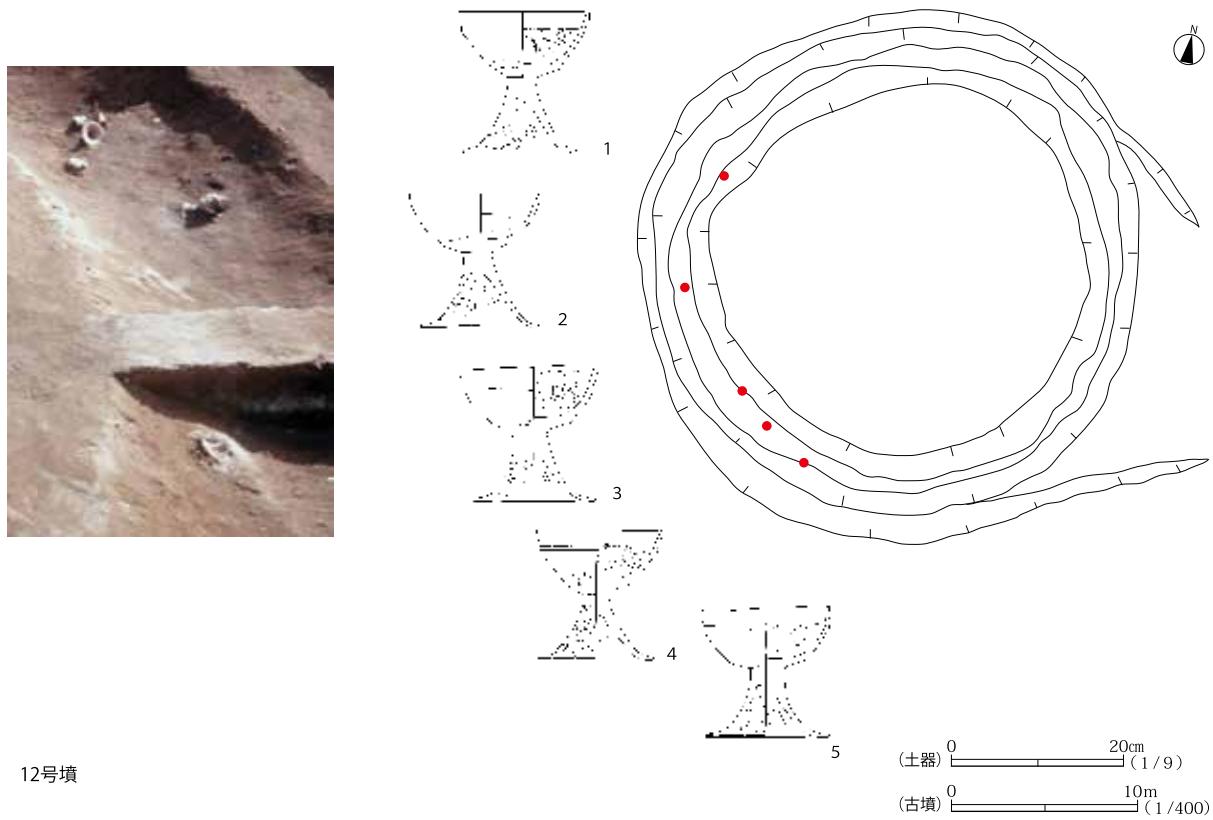
第205図 正直35号墳遺物出土位置図



第206図 正直27号墳遺物出土位置図



第207図 正直11号墳遺物出土位置図



第208図 正直12号墳遺物出土位置図

するI型は、壺を単独あるいは複数重ねて周溝底面に置くという点で非常に類似した配置方法であることを指摘する。そして、この配置方法が各地でそれぞれに生じたとするより、1つの遡源から波及したと考える方が妥当であるとした（山田 2005）。氏は群集墓の性格を考えるには地域内の分析のみでは解釈を誤る可能性があり、「地域を越えて連動する考古学事象を含めて検討する」ことの必要性を説き、それによって「中期群集墓造営の背景」を解釈することが可能になると述べる。

正直27・11・12号墳で出土した器種は、それぞれ中型壺、中型壺・椀壺類、高壺である。「周溝底面に置く」という山田氏の分類に該当するものの、器種の点では異なる。こうした器種の違いが生じる要因は明らかではないが、周溝底面に土器を置くという行為自体は継続している可能性がある。それは、周溝底面に近い位置であることから、葬送時に近い時期に行われた行為であることが首肯される。

（3）土器棺

正直古墳群では、正直30号墳礫榔、15号墳東側の土坑墓をはじめとし、墳丘外の埋葬施設が検出されている。その中でも特徴的なものが27号墳の墳丘外で確認された土器棺である。

1. 墳丘との関係性（第210図）

正直27号墳周溝の西側で、周溝に接するように確認された。同墳は墳丘のみならず周囲も広く削平されており、古墳築造時の周溝上端もさらに西側に位置するものと想定される。そのため、土器棺は周溝上端と接していたと考えるのが妥当である。土器棺に規制されて古墳が築造されたのではなく、古墳築造後に土器棺が埋納されたと考えるのが自然である。また、土器棺に使用された壺の口縁部中央と底部中央を結んだ線は、墳丘中心に近い位置を通る。なお、南箱式石棺の中軸線の延長線上の近い位置に土器棺がある。20mを超える遺構と土器の軸線から関連性を捉えることは精度的に難しい側面は否定できないが、土器棺と中心となる埋葬施設の間には関係性を指摘できるだろう。

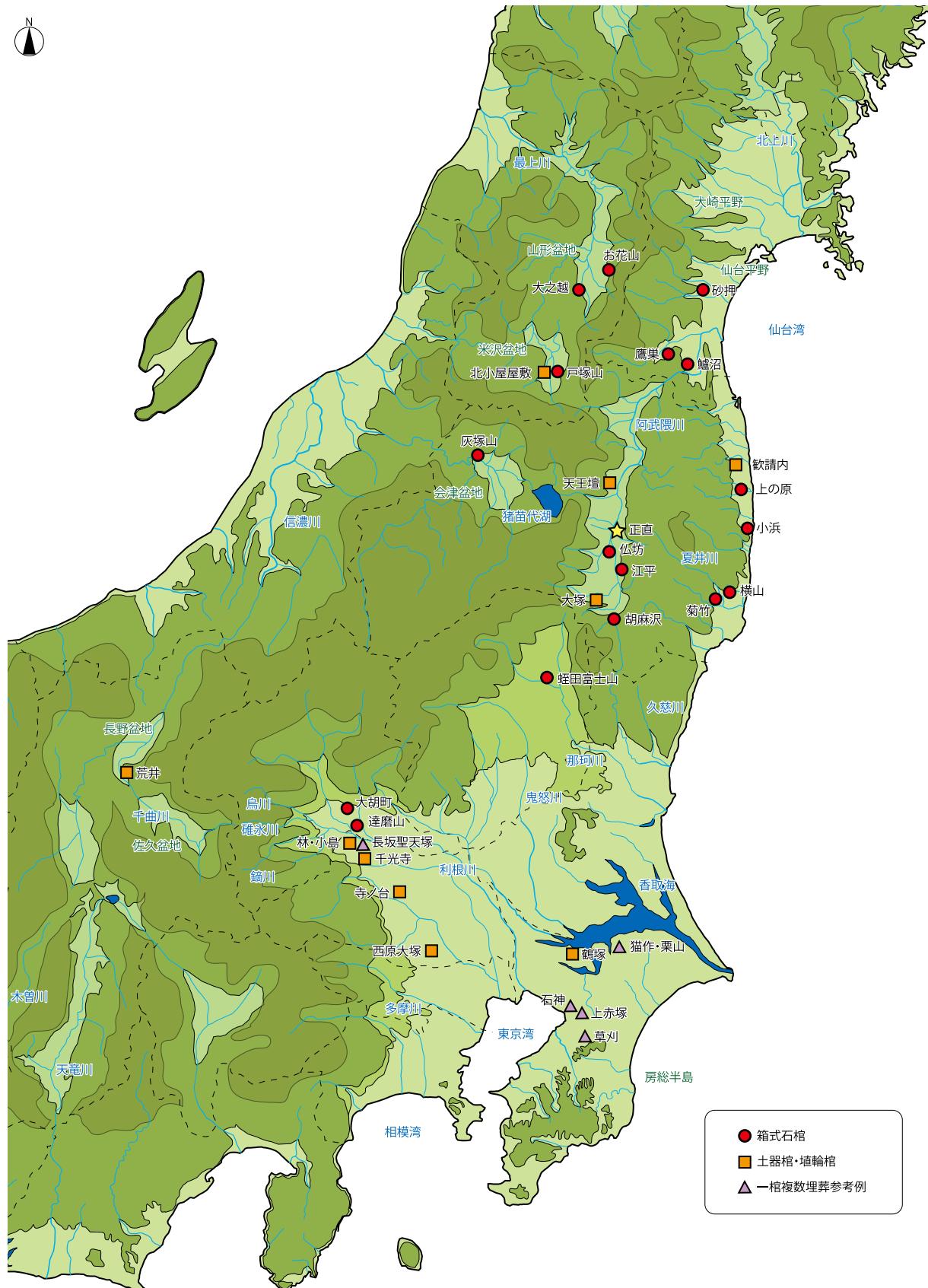
2. 土器棺の類例（第211～214図）

古墳時代中期の土器棺の類例は非常に少ない。そのため、前期も含め関連性のある類例を概観する。

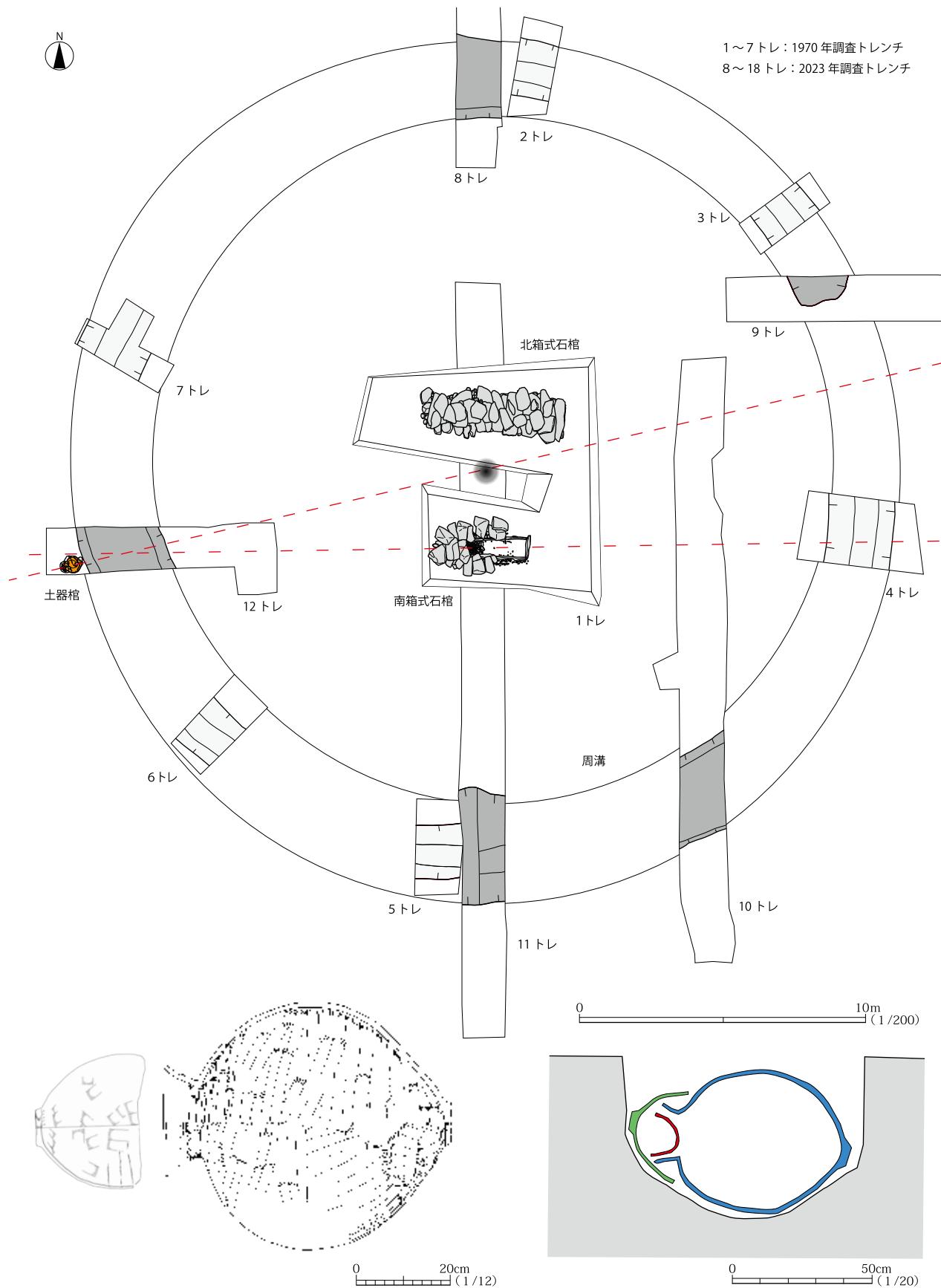
東北地方では古墳時代中期の事例は知られていないが、前期に類例がある。山形県米沢市の北小屋屋敷遺跡では、方形周溝墓5基と土器棺墓1基、土坑墓5基などが確認された（第211図上）。このうち土器棺墓・土坑墓群は周溝墓群の外側にまとまって分布し、SU156土器棺墓は、土坑内に器高70cm以上の大型の壺を斜位に埋設する。上半部を欠いた小型壺の下半部を逆さにし、蓋として、大型壺の口縁部を覆うように利用している。人骨などは認められないが、大型壺の内部底面からは、赤色顔料が厚さ5cm程堆積している。掘り方の平面形は土器棺とほぼ同規模の小判形を呈する。複合口縁部の形態と、やや下膨れ状の体部の形状などから、報告書では前期後葉とされ、周溝墓に先行するものとして把握されている（山形県埋蔵文化財センター2002）。

福島県南相馬市の歓請内古墳は南北30×東西34mの方墳で2基の土器棺が検出された（第211図下）。幼児または小児が被葬者の可能性が高いとされ、主たる埋葬者の血縁者と想定されている。なお、四方に設定したトレンチ2か所で壺棺を検出したことから、墳裾部にはさらなる壺棺の存在が予想されている（東北学院大学2011）。

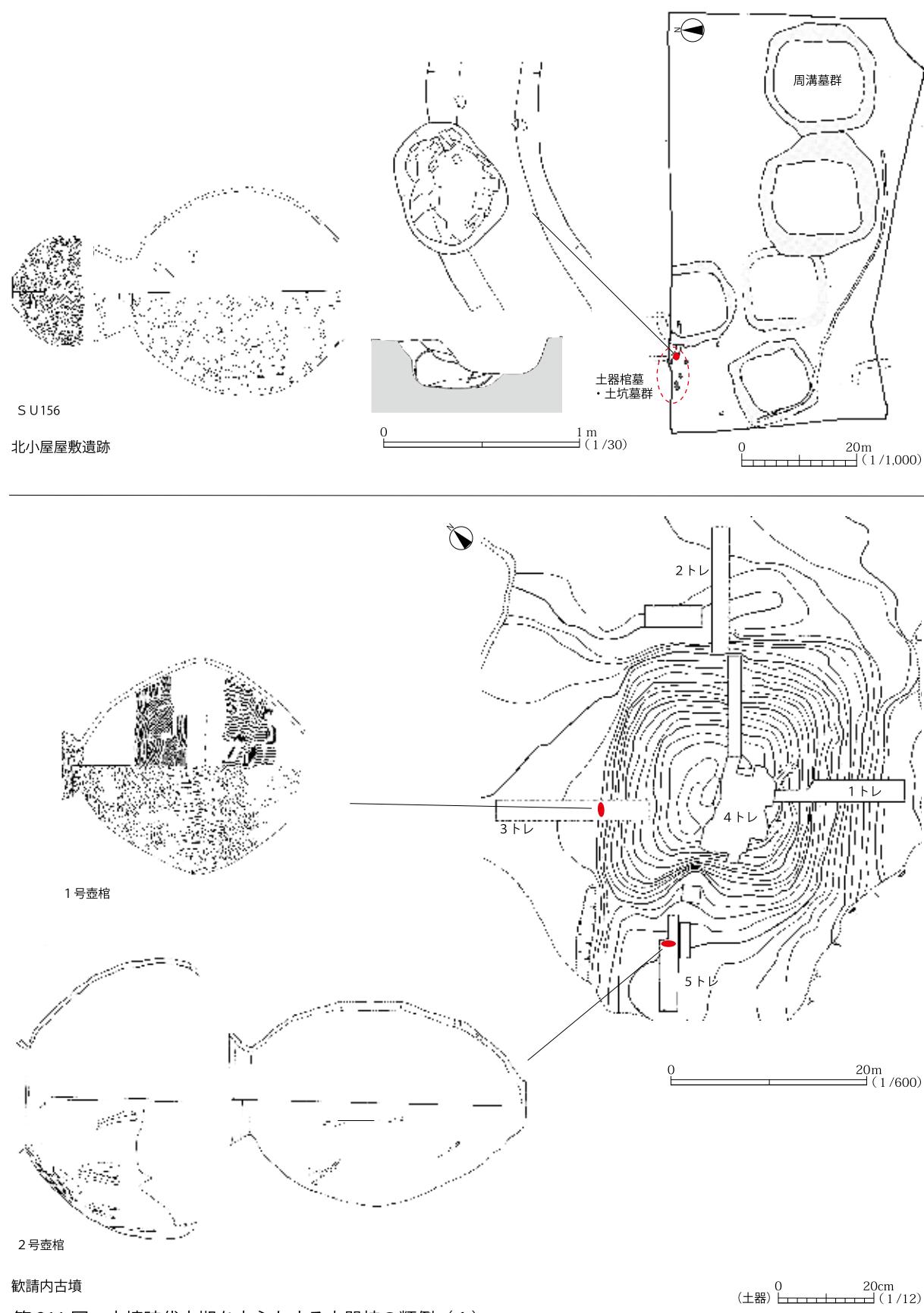
林遺跡1号土器棺は、埼玉県本庄市にある林8号墳（万年寺高山古墳）の8m北側に位置する（第212



第209図 埋葬施設関連遺跡分布図

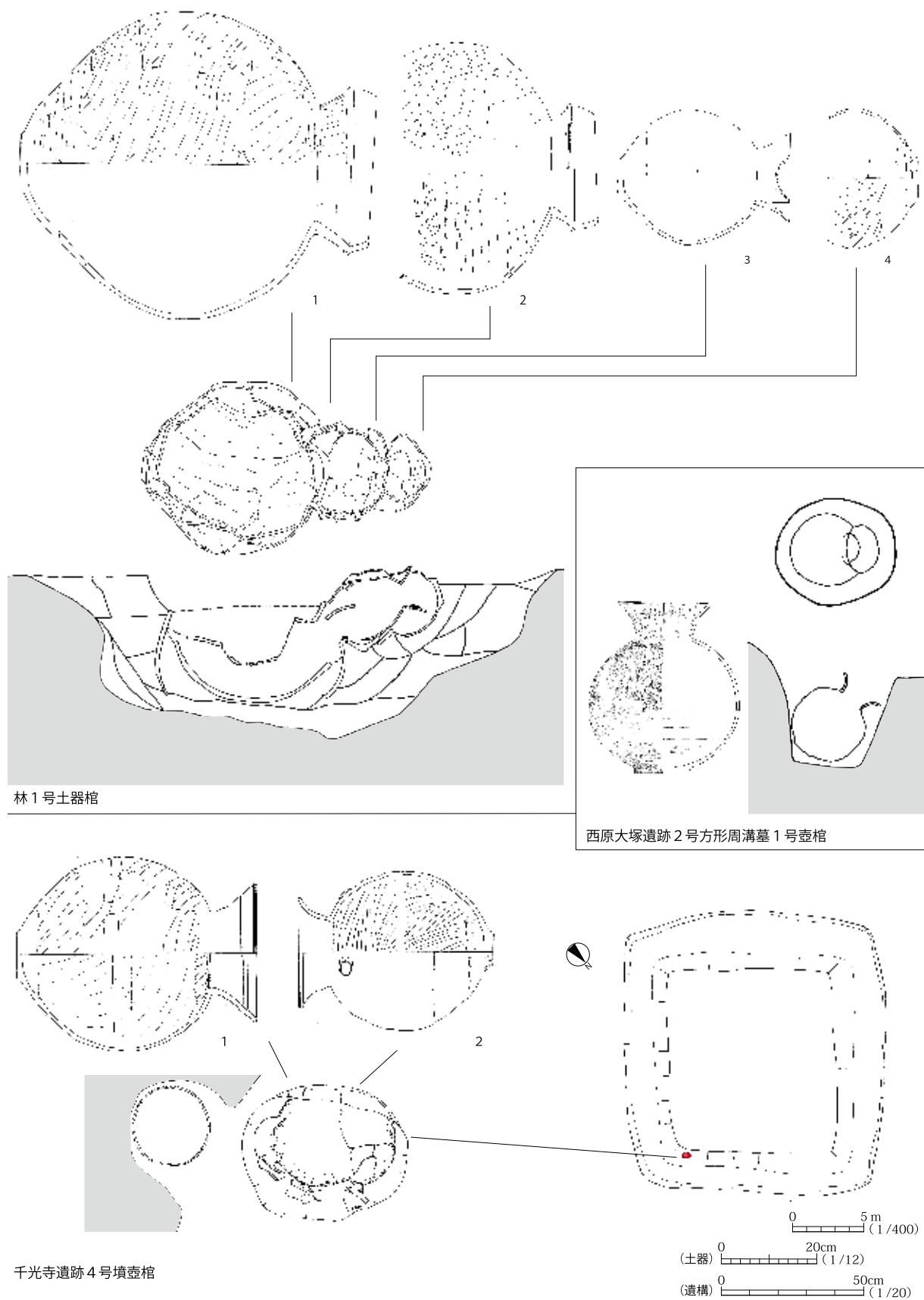


第210図 正直27号墳土器棺

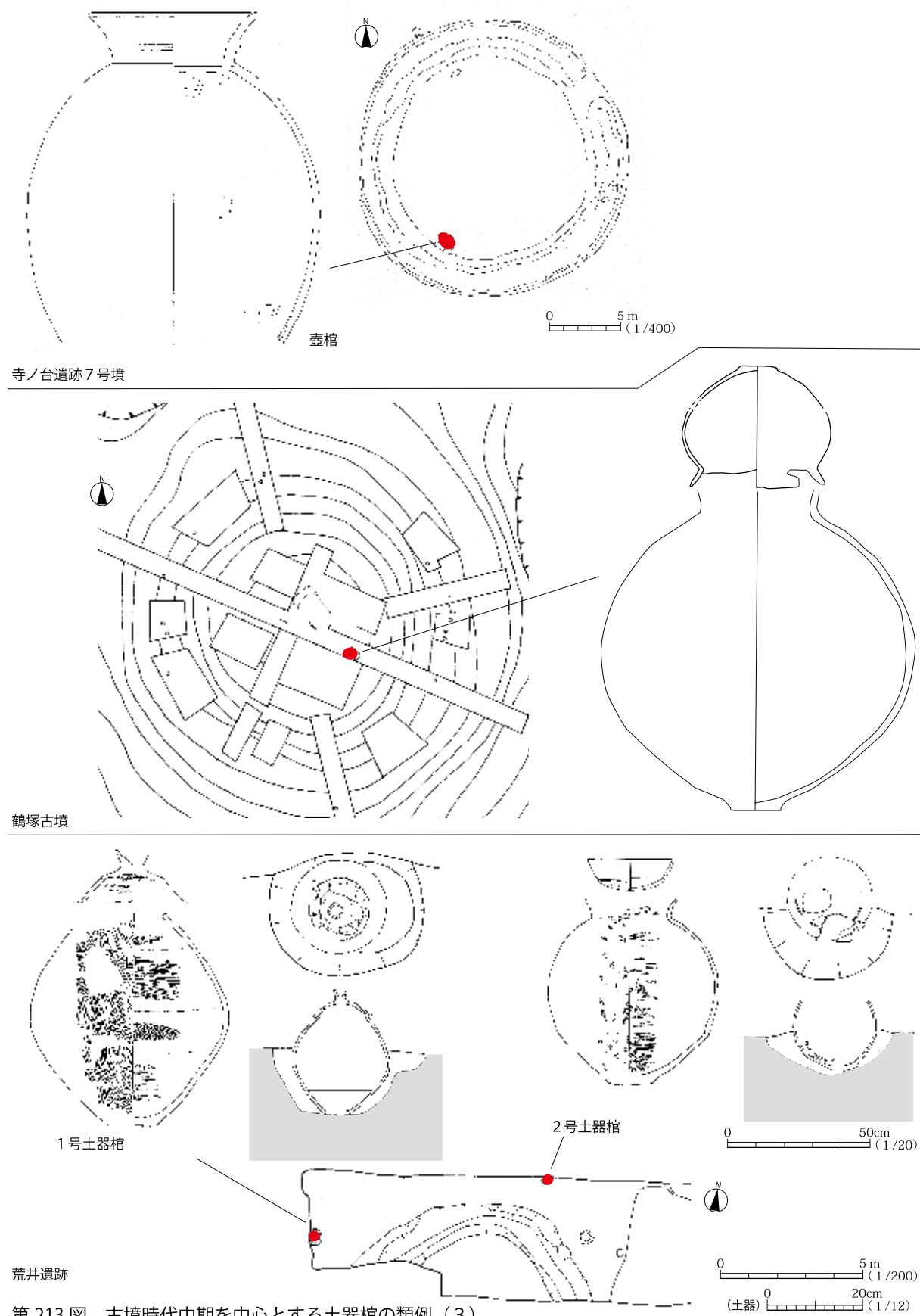


歓請内古墳

第211図 古墳時代中期を中心とする土器棺の類例 (1)



第212図 古墳時代中期を中心とする土器棺の類例（2）



第213図 古墳時代中期を中心とする土器棺の類例 (3)

図上)。土坑の中に棺身(棺本体)と棺蓋など、5個体の土器で構成される。掘り下げられた土坑の底に土が入れられ、ある程度平らにされた後、棺身の大型壺(1)が設置される。そして、棺身の底に敷かれまた口縁部に重ね合わされた大型壺(2)、口縁部から挿入された完形の壺(3)、棺身の口頸部に被せられた壺底部、壺(3)の口縁部を覆って被せられた壺底部(4)の5個体からなる。大型壺1と大型壺2はほぼ同大である。報文によればいずれも5世紀代の土器とされる(本庄市教育委員会2006)。

西原大塚遺跡は埼玉県志木市にある(第212図中)。2号方形周溝墓は、一辺7~8m溝により「コ」字状を呈する周溝墓である。1号壺棺墓は、東壁中央やや北よりで検出された。溝がある程度埋没した段階での埋納が想定されている。壺棺は、口縁部を周溝の内側に向けて斜め上向きに埋納されていた。土器は「五領式期」とされ、全く破損のない土器である。(志木市教育委員会委1991)。

千光寺遺跡は埼玉県深谷市にある(第212図下)。4号墳は長辺13.2×12.0mの方墳である。壺棺は東斜面から検出された。底は丸く土器を埋納することを想定し蓋の位置も考えて斜めに掘り込んでいる。主体となる壺は、頸部以上を打ち欠き、胴部を棺としている。そして、もう一方は半裁し、蓋としている。壺棺内に充満する土の中から、滑石の臼玉が7点出土している。4号墳は「五領末~和泉期初頭」に築造され、さほど時をおかずして壺棺が埋葬されたとされている(埼玉県遺跡調査会1975)。

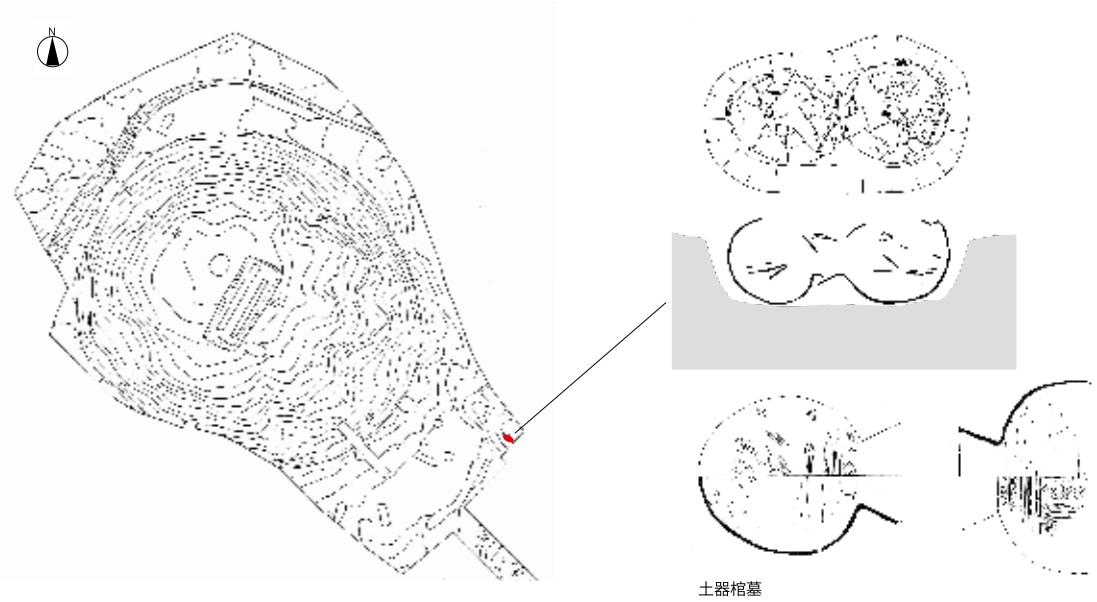
寺ノ台遺跡は埼玉県嵐山町にある(第213図上)。7号墳は、直径13.5mの円墳である。壺棺は、周溝内側の立ち上がりからわずかに離れ、南西の墳丘裾で検出された。掘り方の底部に密接して、底部を欠失する大型の壺と円筒埴輪の胴部上半が潰れた状態で出土した。円筒埴輪を蓋としていた可能性が高いと推定されている(埼玉県埋蔵文化財調査事業団1984)。

千葉県では、印西市鶴塚古墳がある(第213図中)。土器棺は中心から外れた墳丘内で検出されており、古墳に伴うものではない。なお、墳丘内で検出された類例に千葉県佐倉市にある岩名4号墳の土器棺がある(千葉県文化財センター2005)。

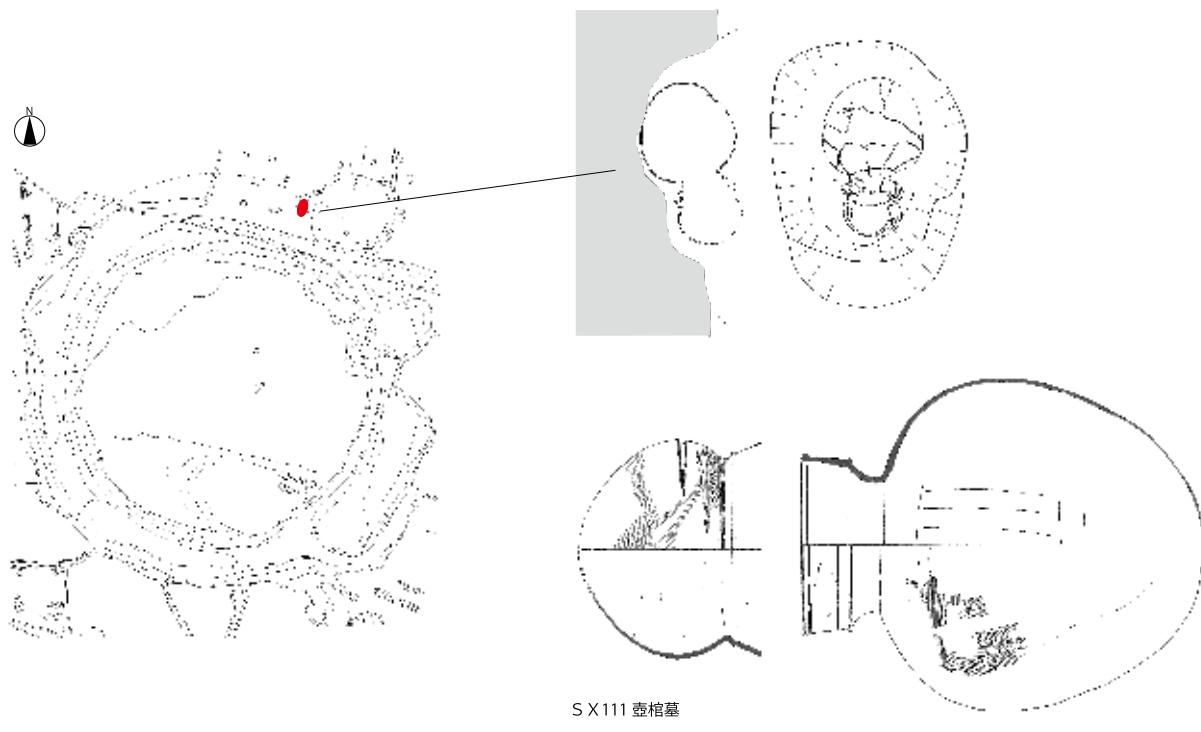
荒井遺跡は長野県千曲市にある(第213図下)。古墳時代前期の一辺6m前後の方形周溝墓の近くで2基の土器棺が検出された。1号土器棺は、長径55cmの楕円形の掘り方内に口縁部を欠いた壺を正位に立て、脚部を欠いた高杯を伏せて蓋としたものである。幼児骨の可能性が高い骨片が底部に堆積していた。内部から算盤玉形の滑石製の臼玉が出土している。2号土器棺は、掘り方内に壺を正位に立て、杯を伏せて蓋としていたものと思われるが、壺内に落ち込んでいた。いずれも5世紀で、1号が先行する。なお、報文によれば再葬の可能性が指摘されている(更埴市教育委員会1995)。

近畿地方中央部の2例に触れる(第214図上)。鞍岡山2号墳は、京都府精華町にある(第214図上)。鞍岡山古墳群は4基で構成されており、3号墳からは石製模造品などの出土が知られている。2号墳は丘陵の稜線を最大限に利用した不整形な円墳で、稜線方向27m・短軸方向は24mを測る。滑石製玉類などから、中期前半とされる。墳頂部では木棺直葬の埋葬施設が検出された。土器棺墓は、墳丘裾から南東に位置するテラス状平坦面で確認された。墓坑は東西方向に主軸をとり、墳丘と直交する形に近い。2個体の直口壺を合わせ口に棺身としている。片方の壺の口縁を大きく打ち欠き、東の壺に差し込むようしている。土器の形状から、2号墳の築造時期と同時期とされている(京都府埋蔵文化財調査研究センター2010)。

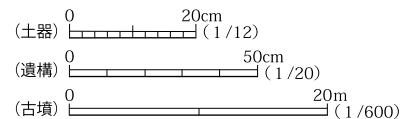
上人ヶ平20号墳は、直径約26mの円墳である(第214図下)。壺棺墓S X111は、20号墳の北方で、



鞍岡山 2号墳



上人ヶ平 20号墳



第214図 古墳時代中期を中心とする土器棺の類例 (4)

周溝内・あるいは外周部分に相当する場所で検出された。土坑は南北に主軸をとる。土坑内から二重口縁壺と甕が出土した。壺は横位の状態で据え、甕は口縁部を塞ぐ形で据えられ、壺の中からガラス小玉9点が出土している。土器の特徴から「布留式併行期の中にもあっても、中段階」の特徴を持つものとされている（京都府埋蔵文化財調査研究センター1991）。

3. 正直27号墳土器棺の特徴（第215図）

正直27号墳土器棺の特徴として、壺の長軸方向に古墳の中心があること、口縁部を二重にして厳重に密封すること、横倒しにしていることなどが挙げられる。古墳の墳裾に沿うのではなく壺の長軸方向を古墳に向いている点については、西原大塚遺跡2号方形周溝墓や鞍岡山2号墳、上人ヶ平20号墳などで見られる。厳重に密封する点は、多くが1つの蓋となる土器を使用するのに対し、林1号土器棺では棺身の他に4つの土器が使用されるものがある。また、横倒しにするものの他、口縁部を上に向けるものも少なからず見られる。そのため、埋葬に対しての厳密な規範などは見られない。

土器棺は、墳丘外埋葬・周辺埋葬という位置付けにある。東北地方南部の古墳時代で最も特徴的な墳丘外埋葬に埴輪棺がある（第215図）。天王壇古墳は、福島県本宮市にある造り出し付円墳である（本宮町教育委員会1984）。直径38mを測り、東国における出現期の埴輪が出土した。墳丘に樹立された埴輪を利用しておらず、古墳築造より時期は降るもの、どの程度の時間差を有するかは明確にできない。

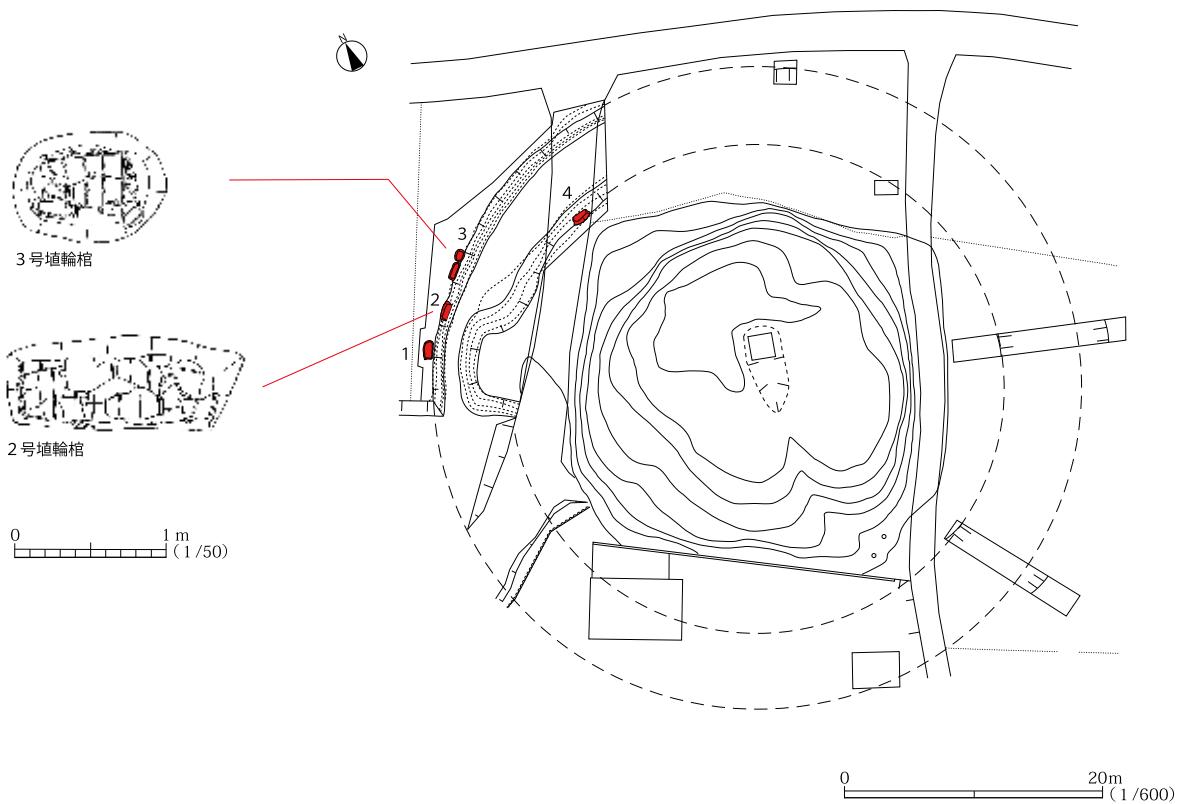
白河市の大塚1号墳のあり方は特徴的である。墳丘は調査時には失われていたが、全長20mほどの前方後円墳で中期後半の築造とされ、墳丘外から土坑と埴輪棺が確認されている。3～5号土坑はその位置から古墳に近接し、墳形に影響を受けた配置となる。墳丘外の埋葬施設となる可能性が指摘されている。なお、円筒埴輪は、周溝の内側と外側から出土しており、周溝を破壊していることや埴輪の特徴などから、後期中葉・後半と考えられている（白河市教育委員会2012）。

正直27号墳の土器棺からは人骨が出土していないが、幼児・小児が埋葬されたと考えられる。長方形の土坑などは墳丘との関係性が捉えられやすいが、土器棺についても長軸・短軸を揃えるなど、墳形に影響を受けた可能性がある。そして、27号墳の石棺に埋葬された人物の近親者であったと考えるのが妥当であろう。そして、第1節での分析などから、棺に用いられた壺は埋葬時に作られたのではなく、祭祀用に使用された大型の壺が転用された可能性が高い。

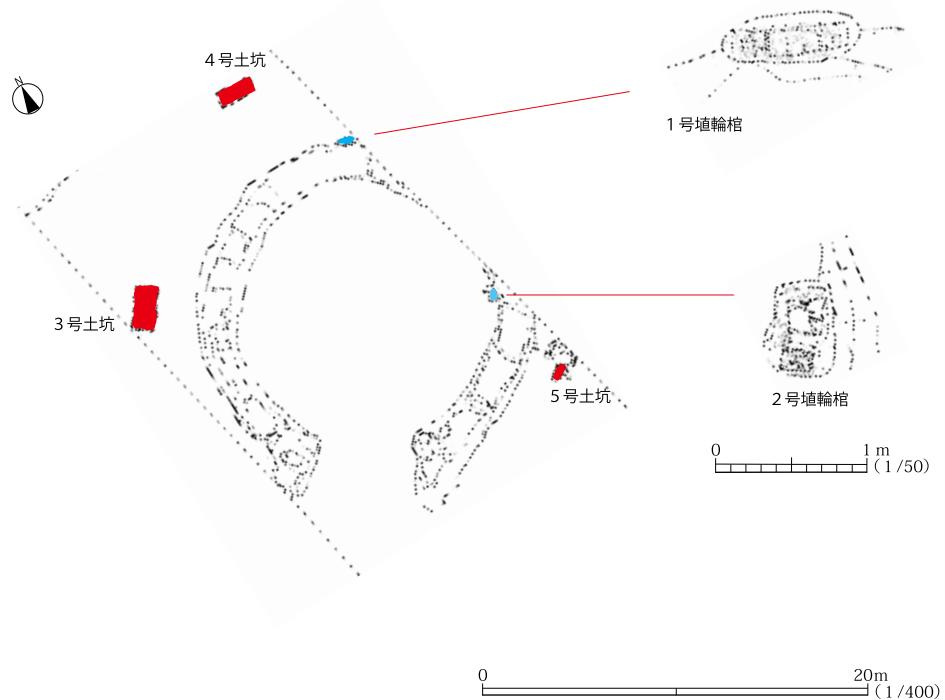
（4）箱式石棺と複数棺埋葬・1棺複数埋葬

1. 箱式石棺（第216・217図）

正直27号墳を特徴付けるものの1つが長大な箱式石棺である¹⁾。福島県内の5世紀～6世紀初頭の箱式石棺を、規模の大きな順に見ていく。正直27号墳北箱式石棺が452×45～51cm、正直27号墳南箱式石棺が259×49cmを測る。遺存状態の悪い正直13号墳箱式石棺も残存する底石から250cm前後になると推測される。180～200cmの石棺は多く、上の原4号墳（204×39cm）、小浜2号墳（197×49cm）、上の原3号墳1号箱式石棺（190×50cm）、灰塚山古墳第2主体部（186×43cm）、胡麻沢古墳北棺（186×37.5cm）などがある。160～170cmでは、横山4号墳（170×37cm）、仏坊12号墳墳丘外埋葬（155×50cm）、江平31号墳（165×40cm）がある。そして、小規模なものに菊竹2号墳墳丘端埋葬（109×24cm）、江平遺跡305号土坑（85×24cm）、上の原1号墳（60×28cm）がある。これらは長軸もさることながら、

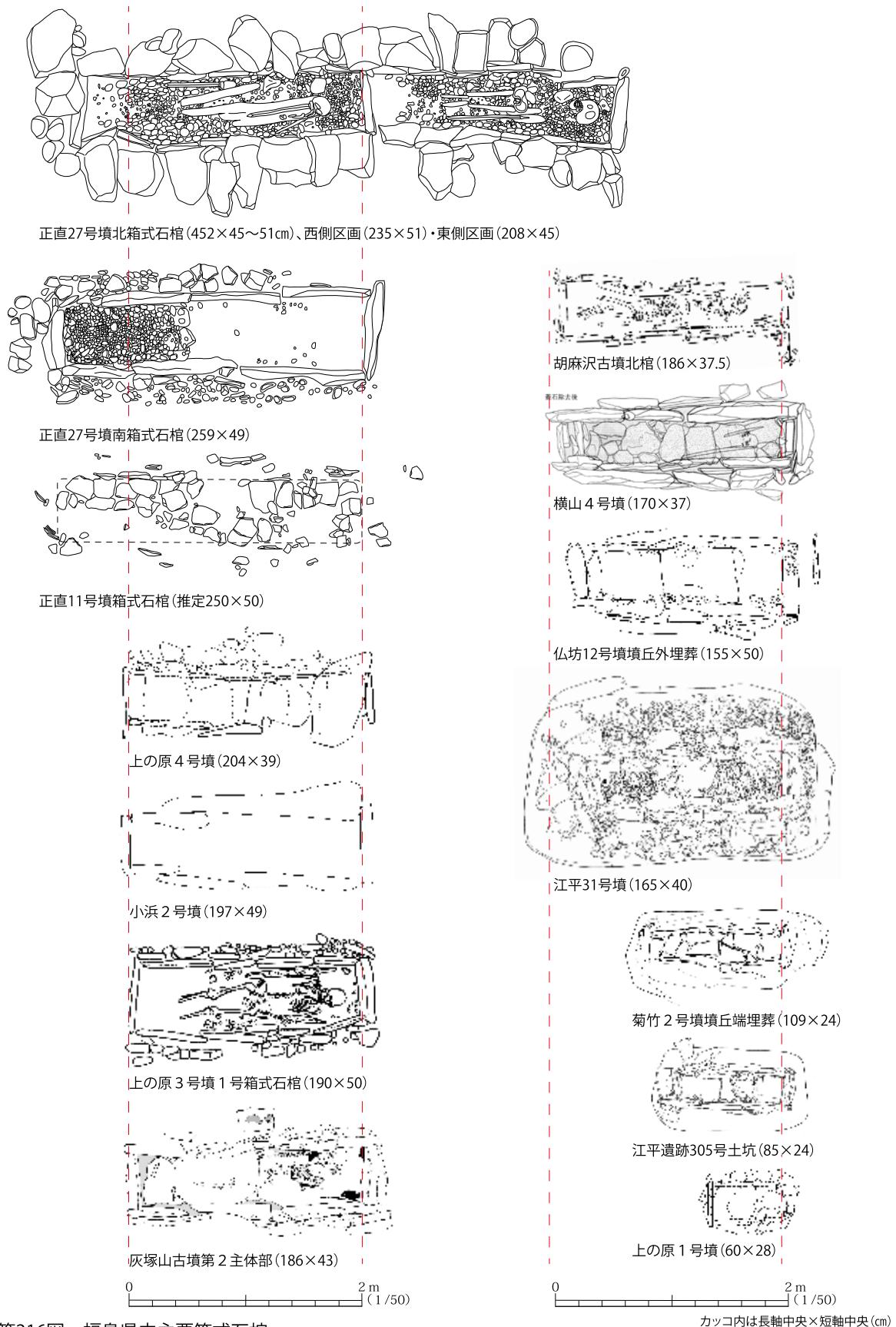


天王塚古墳

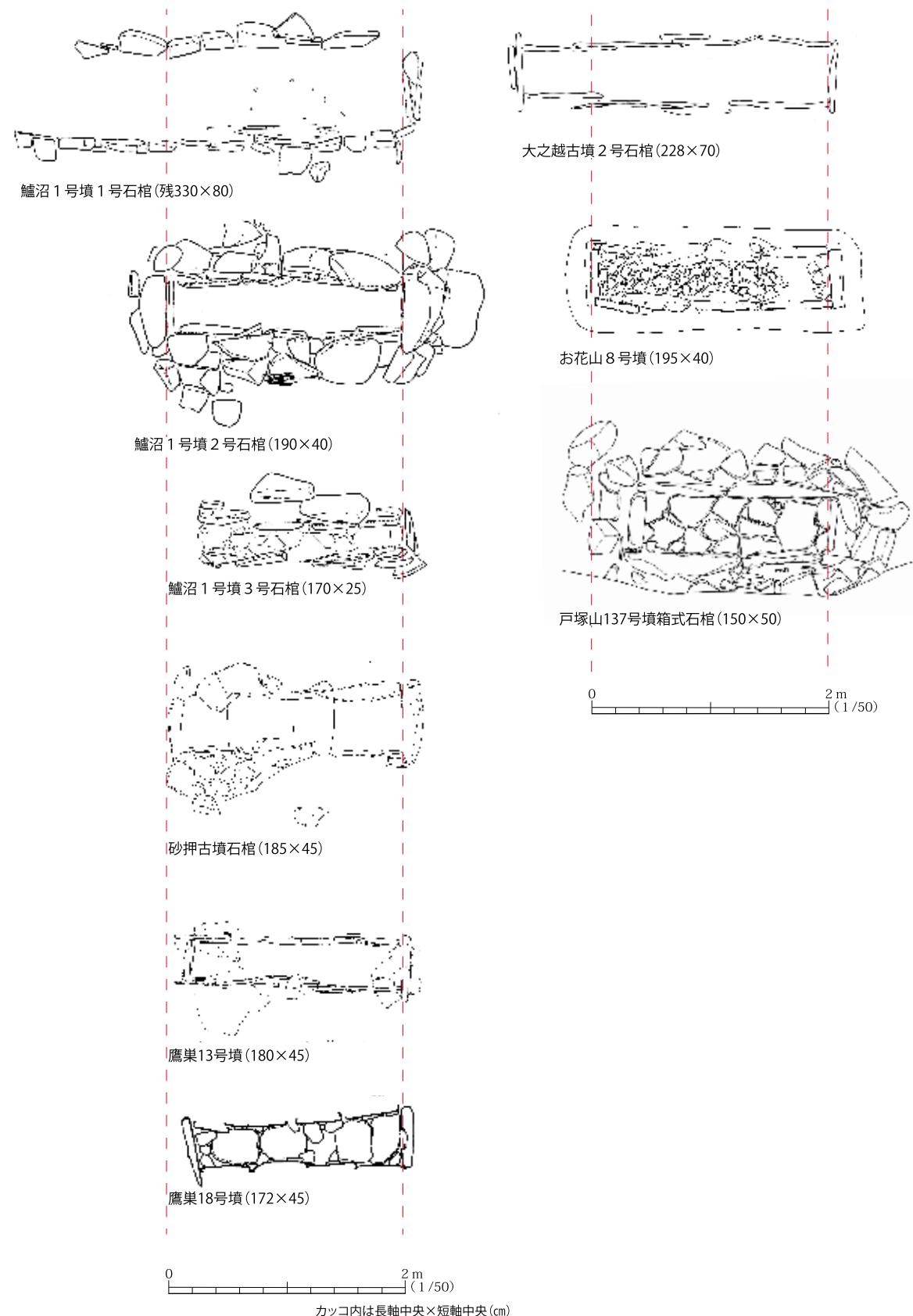


大塚古墳

第215図 埋葬施設類例



第216図 福島県内主要箱式石棺



第217図 東北地方主要箱式石棺

短軸・幅も 24~28 cm と通常のものの半分で、小児の伸展葬を意図したものと思われる。

宮城県の事例を見てみる。鱸沼 1 号墳では 3 つの石棺が検出されている。最大の 1 号石棺は残 330×80 cm、2 号石棺は 190×40 cm、3 号石棺は 170×25 cm である。その他、砂押古墳石棺 (185×45 cm)、鷹巣 13 号墳 (180×45 cm)、鷹巣 18 号墳 (172×45 cm) がある。山形県では、最大のものは大之越古墳 2 号石棺で 228×70 cm を測る。その他、お花山 8 号墳 (195×40 cm)、戸塚山 137 号墳 (150×50 cm) がある。

正直 27 号墳の北箱式石棺は、その規模もさることながら、内部を仕切られ、東西 2 つの区画に分けられるという特殊な構造を呈していることは特筆すべき点である。こうした構造の箱式石棺は全国的にも類例は知られておらず、特殊な埋葬形態であると言える。

2. 複数棺埋葬（第 218~220 図）

正直 27 号墳の 2 つの箱式石棺は、同時に構築された可能性が高い（第 218 図）。その理由として、2 基の箱式石棺の中間地点に墳丘の中心があるという平面的位置関係、石棺基底面のレベルがほぼ等しくなる点などが挙げられる。それは、両箱式石棺に副葬された石製模造品の共通性からも首肯される。

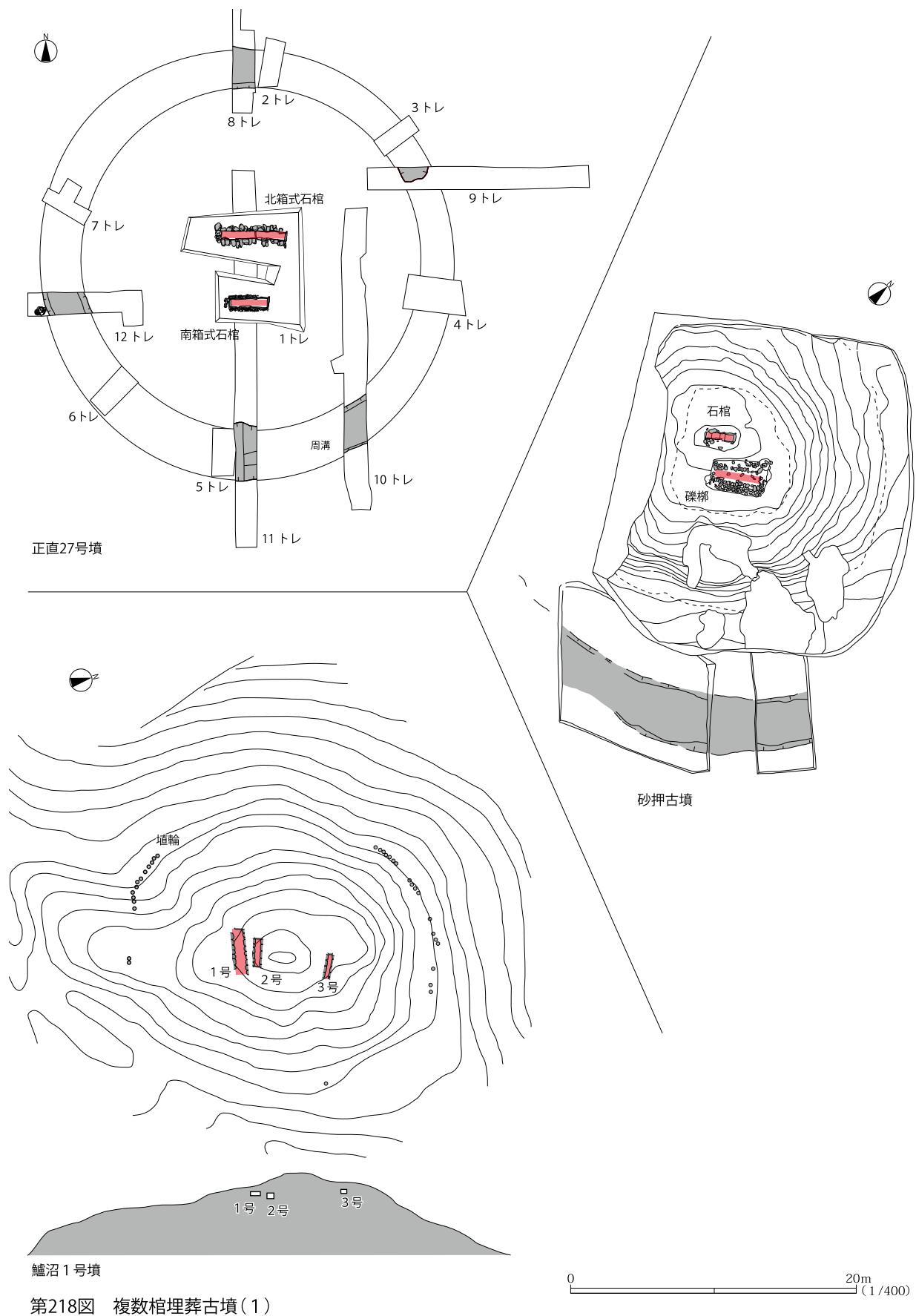
東北地方の同時期の古墳においては、複数の棺が埋葬されるものはいくつか確認される。前述の箱式石棺を中心にもみても、正直 13 号墳で 2 基の箱式石棺が、浪江町上の原 3 号墳では 1~3 号の 3 基の石棺が確認され、喜多方市灰塚山古墳では木棺直葬と箱式石棺が、棚倉町胡麻沢古墳も箱式石棺 2 基が並列する。この他、会津若松市の村北 5 号墳、喜多方市の十九塙 4 号墳、浪江町本屋敷 3 号墳でもそれぞれ 2 基の箱式石棺が確認されている。なお、須賀川市の甲塙古墳では、木炭槨・粘土槨・箱式石棺の 3 基の埋葬施設が確認されている。

宮城県では、角田市の鱸沼 1 号墳で 1~3 号石棺の 3 基の箱式石棺が確認されている（第 218 図）。中期～後期初頭とされ、墳丘の中央部に空間がある。その南北に石棺が位置するが、3 つの棺の関係は明らかではない。仙台市砂押古墳は 5 世紀後半～6 世紀前半とされ、箱式石棺と礫槨が確認されている（第 218 図）。2 つの埋葬施設は並列するものの、礫槨が縁辺に寄った位置にあり、平面的位置からは同時期性に積極的に言及することは難しい。また角田市横倉古墳群の松崎古墳でも 1・2 号石棺の 2 基の石棺が検出されている。

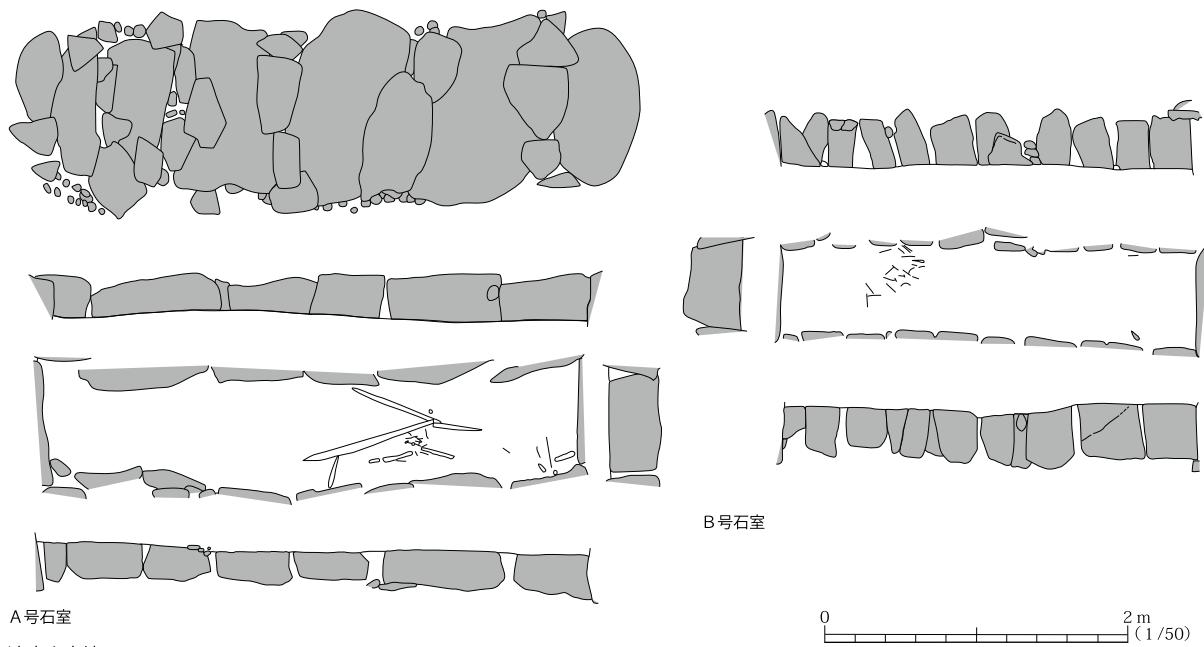
山形県では山形市大之越古墳で 1 号石棺と 2 号石棺の 2 基の石棺が確認されている。2 号棺の一部を破壊する形で 1 号棺が構築されている。

このように、東北地方において箱式石棺を中心とする 2 基の埋葬施設が並列する事例はいくつか見られる。しかし、正直 27 号墳の例のように両者の関連性を積極的に指摘できる例を東北地方の古墳に見出すことは難しい。そのため、関東地方の類例と比較してみたい。

群馬県では、伊勢崎市の達磨山古墳が知られる（第 219 図）。直径 35m の円墳で、墳頂部に粘土槨とそれに直交する形の埋葬施設が 2 基並列して構築されている。文献では埋葬施設は「箱式棺状石室」と呼称されているが、いわゆる箱式石棺と同形態である。石室はほぼ同一レベルで検出された A 号石室と B 号石室がある。A 号石室は規模 390×80 cm、B 号石室は 280×55 cm を測り、規模の大きい 2 基の石棺が、墳丘の中心を挟んで対称の位置に並列する。また、A 号石室は石材を横長になるように使用し、B 号石室は縦長になるように使用している。両者は同時期と考えられるが、異なる石材の使い方をしてい

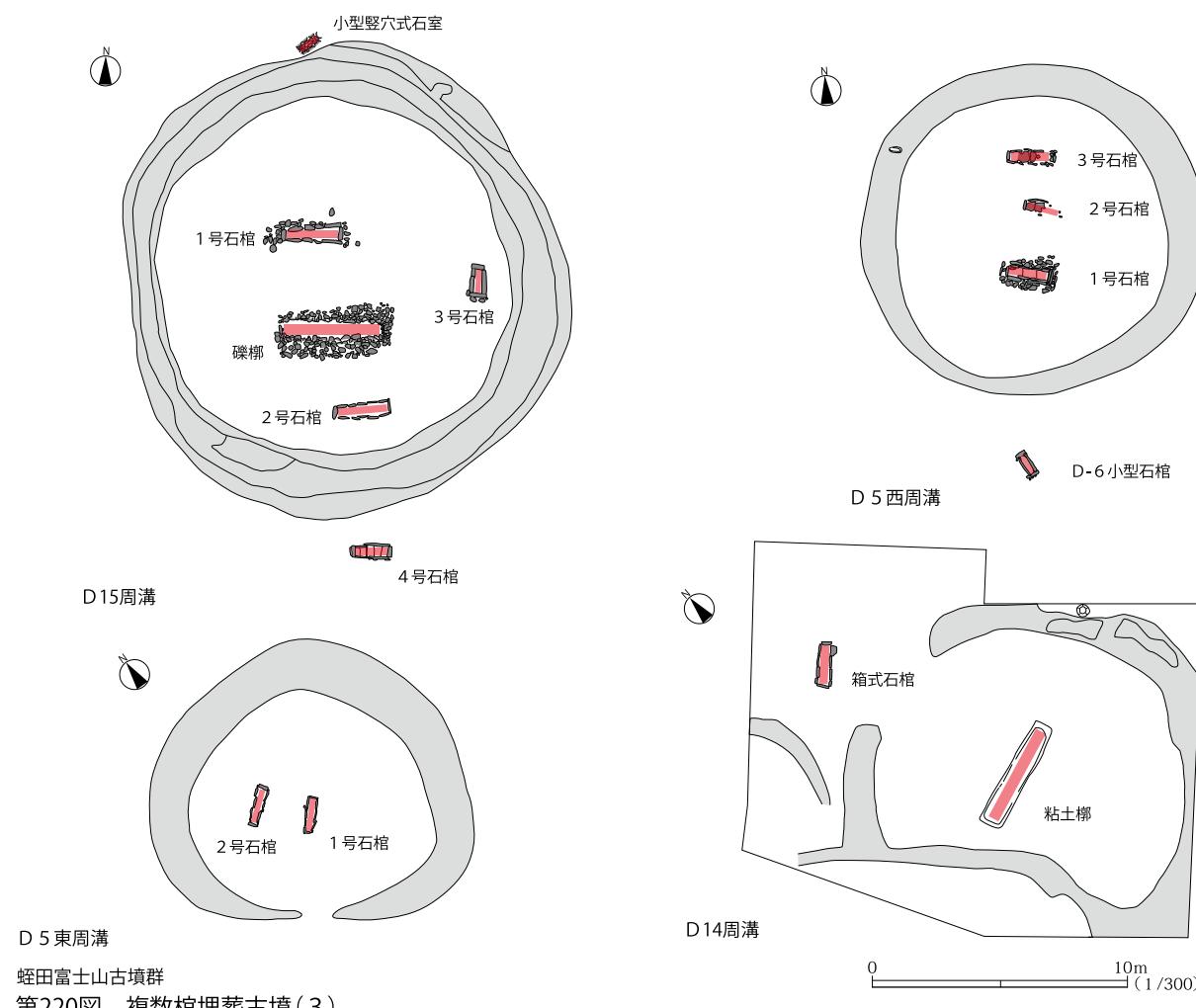
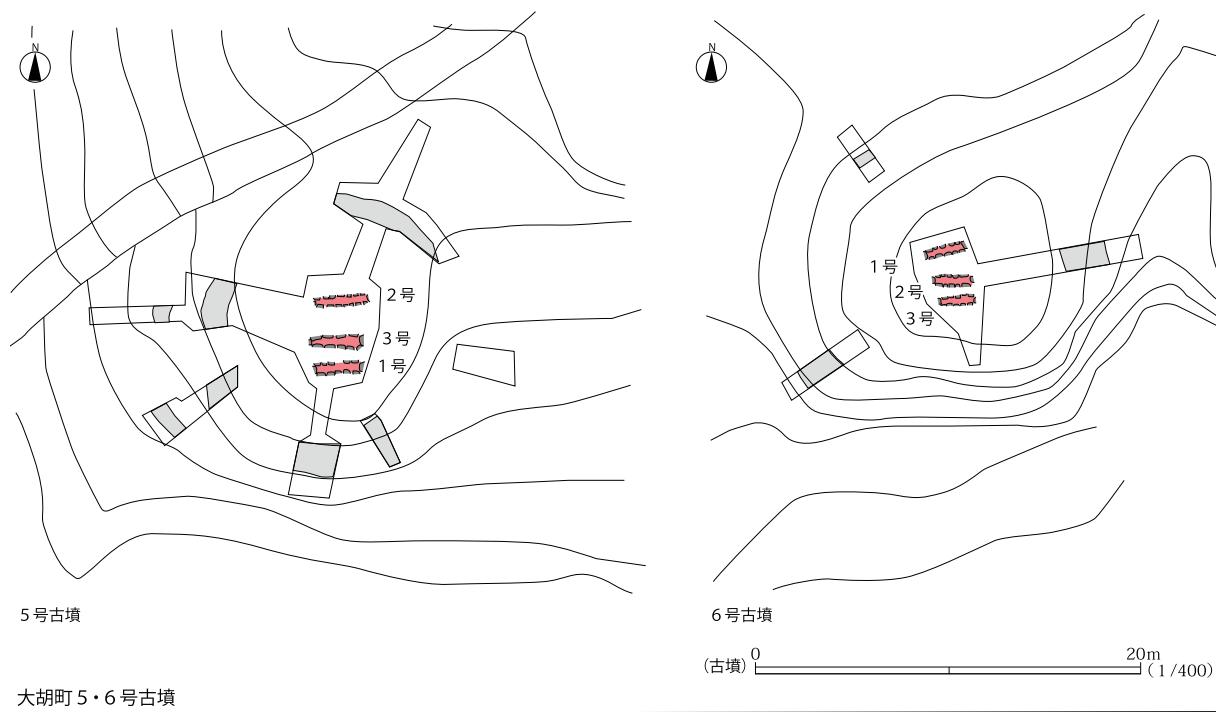


第218図 複数棺埋葬古墳(1)



A号石室
B号石室
達磨山古墳

第219図 複数棺埋葬古墳(2)



る点は注意される。達磨山古墳と正直 27 号墳を比較すると、埴輪の有無という点で相違が見られるが、埋葬施設のあり方は非常によく似た内容であることが分かる。

前橋市の大胡町 5 号及び 6 号墳では、それぞれ 3 基の箱式石棺が確認されている（第 220 図上）。大胡町 5 号墳は直径 14.40m の円墳で、長軸 2 m 弱の石棺が東西に軸を揃えて並列する。1・3 号石棺はレベルを等しくするのに対し、2 号石棺は高く、平面形がやや異なる。6 号墳は直径 17.5m の円墳で、5 号墳と同じように長軸 2.0m 弱の石棺が東西に軸を揃えて平行に位置する。レベル・軸線を等しくする 2・3 号石棺が同時に作られ、1 号石棺が時間差をもって構築されていることが分かる。なお、築造時期は 5 世紀後半～6 世紀初頭と考えられる。

栃木県の類例を概観する。栃木県では、大田原市の蛭田富士山古墳群（第 220 図下）・酢屋古墳群、那珂川町の谷田 1 号が知られる。蛭田富士山古墳群では、D15 周溝で 1 号石棺と礫榔が墳丘の中心から対称の位置にあることから、同時埋葬の可能性が高いとされている。D5 西周溝では、1 号・2 号の 2 基の石棺を構築する計画で古墳が作られ、後に 3 号石棺が作られたとされる。D5 東周溝では中央の 1 号石棺が中心埋葬である。谷田 1 号墳では、主軸を異にする 2 基の箱式石棺が確認されている。なお、箱式石棺ではないが、宇都宮市の直径 12m の円墳・城南三丁目 1 号墳では、木棺直葬の埋葬施設が並列して 2 基確認されている。5 世紀後半～6 世紀初頭にかけて、栃木県内における箱式石棺の分布が県北部の那珂川上流域にほぼ限定される。これは東北地方における同時期の箱式石棺と連動した動きと捉えることも可能である。

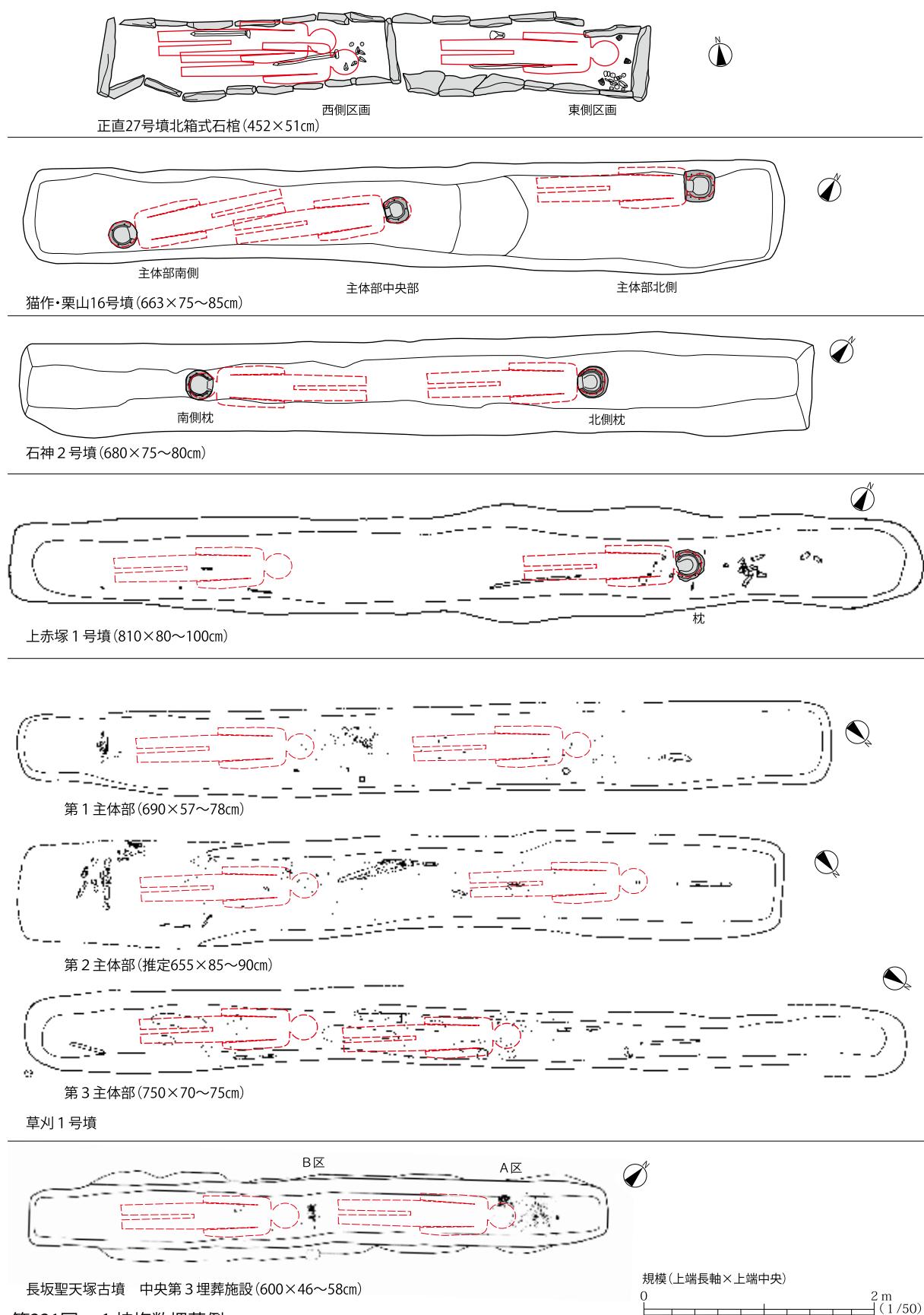
上述したように、2 基の箱式石棺の中間地点に墳丘の中心があるという平面的位置関係、石棺基底面のレベルがほぼ等しくなる点、そして 2 基の石棺の石材の使われ方などで、正直 27 号墳は達磨山古墳との共通性を指摘できる。

3. 1 棺複数埋葬（第 221 図）

正直 27 号墳の埋葬施設は 1 つの箱式石棺が内部中央で仕切られ、その両側の区画それぞれに埋葬された特殊なあり方を呈する。そもそも、当該期の箱式石棺は遺体 1 体を埋葬する目的で作られるものであり、管見によるかぎり同様の構造となる箱式石棺の類例は知られていない。一方、同時期における埋葬施設のうち、木棺では 1 棺に複数埋葬される事例が知られている。

同時期の事例で先ず想起されるのが、石枕を有する埋葬施設である。常総型石枕の分布圏では、木棺直葬と考えられる埋葬施設から複数の石枕が出土する事例が知られる。人骨が残る事例は知られていないものの、石枕の平面的位置から複数の埋葬が考えられる。以下、千葉県の事例に触れる。成田市猫作・栗山 16 号墳では、長軸 663 × 短軸 75～85 cm の埋葬施設から、主体部南側・主体部中央部・主体部北側の 3 か所で石枕が確認されている（香取郡市文化財センター 1995）。このうち中央部と南側では、それぞれの頭位を反対側に向けるように置かれたと想定される。千葉市石神 2 号墳では、長軸 680 × 短軸 75～80 cm の埋葬施設で頭を反対に向けるように、石枕が出土した（千葉県文化財センター 1977）。千葉市上赤塚 1 号墳では、長軸 810 × 短軸 80～100 cm の埋葬施設が確認され、その北東側に寄った位置に石枕が置かれる。被葬者の足元となる空間は広く反対側の南西側では遺物が見られることから、石枕は確認されていないものの、もう 1 体埋葬されている可能性がある。

千葉県市原市草刈 1 号墳では、石枕の出土はないものの複数の埋葬が想定される（千葉県文化財セン



第221図 1棺複数埋葬例

ター2004)。第1～3主体部の3つの埋葬施設は、いずれも長軸600cmを超える長大な木棺である。このうち第1・2主体部では、遺物が両小口付近そして中央部に分布し、その間に遺物の希薄な空間があり、そこに埋葬された可能性がある。また第3主体部では、骨片の分布から南側と中央部に被葬者が想定される。なお北側にも空間があり、鉄器があることからさらに1人の被葬者を想定できるかもしれない。

埼玉県美里町長坂聖天塚古墳でも、複数の埋葬施設が確認されている(美里町教育委員会 2016)。そのうち中央第3埋葬施設では長軸方向600cmの埋葬施設の北小口付近(A区)と中央部(B区)に玉類の集中がある。この付近を頭部とする2人の被葬者が想定される。

現段階では、正直27号墳における1つの箱式石棺で長軸方向に複数の人物の埋葬が行われるあり方には類例が知られていない。そのため、石枕の存在から明らかとなるような、木棺における複数埋葬から影響を受けていた可能性も考えられる。

註

- 1) 正直古墳群の埋葬施設については、石橋宏氏より次のようなご教示を得ている。

正直30号墳の墳丘外埋葬施設で底面に礫がない構造について、「一応壁面形成の意識があり、上部が土ないし礫で埋め戻す構造と考えております」と、礫櫛の中で捉えておりまして、礫櫛で把握することが適切であるとされている。

正直27号墳の長大な石棺について、「群馬県で、箱式石棺状竪穴式石室と言われているものと思いますが、正直27号墳の事例が直接群馬県との関係で捉えられるかは、検討中ですが、竪穴式石室と箱形石棺が融合してきたような埋葬施設です。蓋石の大きさが棺身に対して、過剰に大きいものも多く、単なる箱形石棺が、情報伝播したような印象ではなく、群馬県伊勢崎市達磨山古墳や、栃木県佐野市八幡山古墳など2メートルを超える例が多いと思います。このような竪穴式石室と箱形石棺が影響を与え合うような様相は、北部九州や徳島でも、若干の様相が違いますが、あります。関東・東北では、箱形石棺と竪穴式石室が前期に導入されておらず、中期にどのように波及するか整理する必要があるのです」と、単なる箱式石棺の情報伝播ではなく、竪穴式石室と箱式石棺が融合して生じた可能性を指摘されている。また仕切りを持つ構造について。「木棺や竪穴式石室の2遺体の合葬の意識に近いと思いますので、竪穴式石室に近い例であることを考慮すると、付近に類例がなくてもいいのかなと考えております」とご教示を得ている(2022年11月25日)。

引用・参考文献

- 青木 敬 2017『土木技術の古代史』 吉川弘文館
- 石橋 宏 2018「東日本における礫構造を持つ竪穴系埋葬施設について」『野本將軍塚古墳と東国の前期古墳』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所
- 神林幸太朗 2024「古墳時代前期の土器埋設遺構を考える」『考古学論究』23号 立正大学考古学会
- 菊地芳朗 2020「東北の古墳時代中期—埋葬施設と副葬品を中心とした考察」『宮城考古学』第22号 宮城県考古学会
- 志間泰治 1959「角田氏鱸沼古墳」『考古学雑誌45—3』 日本考古学会
- 辻秀人編 2023『灰塚山古墳の研究』 雄山閣
- 中川伝吾・中村五郎・大川原栄喜・穴澤和光・小滝利意 1973「塩川十九塚古墳群調査報告」『福島考古』第14号

山田俊輔 2005「古墳時代中期群集墓分析の新視角」『考古学ジャーナル』No.528 ニュー・サイエンス社 19-21頁

報告書等

- いわき市教育委員会・いわき市教育文化事業団 2002『横山古墳群』
- いわき市教育委員会・いわき市教育文化事業団 2005『菊竹遺跡』
- 香取郡市文化財センター 1995『猫作・栗山16号墳』
- かながわ考古学財団 1995『かながわ考古学財団調査報告3:池子遺跡群』
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2010「八幡木津線関係遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第140冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991「上人ヶ平遺跡の遺構と遺物」『京都府遺跡調査報告書』第15冊
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013『綿貫伊勢遺跡』
- 更埴市教育委員会 1995『荒井遺跡III 宮裏遺跡』
- 埼玉県遺跡調査会 1975『千光寺遺跡』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書32:屋田・寺ノ台』
- 志木市教育委員会委 1991『志木市遺跡群 III』志木市の文化財 第16集
- 白河市教育委員会 2012『舟田境遺跡(第3次調査) 大塚遺跡 発掘調査報告書』
- 白石市教育委員会 1967『鷹の巣古墳群第1号・第13号緊急発掘調査報告書』
- 須賀川市教育委員会 1998『仏坊古墳群』
- 仙台市教育委員会 2009「砂押古墳」『平成20年度発掘調査概報』仙台市第347集
- 棚倉町教育委員会 1982「胡麻沢古墳の発掘」『棚倉町史 第1巻』
- 千葉県文化財センター 1977『東寺山石神遺跡』
- 千葉県文化財センター 2004『千原台ニュータウンX I -市原市草刈遺跡(C区・保存区)-』
- 千葉県文化財センター 2005『佐倉印西線埋蔵文化財調査報告書2 佐倉市岩名古墳群』
- 東北学院大学 2011『歓請内古墳発掘調査報告』
- 栃木県教育委員会 1972『蛭田富士山古墳群』
- 富岡町教育委員会 1985『小浜古墳群調査概報』
- 福島県 1964『福島県史』第6巻・資料編1・考古資料
- 福島県教育委員会 2002「江平遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告』12
- 法政大学文学部考古学研究室 1985『本屋敷古墳群の研究』
- 本庄市教育委員会 2006『旭・小島古墳群』
- 美里町教育委員会 2016『長坂聖天塚古墳』
- 本宮町教育委員会 1984『天王塚古墳』
- 山形県教育委員会 1979『大之越古墳 発掘調査報告書』
- 山形県教育委員会 1985『お花山古墳群発掘調査報告書』
- 山形県埋蔵文化財センター 2002『北小屋屋敷遺跡発掘調査報告書』
- 湯津上村教育委員会 1978『酢屋古墳群』
- 米沢市教育委員会 1983『戸塚山第137号墳発掘調査報告書』

第6章 正直古墳群の歴史的意義

前章までにやってきた個別分析で得られた結論を有機的に結び付け、正直古墳群の意義について考える。先ず遺構、そして遺物の変遷から、小規模古墳群の変遷と構造を明確にする（第1節）。次に研究史に照らし合わせ、東北地方における中期古墳の様相について考察する（第2節）。そして、石製模造品から葬送の状況をより鮮明にする（第3節）。最後に正直古墳群の意義を明確にするとともに（第4節）、保存活用と今後の展望について述べる（第5節）。

第1節 古墳群の構造と変遷

（1）古墳の規模と支群の構造（第222図）

正直古墳群は、立地上のまとまりなどから、支群A～Hにグルーピングされる。支群A～Gの中で出土遺物から築造時期に言及できる古墳には、支群の中でそれぞれ最大規模を誇る支群Aの正直35号墳、支群Fの21号墳、支群Bの27号墳、支群Cの23号墳、支群Dの30号墳がある。古墳の数に比較し調査された古墳は決して多くはないものの、それぞれの支群において最大の古墳が調査できたことは幸いである。石製模造品や土器を中心とする遺物から導かれる時間的位置付けは、35号墳が最も古く、その次に21号墳が築造される。そして27号墳、23号墳が続き、30号墳が新しいという関係で捉えられる。支群E・Gの古墳は調査が行われておらず、時期を比定する資料に恵まれない。

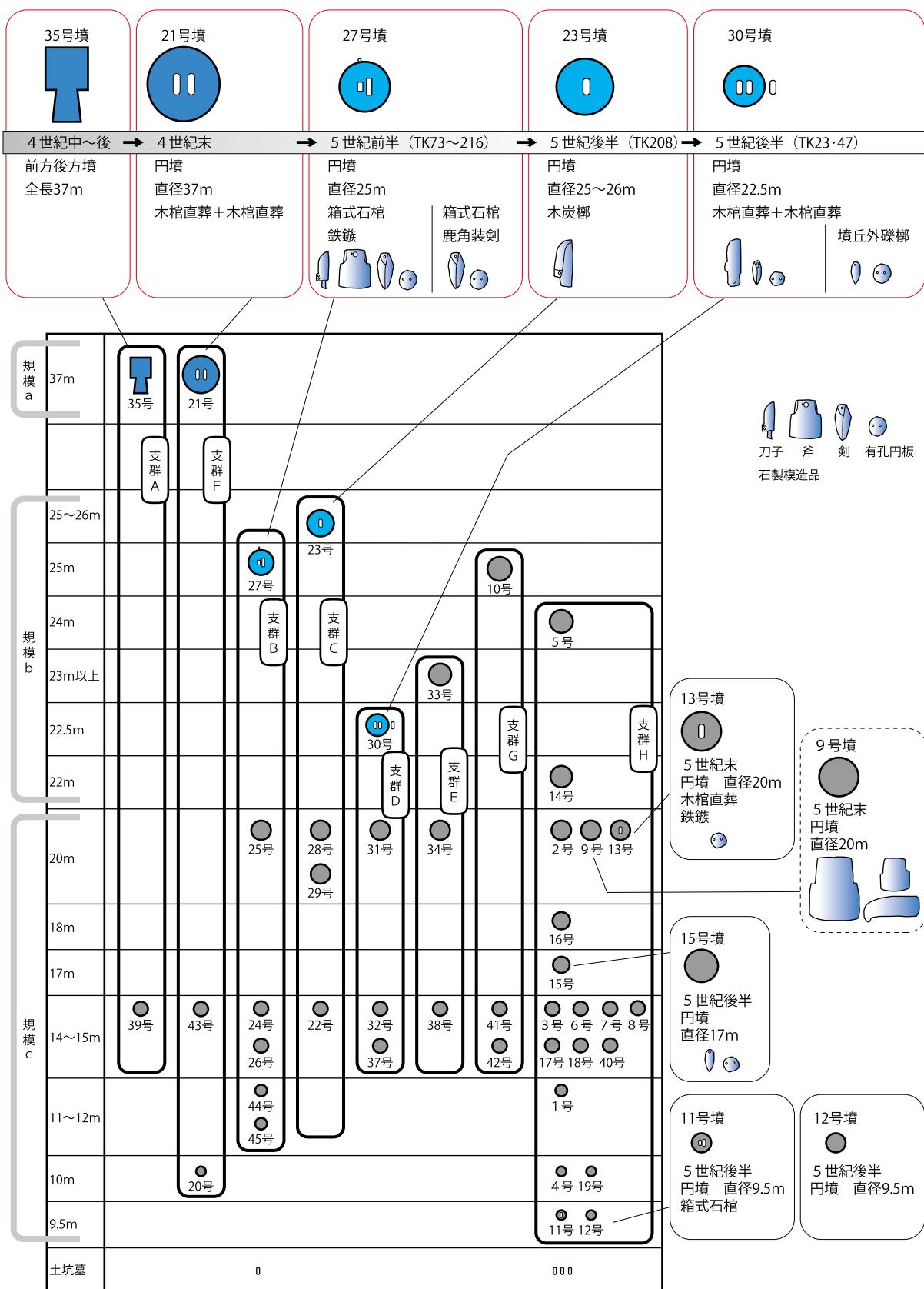
支群Hは古墳が密集して築造される特徴的なあり方を示し、この点からも支群A～Gとの相違は明らかである。支群Hでは正直11～13・15号墳が調査され、その築造時期は5世紀後半、近畿地方中央部では、大阪府藤井寺市の市野山古墳や岡ミサンザイ古墳が築造された頃、また群馬県では前橋市の舞台1号墳や高崎市の保渡田八幡塚古墳が築造された頃で、支群A～Gの時期と重なりながらも相対的に新しいことが分かる。支群Hの中で最大の古墳は直径24mの5号墳で、傑出することのない19基の古墳が密集して築造される状況から、支群Hは同規模の古墳の群集という色彩が強い。

支群内部での各古墳間の規模に着目した場合、時期的に先行する支群ほど支群中最大の古墳とそれ以外の古墳との差が顕著で、後出する支群ほど規模の差が縮まる傾向が見て取れる。

古墳の墳丘規模は、被葬者の性格を反映する大きな要素となる。東日本の中期古墳群を検討する際、たとえば「隔絶した規模を誇る大型墳」と「小型墳」に大別され、小型墳の中でも、21～30m級の古墳は中小の首長墳と捉えられる場合が多い（東海考古学フォーラム2002等）。正直古墳群でも、直径21m以上の古墳は中小の首長墳と考えられる。

（2）古墳の規模と石製模造品の相関関係

正直古墳群のなかで、支群Bの正直27号墳と支群Cの23号墳、そして支群Dの30号墳からは、刀子形の石製模造品が出土している。これに対し、支群Hの古墳からは刀子形の石製模造品は出土していない



第222図 正直古墳群における古墳構成図

い。刀子形が出土した 27・23・30 号墳は直径 22m 以上の規模で、それぞれの支群で最大の古墳である。これに対し、刀子形が出土していない支群 H の正直 11~13・15 号墳は直径 20m 以下の円墳である。

このように、刀子形の石製模造品の有無は古墳の規模と密接な関連があると考えられる。このことから、やや大型の円墳を中心に 2~6 基で構成される A~G の支群は、首長及び首長と関係のある人物の古墳と想定される。より詳細に検討すると、2~6 基からなる支群（支群 A~G）は先行して築造され、密集する状態の支群（支群 H）はやや時期が新しいことが分かる。

刀子形石製模造品が副葬されたのは、正直 27・23・30 号墳といった支群中最大の古墳に限定されていた。これらの古墳は首長墓あるいはそれに準じる古墳であろう。

石製模造品の導入は、正直 27 号墳に埋葬された首長の死を契機とするものであった。その際、他地域からの工人の招聘や製品・石材の移動、あるいは情報の伝達などがあったのだろう。次の段階で首長が葬送儀礼を執り行うようになると、その必要性から集落内で継続的に石製模造品を製作するようになったと考えられる。それは、27 号墳の刀子形が関東地方の資料と直接対比できるのに対し、23 号墳と 30 号墳の刀子形は、他地域に類例が見られない独自の形態を呈していることから推察できる。一方、臼玉や剣形・有孔円板といった単純な形態の石製模造品は、他地域と同じ変遷をたどっている。

こうしたことから、葬送及び祭祀の道具として本格的に石製模造品を導入し展開する際、製作に関しての人的・技術的な交流などは常に行われていたと考えられる。そして刀子形のような複雑なものの製作については、当初は比較的忠実に模倣されていたものの、しだいに画一的な形態を求められることはなくなり、「刀子」と認識できるものであれば許容されるゆるやかな規範に変化していくと推察される。

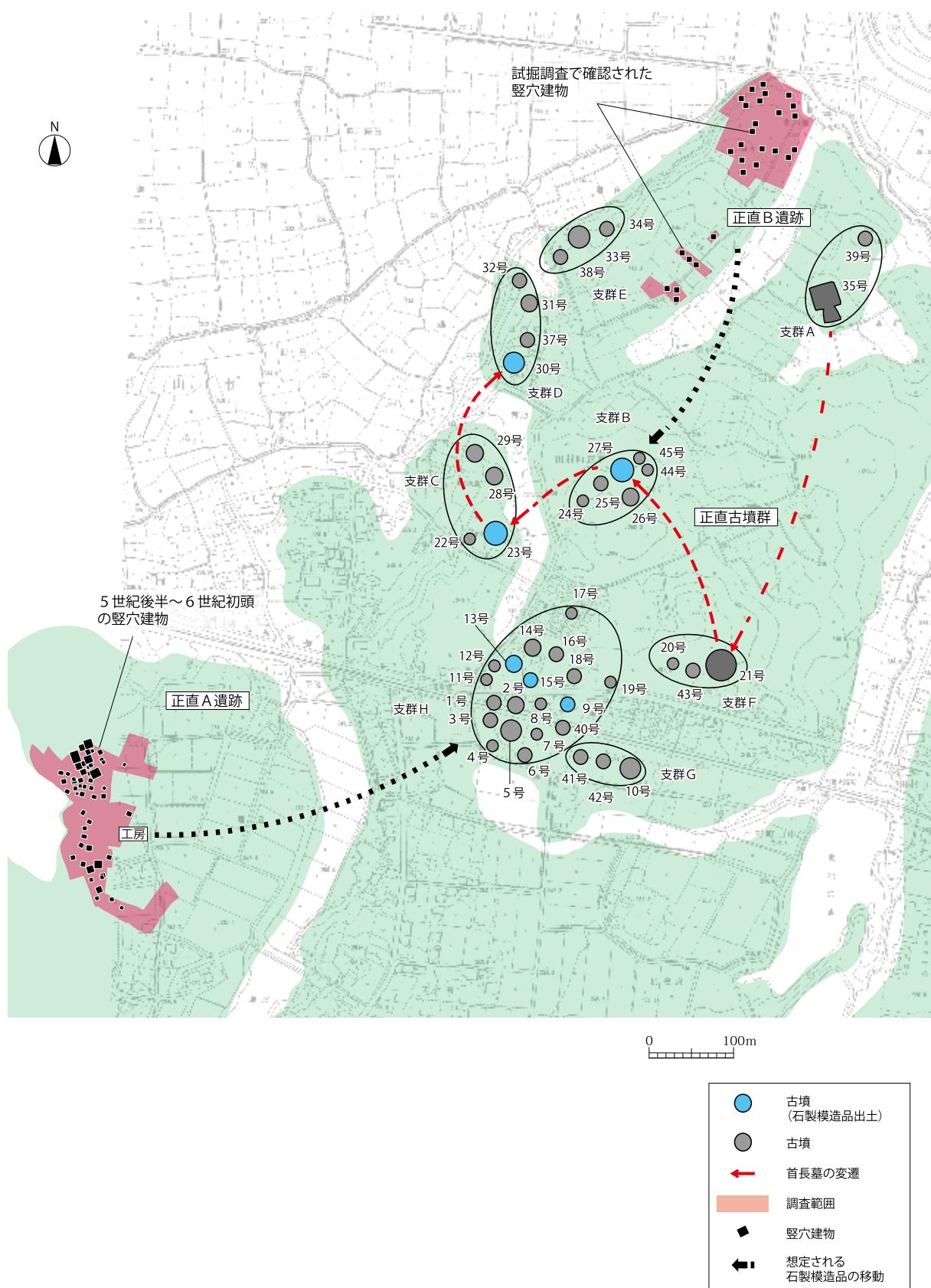
（3）正直古墳群の変遷と石製模造品の動向（第 223 図）

1. 正直古墳群の変遷

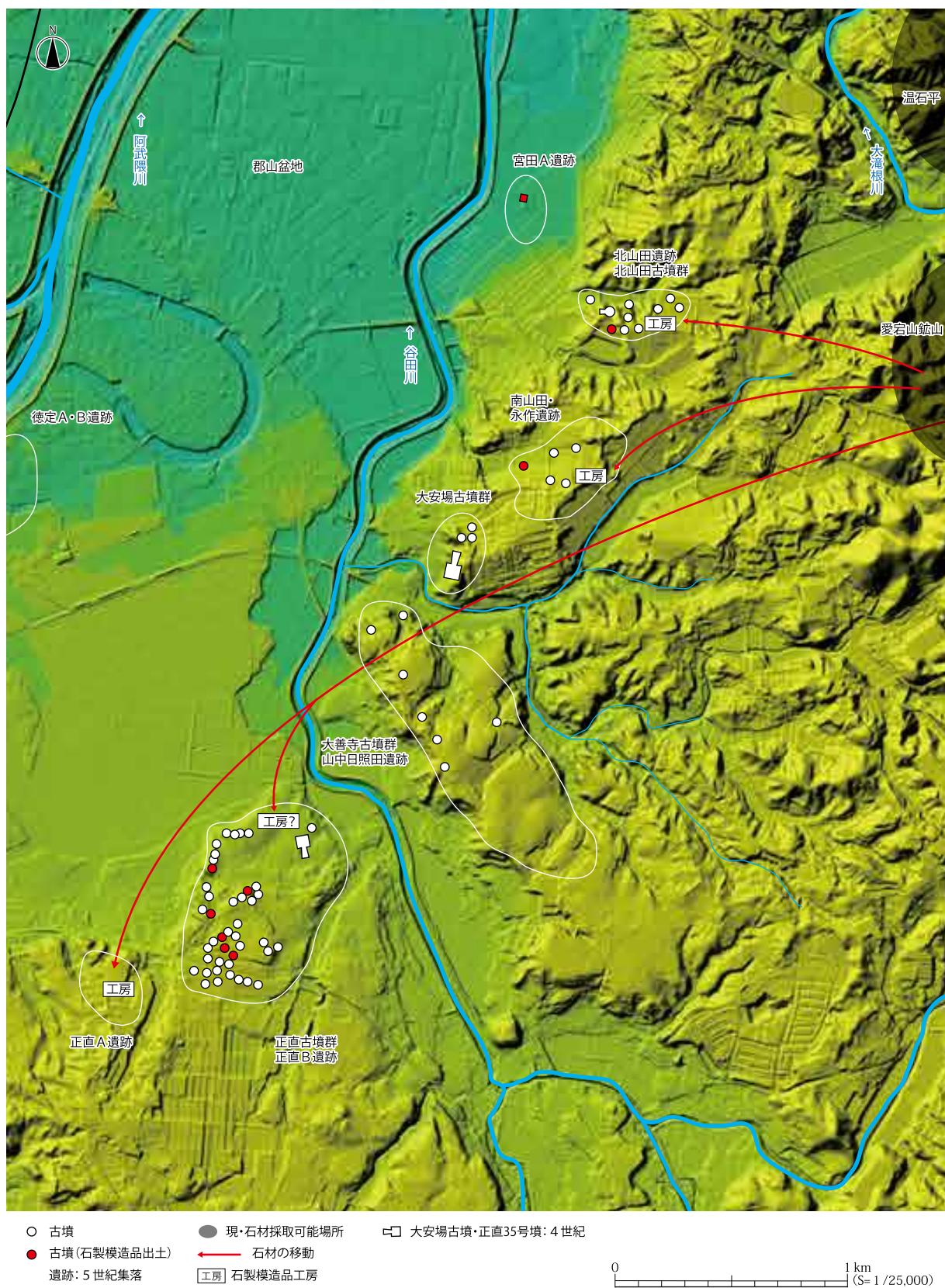
平面的な位置関係を踏まえ、正直古墳群の推移を考察する。支群 A~G のなかで出土遺物から築造時期の分かることから古墳は、それぞれの支群で最大規模を誇る支群 A の正直 35 号墳、支群 F の 21 号墳、支群 B の 27 号墳、支群 C の 23 号墳、支群 D の 30 号墳である。また、A~G のそれぞれの支群では、首長墳と他の古墳の規模に格差がみられる。そして、その格差は時間の推移とともに徐々に小さくなる傾向にある。

古墳群の築造契機となったのは 4 世紀中～後葉に作られた前方後方墳の正直 35 号墳で、それに続く 21 号墳は円墳だが、規模が大きく、築造時期は 4 世紀末頃と考えられる。副葬された石製模造品から 27 号墳は 5 世紀前半、続いて 23 号墳と 30 号墳が 5 世紀後半に作られたのである。支群 E と支群 G は未調査のため詳細は不明である。

時期の異なる首長墳に、刀子形・斧形などの農工具形石製模造品が伴うことから、正直古墳群の首長墳では石製模造品を用いた葬送儀礼が継続していたことが分かる。また、正直 27 号墳の築造に端を発する石製模造品の導入期には、刀子形石製模造品は定型的であったものの、その後、地域独自の形態に変化していく点も明らかとなった。



第223図 正直古墳群における首長墳の変遷



第224図 郡山南東部における石製模造品の動向

2. 石製模造品の製作工房

正直古墳群に副葬された石製模造品の製作場所について考える。第1章及び第2章で述べたように、古墳群に隣接する正直A遺跡と正直B遺跡という2つの集落遺跡がある。正直B遺跡は部分的な調査で全容の把握はこれからであるが、古墳群と関係していることは疑いない。

支群A～Gのうち正直35・21・27号墳は、4世紀中～後葉から5世紀前半が築造時期の中心と考えられる。そして丘陵北端からは、5世紀前半の土器とともに、精巧なつくりの剣形石製模造品などが出土しており、5世紀前半を中心とする集落と確認されている。この正直B遺跡が27号墳などの築造母体となつた集落と考えるのが合理的な解釈であろう。

支群C・Dの正直23・30号墳は、時期的には古墳群の南西方向約400mにある5世紀後半の正直A遺跡と同時期であるため、関連する可能性がある。ただ、この2基の古墳が一連の首長墓の系譜にあると想定した場合、正直B遺跡との結び付きも考えられる。

支群Hは5世紀後半の正直15・13号墳あるいは9号墳などがあり、関連する同時期の集落は、前述した正直A遺跡である。両者から出土する剣形・有孔円板、臼玉の共通性からみても、正直A遺跡の石製模造品工房で製作されたものが副葬された蓋然性が高い。さらに集落から古墳が視認できる範囲を考えた場合、支群A～Fと正直B遺跡の、支群G・Hと正直A遺跡の関係性はより鮮明なものとなる。

3. 郡山市南東部における石製模造品の動向（第224図）

阿武隈川中流域に位置する郡山市南東部の地域では、5世紀後半から6世紀初頭の遺跡が数多く確認されている。この地域では阿武隈川とその支流である谷田川による肥沃な沖積地が広がり、集落は東の阿武隈山地から伸びる台地の先端に営まれる。北から北山田遺跡・南山田遺跡・永作遺跡・山中日照田遺跡などで、いずれも集落に隣接して古墳が築造される。北山田遺跡の北西に位置する宮田A遺跡は台地上の遺跡とは異なる沖積地にあり、方形周溝墓が検出された。こうした遺跡群の東方では石製模造品の材料となる、蛇紋岩・滑石の産出地があり（愛宕山鉱山）、近年まで大規模な採掘が行われていた。

こうした集落のうち、北山田遺跡・南山田・永作遺跡・正直A遺跡で石製模造品の工房が確認されている。そして古墳では、宮田A遺跡、北山田古墳群、南山田遺跡、正直古墳群で石製模造品が出土している。集落と古墳が隣接する北山田遺跡と北山田古墳群、そして南山田・永作遺跡と南山田1号墳では、隣接集落内の工房から石製模造品が供給されたことは、石材の同一性などからみてもほぼ間違いない。そして、正直A遺跡で作られた石製模造品も正直古墳群に供給された可能性が高い。郡山市南東部の丘陵上では、石製模造品の石材採取可能場所から、石製模造品工房、そして古墳への供給が具体的に判明している数少ない地域と言える。

引用・参考文献

- 佐久間正明 2004「福島県における五世紀代古墳群の研究－石製模造品を通じた正直古墳群の分析を中心に－」『古代』第117号 早稲田大学考古学会 53-82頁
- 佐久間正明 2015「石製模造品からみた阿武隈川流域における首長墳の動向」『阿武隈川流域における古墳時代首長層の動向把握のための基礎的研究』 福島大学行政政策学類 31-40頁
- 東海考古学フォーラム 2002『古墳時代中期の大型墳と小型墳』

第2節 東北地方における5世紀の古墳分布と変遷

(1) 分布と変遷の特質

1. 東北地方における大型古墳空白期（第225図）

東北地方南部における現在の古墳研究は、藤澤敦氏・菊地芳朗氏を中心に進められている。首長墓と想定される大型古墳を中心にその墳形や埴輪・副葬品などの視点から、東北地方南部における5世紀代の古墳研究は活発に行われ、変遷案も積極的に論じられている。そして、この地域では4世紀末～5世紀前葉に中規模以上の前方後円（方）墳の空白期があり、5世紀中葉になって再び前方後円墳が築造されるということが分かってきた。

先ず、藤澤氏の研究成果を概観する（第225図上）。集成編年5・6期における古墳築造の衰退が顕著である。阿武隈川下流域では、夕向原1号墳・古峯神社古墳が短い前方部の特徴から5・6期の築造が想定されるものの、遺物は知られておらず不明瞭とされる。一方、仙台平野の経の塚古墳が副葬品や長持形石棺から6期の可能性が指摘され、長胴化した壺が出土した正直21号墳は5期の可能性が高いとした。7・8期には一転して新たな古墳の築造と古式群集墳の盛行が見られる。7期には、前方後円墳や帆立貝形前方後円墳・やや規模の大きな円墳などの築造が各地で見られる。そして、8期には仙台平野の大野田古墳群や阿武隈川下流域の台町古墳群、そして正直古墳群、さらには山形盆地のお花山古墳群・米沢盆地の下小松古墳群をはじめとして、小規模な円墳が密集して築造される例が多いと指摘する（藤澤2012・2020）。

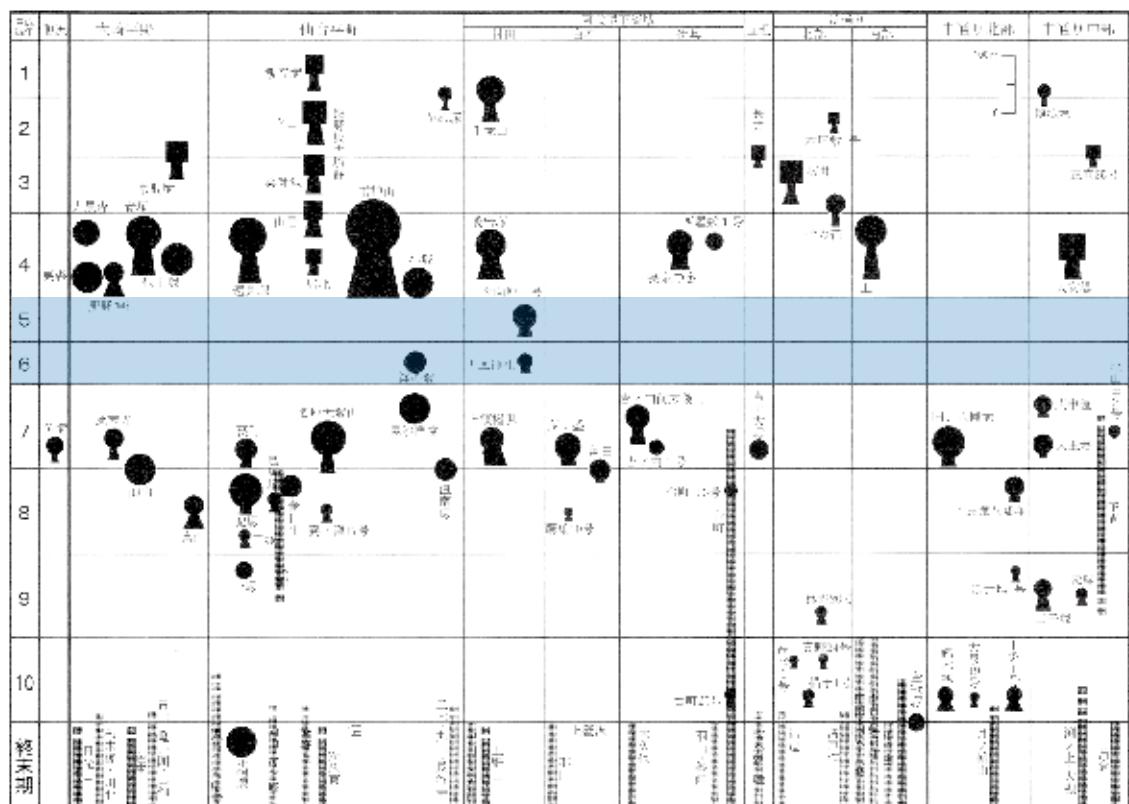
菊地氏も「中期前半の古墳の断絶」という現象に大きな変更は認められないとする（第225図下）。一方、滑石製小玉を含む愛谷古墳や、底部穿孔壺が出土した正直21号墳が中期初頭頃と考えられることから、地域によって様相に相違が見られることを指摘する（菊地2010・2020）。

2. 古墳の分布と変遷の概観（第226・227図）

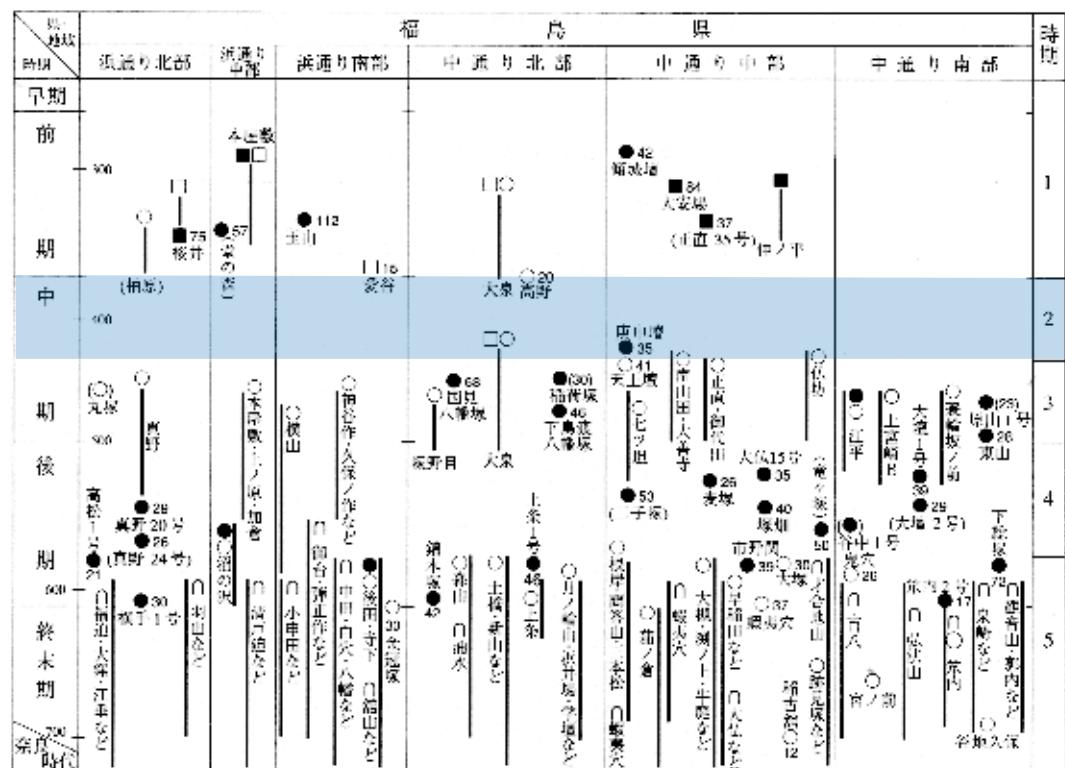
では、改めて東北地方の古墳について概観する。古墳の規模を概観すると、仙台平野を中心とする地域では、全長90mの名取大塚山古墳、全長70mの兜塚古墳が最大規模を誇る。仙台平野以北では裏町古墳や真山古墳・念南寺古墳といった50m級の古墳が築造される。仙台平野から南の地域では、方領権現古墳・瓶ヶ盛古墳が60mを前後する規模で、亀田古墳や吉ノ内古墳がこれらに次ぐ規模となる。

福島県域では、阿武隈川流域の国見八幡塚古墳が最大規模を誇る。そして阿武隈川を上流に向かうにつれ、福島市の下鳥渡八幡塚古墳や本宮市の庚申塚古墳・天王塚古墳と規模が縮少し30～50mの古墳が築造される。郡山盆地では北山田2号墳、さらに上流の地域では早稻田7号墳、新田東山古墳などの古墳があり、これらはいずれも30m以下の小規模な前方後円墳である。なお、会津盆地では、近年の調査でその内容が明らかになった灰塚山古墳が60mを測る。

東北地方南部の古墳分布を概観すると、宮城県南部から福島県の阿武隈川流域、そして仙台平野周辺で古墳が多く見られる。これに対し、会津盆地と福島県の太平洋沿岸部の古墳は非常に少ないことが分かる。両地域は、周知のように前期には非常に多くの古墳が築造される。会津盆地では、亀ヶ森古墳（前方後円墳・127m）、会津大塚山古墳（前方後円墳・114m）などの盆地内で継続して築造される首長墓が

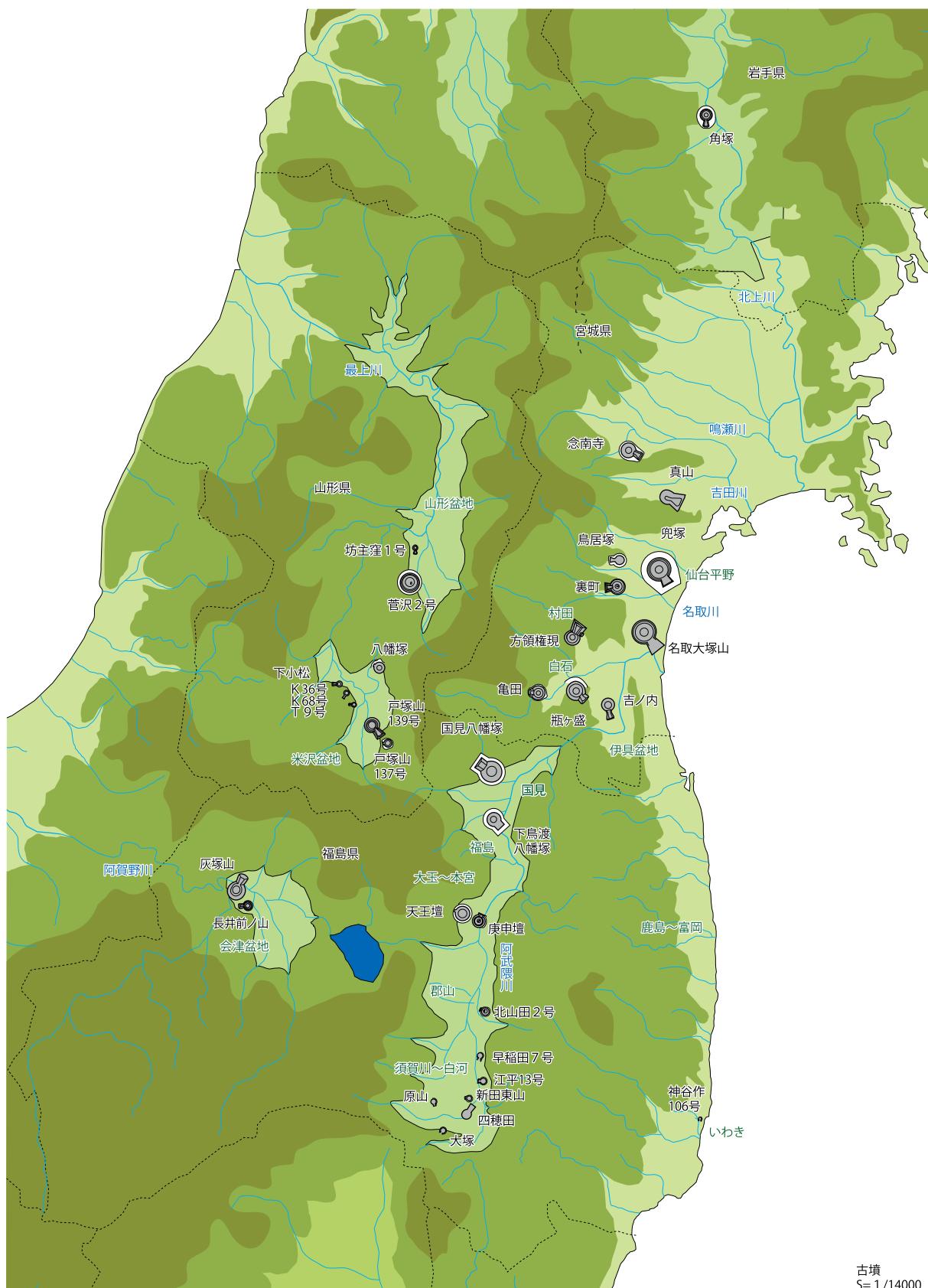


「東北地方と新潟県域での主要古墳の編年」
藤澤敦2020「東北地方中期古墳の特質」『宮城考古学』第22号より一部転載



「東北の古墳編年」
菊地芳朗2010『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会より一部転載

第225図 東北地方における古墳の変遷



第226図 東北地方における5世紀の主要古墳分布図

知られ、太平洋沿岸部では、南部いわき市に玉山古墳（前方後円墳・112m）、中部浪江町に堂の森古墳（前方後円墳・57m）、北部南相馬市に桜井古墳（前方後方墳・74.5m）など、点々と大型古墳が築造される。これに対し、阿武隈川流域では大安場古墳（前方後方墳・83m）や須賀川市の団子山古墳（前方後円墳・67m）などに大型古墳は限定される。つまり、中期の古墳分布は前期の分布と大きく異なり、阿武隈川流域での古墳築造が顕著になる、とまとめることができる。

3. 古墳分布に連動する方形区画遺構（第227図）

5世紀中葉前後の動向として取り上げるべきものに、方形区画遺構がある。郡山市の清水内遺跡では、推定南北 51×東西 55～60mの方形区画遺構が確認された。布掘り状に掘られた溝の内部に柵木が密に埋め込まれている点、そして、方形区画遺構内部に竪穴建物が見られない点が特徴的である。須賀川市上ノ代遺跡は、一辺が 52mで内側に柵列を伴う。白河市三森遺跡では、溝と柵列それぞれで区画された3基の方形区画遺構が検出された。最も古いのは二重の柵列からなる柵囲遺構で、内寸規模は 14.5×11mを測る。柵囲遺構とほぼ同じ位置には、柵囲遺構を壊す形で 20×14.5mの長方形周溝が形成され、その西隣には一辺 46mを測る大型周溝が作られる。南相馬市桶師屋遺跡では、規模は不明だが溝と柵列からなる方形区画遺構が確認された。喜多方市古屋敷遺跡の方形区画は二重の区画溝からなり、内側は一辺 57mで張出部と柵列を伴い、外側は一辺が 77mを測る。なお、宮城県内では規模が知られるものは少ないものの、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡や多賀城市山王遺跡で溝と柵列からなる区画施設が確認されている。

中期の方形区画遺構は、その内側の規模が 46～57mでまとまった印象を受ける。古屋敷遺跡が二重の溝と張出部の存在から他の方形区画遺構と隔絶したものと考えられているが、最も基礎となる部分では共通点もうかがえる。これらの方形区画遺構は、内部に竪穴建物がない清水内遺跡に代表されるように、首長の居住場所ではなく、居館を構成する施設の1つとするのが適切と思われる。

4. 古墳分布上の特質

特に古墳に現れる分布上の特質が生じる要因は未だ明らかにされてはいないが、白河市から仙台平野へ至るルートは後の東山道にあたり、古代より重要なルートの1つであったとする研究者は少なくない。右島和夫氏は、5世紀後半に近畿地方中央部と群馬県を結ぶ新たな内陸ルート（古東山道ルート）が設定され、両地域を結ぶ太いパイプが出来たとする。そして5世紀後半以降に福島県中通り地方で様々な新しい要素が現れるのは、こうした「古東山道ルートの成立があつてはじめて理解できる動き」とした（右島 2008）。氏の視点は渡来系文物をはじめとする新しい文物だけでなく、古墳築造動向なども含め総体的に検討するうえで、参考にすべきものである。

阿武隈川上流域で顕著な古墳が見られないことは指摘できる。白河市を中心とする阿武隈川上流域は周知のように関東地方北部との接点に位置し、栃木県からのルートと、久慈川を介して茨城県からのルートが交わる地点として重要な位置にある。この地域では8期に多数の小規模前方後円墳が築造されるが、7期以前に有力な古墳は中島村の四穂田古墳を除き確認されていない。

（2）下位首長層の墳墓

正直古墳群の各支群における最大規模の古墳は、その規模や農工具形石製模造品の出土などから首長墳であったと想定した。では、具体的にはどのような被葬者像が想定されるだろう。

第2節 東北地方における5世紀の古墳分布と変遷

須恵器		集成	北上川流域		須恵器		集成	鳴瀬川流域	吉田川流域	仙台平野 (名取川北側)		(名取川南側)	
TK73	5期				TK73	6期							
TK216	7期				TK216	7期							
TK208	7期		中半入 角塚		TK208	7期		念南寺 真山		岩切鴻ノ巣 裏町 春日社 名取大塚山 毘沙門堂			
TK23	8期				TK23	8期		御山 諫訪山 鹿島神社 山中		兜塚古墳 二塚古墳 鳥居塚 大野田 古墳群			
TK47	8期				TK47	8期							

須恵器		集成	阿武隈川下流域 (亘理) (伊具盆地) (村田) (白石) (国見) (福島) (大玉～本宮)				阿武隈川中流域 (郡山)			阿武隈川上流域 (須賀川～白河)		
TK73	5期				夕向原1号?					21号		
TK73	6期				古峰神社?		塚野目11号			阿弥陀壇1号		仏坊11号
TK216	7期			吉ノ内						27号		
TK208	7期		間野田 吉田大塚 吉田内 1号		方領権現	龜田 瓶ヶ盛	国見八幡塚 稻荷塚		庚申壇 天王壇	清水内 谷地 北山田 2号	正直 古墳群	仏坊13号 三森 上ノ代
TK23	8期								金山	30号		
TK47	8期		台町 古墳群 103号					下鳥渡 八幡塚				早稻田 新田 東山 江平 13号
												原山 1号
												大塚

須恵器		集成	太平洋沿岸部 (鹿島～富岡) (いわき)		会津盆地		須恵器		集成	山形盆地		米沢盆地 (米沢) (川西)	
TK73	5期				真野 49号		TK73	5期					
TK73	6期					灰塚山	長井 前ノ山	TK73	6期				
TK216	7期				桶師屋遺跡		TK216	7期					
TK208	7期				上の原 3号		古屋敷	TK208					
TK23	8期				真野 古墳群		経塚	TK23					
TK47	8期				神谷作 106号			TK47					
					小浜2号								

「集成」は集成編年

群集墳としての
古墳群

0 50m
(S = 1/8,000)

第227図 東北地方の古墳と方形区画の変遷

藤澤氏によれば、古墳時代における地域社会の基本的な単位は、日常的な農業生産の場で共同作業を行う際の単位であり、そうした共同体の代表者を「下位首長層」と呼び、小規模墳に埋葬されたとする（藤澤2012）。正直古墳群に埋葬された人物は、そうした共同体の首長、あるいはその近親者と考えられる。

古墳時代のネットワークのなかでは、そのような下位首長層の枠を越え、そうしたいくつかの地域社会をまとめて代表者となる上位首長層が必要であった。こうした地域の共同体を束ねる人物の墳墓が、大安場1号墳である。しかし、正直古墳群の主体となる古墳時代中期には付近に大型古墳の存在は確認されておらず、上位首長層の姿はみられない。

正直古墳群では、4世紀中～後葉の正直35号墳にはじまり、4世紀末頃の21号墳、5世紀前半の27号墳、さらに5世紀後半の23号墳、30号墳が築造される。これらの古墳は墳形・規模・出土遺物の特徴から、一般的には小規模首長墳として把握される。正直古墳群では、小規模ながら継続して首長墳が築造されていることは、東北地方南部で5世紀前葉の大型古墳の空白を考えるうえで重要である。下位首長層は継続するが、上位首長層がないということは、より広い範囲を対象として政治的要因を考えなければならないからだ。

ところで、福島県内では、大玉村・本宮市に庚申塚古墳や天王塚古墳をはじめとする6基の埴輪を樹立する古墳が築造され、郡山市の大善寺古墳群でも4基の古墳に埴輪が樹立されている。今回報告した正直27号墳は、階層的には埴輪を伴う古墳の下位に位置付けられるが、こうした埴輪樹立古墳の被葬者とどのような関係にあったかは、さらなる分析が必要である。

（3）大型円墳への転換と密集する小規模円墳

正直古墳群において、前方後方墳から円墳への転換となる正直21号墳は、古墳群中最大規模を誇るとともに、壺形埴輪が確認されている古墳である。ここに1つの画期がみえる。そして、続く27号墳なども含め、3～6基からなる支群が先行して築造され、古い支群ほど古墳間の規模に差が見られ、新しい支群ほどその差が少なくなる傾向も見られる。一方、20基弱の小規模円墳が密集する状態の支群Hは、時期の新しい5世紀後半に築造が開始される古墳群であって、支群A～Gとは性格の異なる支群と理解することができる。

こうした正直21・27号墳などの比較的大型の円墳について、密集する小規模円墳との相違を積極的に評価し、その性格付けを考えるとき、都出比呂志氏や和田晴吾氏の考察が参考となる。

都出氏は、「400年前後」に大型円墳と帆立貝形古墳が急増することから、この時期に政治的変動があったとする（都出1992）。和田氏は、豊富な副葬品を持つこともある中期の小型円墳や埴輪をもつ小型低方墳の築造は、古墳時代中期の政権や上位首長層が一部の有力な家長層を重要視し、それらへの対応を変化させたことが要因であるとする（和田1992）。

このように古墳時代中期の円墳は、この時期の変化を物語っているとする研究者は少なくない。正直古墳群内で、はじめて壺形埴輪を取り入れた正直21号墳、あるいは石製模造品を使用した葬送儀礼を導入した27号墳築造の契機は、こうした歴史的背景の中で理解することが有益な解釈である。

では、支群Hの出現はどのように考えればよいだろう。その特徴は古墳間の規模にみられる階層差が少

ないこと、出現期が5世紀後半と考えられることである。この時期は新来の文物や技術が導入される一種の文明開化的な状況にあった。そうしたなかで、階層差が少ない有力家長層が多数出現し、新たに古墳に埋葬されるようになったのではないか、との帰結に到達する。

引用・参考文献

- 菊地芳朗 2010『古墳時代史の展開と東北社会』 大阪大学出版会
- 菊地芳朗 2020「東北の古墳時代中期—埋葬施設と副葬品を中心に—」『宮城考古学』第22号 85-102頁
- 都出比呂志 1992「墳丘の型式」『古墳時代の研究』7 雄山閣 15-38頁
- 藤澤 敦 2012「⑩東北 3地域の展開」『古墳時代の考古学』2 同成社 221-231頁
- 藤澤 敦 2020「東北地方中期古墳の特質」『宮城考古学』第22号 103-132頁
- 右島和夫 2008「古墳時代における畿内と東国—5世紀後半における古東山道ルートの成立とその背景—」『研究紀要』第13集 由良大和古墳文化研究協会 27-56頁
- 和田晴吾 1992「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』5・近畿I 角川書店 325-359頁

第3節 石製模造品と葬送儀礼

(1) 石製模造品の分布 (第228図)

正直古墳群の出土遺物の中で最も大きな特徴の1つは、石製模造品を使用した葬送儀礼が継続して行われた点である。

石製模造品の出土した古墳の分布は、東日本では群馬県西部と千葉県の東京湾沿岸及び霞ヶ浦南岸に集中する。そして、大和盆地を中心とする近畿地方中央部の集中も明確である。

葬送儀礼における石製模造品は、刀子・斧・鎌形といった農工具のセットが基本となる。一方、西日本では九州地方北部を中心に古墳から石製模造品が出土する事例はあるが、その内容は近畿地方中央部や東日本に広がる基本セットとは異なり、刀子形などの農工具を含まず、剣形や有孔円板のみが出土する点に特色がある（佐久間2017）。

古墳群内で継続して農工具形の石製模造品が出土する事例は、近畿地方中央部では奈良県佐紀盾列古墳群や馬見古墳群、大阪府古市古墳群が知られている。関東地方では千葉県の多古台古墳群や、群馬県八幡台地の剣崎天神山・剣崎長瀬西古墳、あるいは東京都の野毛古墳群などである。石製模造品が出土する古墳は数多く存在するものの、農工具形の石製模造品が古墳群内で継続して出土する事例は多くはない。この点からも、正直古墳群の重要性が理解される。

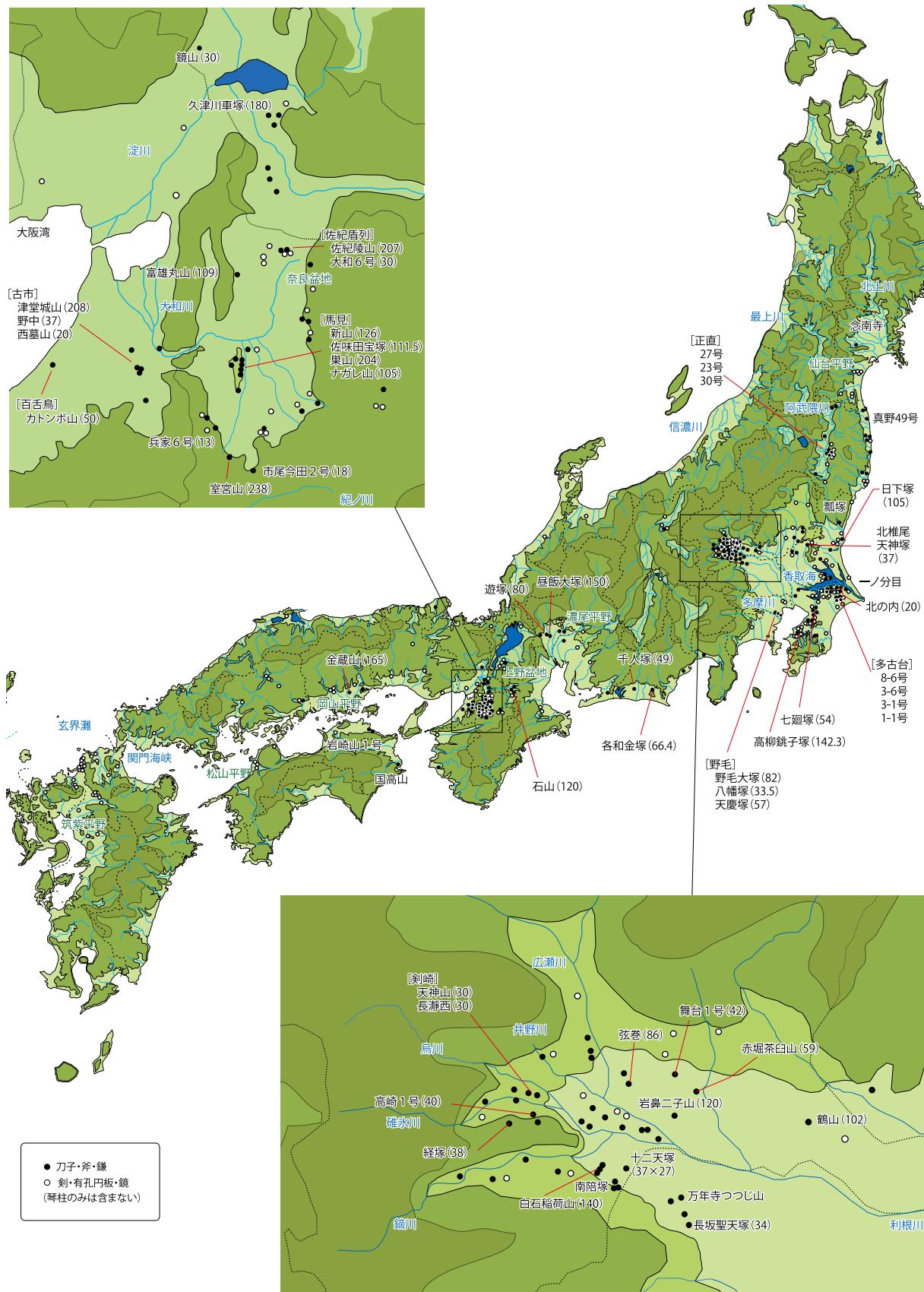
また、正直古墳群で確認された刀子形の形態変化は、その導入段階において定型的であったものが時間の推移とともに変容する様子を示している。これは石製模造品が地域に展開する際の具体的な過程を表すものであり、貴重な事例であることは言うまでもない。

(2) 石製模造品の組み合わせの特色 (表15)

正直27号墳の石製模造品の特徴として、剣形と有孔円板を一定数含むことがある。石製模造品の組成は、古墳と祭祀遺跡・遺構では異なり、古墳における葬送の場では「刀子・斧・鎌」などの農工具形が基本となる。一方、祭祀（カミマツリ）の場では、「剣・有孔円板・勾玉」を基本とする。こうしたセットを基本とするものの、古墳において剣・有孔円板を伴うもの、逆に祭祀遺跡において刀子・斧・鎌形を含むものも存在する。

基本セットと異なる組成のものは、特に祭祀遺跡においてその特殊性が読み取れる。祭祀遺跡のうち該当するのは、神坂峠祭祀遺跡・入山峠祭祀遺跡・建鉢山祭祀遺跡・八幡山祭祀遺跡など、重要な位置にある祭祀遺跡などに限られる。

古墳においては、剣形や有孔円板が共伴するのは5世紀後半に比較的多く見られるため、時期的に新しいと把握される傾向にある。しかし、正直27号墳の剣形は両面に鎬を作り出す形態で、5世紀後半に降らせることは難しい。同様の事例に群馬県白石稻荷山古墳がある。同古墳の東櫛から剣形が18点、西櫛から剣形が17点出土している。また、千葉県市原市の姉崎二子山古墳からは有孔円板が2点出土している。このように5世紀前半の古墳にも伴う事例があることから、剣形及び有孔円板の有無が必ずしも時期的なものを反映しているわけではない。



第228図 石製模造品出土古墳分布図

表15 農工具形石製模造品出土古墳一覧

古墳名	所在地	時期	墳形・規模		出土地	石製模造品ほか									
			墳形	規模		刀子	斧	鎌	剣	円板	鏡	勾玉	臼玉	管玉	他
【宮城県】															
念南寺古墳	色麻町	5c後	前方後円墳	54m	主体部盗掘孔		3	1		5	1				
【福島県】															
塚野目11号墳	国見町	5c前	方墳	13m	木棺	8	4	4							
堀下古墳	国見町	5c後	円墳	18m	葺石間	1									
天王塙古墳	本宮市	5c後	造出付円墳	38m	石棺？	5	1			1	1				櫛2
正直9号墳	郡山市	5c後	円墳	20m			2	1							
正直23号墳	郡山市	5c後	円墳	26m	木炭柳	6									
正直27号墳	郡山市	5c前	円墳	25m	南箱式石棺	6	1		19	24					
					北箱式石棺 西侧区画				18	9			783		
					北箱式石棺 東側区画				23	14			673		
正直30号墳	郡山市	5c後	円墳	20m	第1木棺直葬	4			1	4				5	
真野寺内49号墳	南相馬市	5c前	円墳	21m	磔柳	7	1	1			1		1		案1
					確認調査時 撥乱	1									
櫻森(塙原)古墳	南相馬市	5c後	円墳	12m		7			3	5		1			
小浜2号墳	富岡町	5c後	円墳	13m	箱式石棺	4			1	19				176	
					埴丘・周溝	1			1	3					
柏崎(中台)古墳	相馬市	5c後				2			2	8					
【茨城県】															
日下ヶ塚 (常陸鏡塚)古墳	大洗町	4c後	前方後円墳	105m	粘土柳	10	16	1				2	3989以上	○	ヤリガンナ1・鑄2・鉤1・鉤6・異形1
舟塚山14号墳	石岡市		円墳	15m	箱形石棺外	5		1							
梵天山古墳	常陸太田市		前方後円墳	151m	裾部周辺	1									
諏訪山古墳	茨城町		円墳	50m			2								
三ツ塚12号墳	ひたちなか市		円墳	50m	封土	1									
北椎尾天神塚古墳	桜川市		円墳	37m	粘土柳	18	1						1		
瓢塚古墳	常陸太田市		前方後円墳	30m	推定後円部		16		2		6				
勝木9号墳	稻敷市							1							
兜塚古墳	稻敷市														
大塚弁天塚古墳	美浦村		円墳	53~60m?	石棺？	3	1	2			1				
【栃木県】															
勸農車塚古墳	足利市	5c前	帆立貝形 前方後円墳	72m	埴丘中	5		1							
神主38号墳	上三川町	5c前	円墳	12×10m	周溝		1	1							
上稻毛田台 (上稻台)古墳	芳賀町	5c前				1	3	1							
芳志戸十三塚古墳	芳賀町	5c後	円墳	24~25m	粘土床・粘土柳？	8	4					7			
大和田富士山古墳	真岡市	5c後	前方後円墳	51m	箱式石棺	4			5	1					
礪岡北遺跡1号墳	宇都宮市	5c中葉	円墳	7.4×7.6m	箱式石棺			1							
古聖古墳	益子町				採集 拓本のみ	3									
【群馬県】															
長者屋敷天王山古墳	高崎市	4c後半	造出付円墳	42~66m	粘土柳	3	3					10	297		鑄1
片山1号墳	高崎市	4c末	円墳	32.6m	粘土柳	2	6						4		
高崎1号墳	高崎市	5c前半	円墳	40m		10(40)		1					数百?		
劍崎天神山古墳	高崎市	5c前半	円墳	30m	土取り工事中 墳丘 から落下	71	1	1		2					埴1・杵1・槽1・琴柱1
浅間山古墳	高崎市	4末・5初	前方後円墳	171.5m	周溝				17						
上細井稻荷山古墳	前橋市	5c前半	円墳／前方 後円墳？	25m	埴丘外	7									埴1・埴1・盤1・石枕1・鉤1・他
白石稻荷山古墳	藤岡市	5c前半	前方後円墳	140m	東柳	116		1	18						埴2・杵1・盤1・枕2・ 箕1
					西柳	133以 上			17			116	一式	29	埴2・杵1・枕1・下駄 (履)2・案1
白石稻荷山古墳陪塚	藤岡市	5c前半	円墳？			7	1								
白石稻荷山陪塚 (南方200m)	藤岡市	5c前半	円墳？			20	1								
十二天塚古墳	藤岡市	5c前半	円墳	37×27m	磔柳？	59			1	1			51		杵1
稻荷塚古墳	藤岡市	5c前半	円墳	21m		3					1			1	
岩野谷57号墳	安中市	5c前半	円墳	40m	堅穴式石室？						1				案1
経塚古墳	安中市	5c前半	円墳	38m	堅穴式石室？	28(60)			2						案1
梨ノ木山古墳	玉村町	5c前半	前方後円墳	80m?	堅穴系	2									
玉村町13号墳	玉村町	5c前半	円墳	20m	葺石間		1								

古墳名	所在地	時期	墳形・規模		出土地	石製模造品ほか									
			墳形	規模		刀子	斧	鎌	剣	円板	鏡	勾玉	臼玉	管玉	他
お富士山古墳	伊勢崎市	5c前半～中葉	前方後円墳	125m	長持形石棺	6	1					○	○		
岩鼻二子山古墳	高崎市	5c中葉～後半	前方後円墳	120m	舟形石棺	11	1	1			1				
劍崎長瀬西古墳	高崎市	5c中葉～後半	円墳	30m	豎穴式櫛	35	4	3			1	7	1612		
赤堀茶臼山古墳	伊勢崎市	5c中葉	帆立貝形 前方後円墳	59m	木炭櫛	21						1	25		
舞台1号	前橋市	5c後半	帆立貝形 前方後円墳	42m	前方部	67	9	2		15			202		鐵5・下駄2・子持勾玉?1
下高瀬上之原6号墳	富岡市	5c後半	円墳	10m	周溝			1							不明2
弦巻塚(絃谷)古墳	前橋市	5c中葉	前方後円墳	86m		25	2	4	1		2				
鶴山古墳	太田市	5c後半	前方後円墳	102m	豎穴式石室	21	2	3							
大山鬼塚古墳	甘楽町	5c後半	円墳	20m	舟形石棺	8	3	3			3		58	27	
井出二子山古墳	群馬町	5c後半	前方後円墳	108m		2?	1	5	1	1			39		不明8
不動山古墳陪塚	高崎市	5c後半				1						1			
若田大塚古墳	高崎市	6c初頭	円墳	30m	横穴式石室	○			○						
築瀬二子塚古墳	安中市	6c初頭	前方後円墳	80m	横穴式石室	3	3	3	2	14	12	968(小森 谷家)・ 71(調査)		鐵2・盾3・短甲3	
乗附五百山古墳	高崎市		円墳		横穴式石室	○	?	?				○			
一ノ宮19号墳	富岡市		円墳	15.5m		9	2	1				71(調査)			
前橋天神山古墳	前橋市		前方後円墳	129m	上位埋葬施設	○			○						
太田天神山古墳	太田市	5c前半	前方後円墳	210m											家形?(合子?)
【埼玉県】															
万年寺つづじ山古墳	本庄市		方墳	25m	墳丘 土坑か?	6	5	1				1	1		
長坂聖天塚古墳	美里町	中期前半	円墳	34m	中央第3埋葬施設	9						30	295		
					中央埋葬施設東側	5									
					墳丘東斜面				1						
金鎖神社古墳	美里町	5c前	造出付円墳?	円丘部67.6	石棺か?	1	1								
公卿塚古墳	本庄市	5c後	造出付円墳?	円丘部65／ 50m	墳丘	3	3	4					6		
【千葉県】															
多古台No.8-6号墳	多古町	4c後	前方後円墳	45～54m	木棺直葬	1	2	1				35	259		
一ノ分目古墳	香取市	5c前・4末	円墳	10m	木棺直葬か	2	4								
七廻塚古墳	千葉市	5c前	円墳	54m	埋葬施設	17	4	2	1			773			
石神2号墳	千葉市	5c中	円墳	30m	北側枕	10		1				613	石枕1・立花9		
					南側枕	10		3				1241	石枕1・立花9		
鴨崎天神台古墳	香取市	5c前半	円墳	30m	第1粘土櫛	3	2								
					第2粘土櫛	2	3	1				148			
高柳銓子塚 (長州塚)古墳	木更津市	5c初～前	前方後円墳	142.3m		3	1	1		1					
姫崎二子塚古墳	市原市	5c前半	前方後円墳	93m	後円部・木棺直葬か	5				2	1	3	4	石枕1・立花4	
弁天古墳	柏市	5c中	前方後円墳	35m	木棺直葬	2	3					253	石枕1・立花9		
上赤塚1号墳	千葉市	5c中	円墳	31m	第1主体部		4	4			3			石枕1・立花6	
猫作・栗山16号墳	成田市	5c中	円墳	24m	墳丘内出土	2		1							
					主体部中央	1	1	1			7	341	石枕1・立花1		
					主体部北側	1					5	1550	石枕1・立花8		
					主体部南側	4					9	125	6	石枕1・立花6	
多古台No.3-6号墳	多古町	5c中	円墳	34m	墓坑覆土							513			
					第1主体部	2	1	2				57			
					第2主体部				1	8		318			
					第4主体部	1	1	1				18			
綱原5号墳	香取市	5c前	円墳	20m	擾乱孔	6	4	3	4		1	887			
					旧表土上面	1			17	13		318	剥片35		
台方宮代1号墳	成田市	5c前	円墳	28m	1号主体部	2						63			
					2号主体部	2						152	石枕1		
					主体部付近墳丘					12	3				
能照寺裏古墳	神崎町					1		1	1	1				石枕1・立花2	
河原塚1号墳	松戸市	5c後	円墳	25m	墳丘裾部	2									
西大須賀コモ田13号墳	成田市		円墳	16.5m	表土層中	1								棒状	
北の内古墳	神崎町	5c後半	方墳	20×14m	2号埋葬施設	14	5	4		1	2	103	石枕1・立花		
大戸宮作1号墳	香取市	5c中～後	方墳	19×16	木棺直葬	8						1044	石枕1・立花8		
多古台No.1-1号墳	多古町	5c後	円墳	19.5m	木棺直葬	9	5	6	5	17		1153			
多古台No.3-1号墳	多古町	5c後	円墳	17m	木棺直葬	3	4	1		14		2000超			
石神1号墳	千葉市					1								立花1	
安須2号墳	市原市	5c後半	方墳	14×13m	中央主体部	1									

第6章 正直古墳群の歴史的意義

古墳名	所在地	時期	墳形・規模		出土地	石製模造品ほか									
			墳形	規模		刀子	斧	鎌	剣	円板	鏡	勾玉	臼玉	管玉	他
【東京都】															
野毛大塚古墳	世田谷区	5c前	帆立貝形 前方後円墳	82m	第1主体	11	5	2				1	2461		
					第3主体		10	4							
					第2主体	233	1	1				5	25		埴2・下駄2・槽2・坏3
天慶塚古墳	世田谷区	5c前	帆立貝形 前方後円墳	57m	開墾中に発掘。石棺	○									
八幡塚古墳	世田谷区	5c後	造出付円墳	33.5m	開墾中に発掘	22									
【長野県】															
舞鶴山1・2号墳	長野市					1									
土口將軍塚古墳	長野市 千曲市		前方後円墳	68m		○							○		
【静岡県】															
各和金塚古墳	掛川市		前方後円墳	66.4m		6	2	1							
瀬名2号墳 マルセッコウ古墳	静岡市		円墳	31m	粘土櫛	2	1								
千人塚古墳	浜松市		円墳	49m	造り出		4								
船津1・8号墳 ふくべ塚古墳	富士市		前方後円墳			3									
【岐阜県】															
星飯大塚古墳	大垣市	4c後半	前方後円墳	150m	竪穴式石室	13	6	1				233	3555		埴・石釧
坊の塚古墳	各務原市	4c後半	前方後円墳	120m	竪穴式石室 (岐阜市博)	1	1					4	15	8	琴柱1
					竪穴式石室 (トレンチ3)	2	1					62	952	67	橐玉1
遊塚古墳	大垣市	4c末	前方後円墳	80m	前方部埋納施設	137	8	4							竪1・ヤリガンナ1・埴1・合子1
中野1号墳	岐阜市	4c末・5初	円墳		槨床	2							109		埴
【愛知県】															
野見神社古墳	一宮市		円墳	20m	木棺直葬	2									
中野古墳	豊橋市					2									石枕1・立花3
【三重県】															
石山古墳	伊賀市		前方後円墳	120m	中央櫛	52	39	1				?	?		竪2・ヤリガンナ1
					東櫛	124	11	3							竪1
					西櫛	55	17	3							
佐那具愛宕山古墳	伊賀市						1								
北之谷1号墳	伊賀市	中期半ば	円墳	35m			5								
【奈良県】															
佐紀陵山古墳	奈良市	前期後半	前方後円墳	207m	竪穴式石室	3	1								
富雄丸山古墳	奈良市	前期後半	円墳	109m	竪穴式石室	6	9					○			竪1・ヤリガンナ1・琴柱
鷦塚古墳	奈良市	前期後半	前方後円墳	107m			1								
赤土山古墳	天理市	前期後半	前方後円墳	106.5m	不明	4									剣
佐味田宝塚古墳	河合町	前期後半	前方後円墳	111.5m	竪穴式石室	34	1	2		○		10			剣・竪1・ヤリガンナ1・琴柱
新山古墳	広陵町	前期後半	前方後方墳	126m	竪穴式石室		1					○			椅子
島の山古墳	川西町	前期後半	前方後円墳	190m	填丘	○		○							
大和6号墳	奈良市	中期半ば	円墳	30m			1	6							
大和9号墳	奈良市	中期半ば	円墳	27m			○								
栗谷トノヤシキ古墳	宇陀市					○									
市尾今田2号墳	高取町	中期後半	方墳	18m			25								
巣山古墳	広陵町	中期前半	前方後円墳	204m	竪穴式石室	11	1								
讃岐神社古墳	広陵町		前方後円墳	60m											壺2・琴柱5
乙女山古墳	河合町	中期前半	帆立貝形 前方後円墳	130m		1		1				6	1		
カタビ1号墳	河合町	中期前半	方墳	20×22				1							
ナガレ山古墳	河合町	中期前半	前方後円墳	105m	括れ部裾	9	5								ヤリガンナ1
					後円部	○						○	○	○	
寺口和田13号墳	葛城市	中期前半	円墳	約50m		○						○			
兵家6号墳	葛城市	中期半ば	方墳	13m	西主体部	10									
室宮山古墳	御所市	中期前半	前方後円墳	238m		15	2					○	623	○	機織具
【滋賀県】															
大塚山古墳	野洲市					○									

古墳名	所在地	時期	墳形・規模		出土地	石製模造品ほか									
			墳形	規模		刀子	斧	鎌	剣	円板	鏡	勾玉	臼玉	管玉	他
【京都府】															
鏡山古墳	京都市	中期前半	円墳	30m		5	4	○			1	138			臼1・杵1・下駄3
鞍岡山3号墳	精華町	前期後半	円墳	40m		3	2		2						
久津川車塚古墳	城陽市	中期半ば	前方後円墳	180m		40+	○	○			5000				案1・合子1
梶塚古墳	城陽市	中期半ば	方墳	51×47m				3							
芝ヶ原11号墳	城陽市	中期前半	円墳	30m		○									
吐師七ツ塚1号	木津川市	中期前半	帆立貝形 前方後円墳	推定40m		7	2			1		300			
国名平1号墳	精華町	中期前半	円墳	15m		○									
【大阪府】															
野中宮山古墳	藤井寺市	中期前半	前方後円墳	154m		1									
津堂城山古墳	藤井寺市	中期前半	前方後円墳	208m	堅穴式石室	3					28	42			剣1
西墓山古墳	藤井寺市	中期前半	方墳	一辺20m	鉄器埋納施設		10+	1+							
鍋塚古墳	富田林市	中期前半	円墳	24m		6									
野中古墳	藤井寺市	中期半ば	方墳	一辺37m		81	1	2		○		1	40000以上		臼1・杵1
カトンボ山古墳	堺市	中期後半	円墳	50m		360	6	13	1	1		725	約20000		鐵1
【和歌山県】															
鳳生寺山古墳群	御坊市					○		?							
【岡山県】															
金蔵山古墳	岡山市	中期前半	前方後円墳	165m	堅穴式石室	約70/ 81以上		1	1			72			
【広島県】															
亀山1号墳	福山市		円墳	28m		1						65	699		
【徳島県】															
国高山古墳	阿南市	中期前半	前方後円墳	51m		8				○					
【香川県】															
岩崎山1号墳	さぬき市	中期前半	円墳	15m	A棺(箱式石棺)	2									
					B棺(箱式石棺)	1		1							
岩崎山4号墳	さぬき市		前方後円墳	55m	堅穴式石室		1								

古墳出土石製模造品の変遷において、剣形・有孔円板を含むものは比較的新出であると捉えることに異論はないものの、形態的に古いものが伴うことは明らかで、こうしたイレギュラーなあり方をどのように捉えるかが重要となる。

ほぼ同時期、あるいは先行する時期の古墳を見ると、剣形が出土する古墳は群馬県の白石稻荷山古墳・経塚古墳などがあり、有孔円板が出土する古墳は千葉県の姉崎二子山古墳などで散見される。しかし、正直27号墳の南箱式石棺から出土した剣形・有孔円板の数量は他を上回り、独自性が強調される。なお、剣形と有孔円板を主体とする祭祀遺構のセットを導入した可能性も考えられる。

(3) 上位首長層との関係

先に述べたように、5世紀に正直古墳群の周囲に大型古墳は確認されていない。では、この地域の上位首長層をどのように考えればよいのであろうか。この問題について、石製模造品の動向を踏まえ読み解いてみよう。

1. 微視的視点による階層性の把握（第229図）

第229図は、東北地方の古墳で埋葬施設から石製模造品が出土した古墳を示したものである。墳形は、前方後円墳を上位とし、帆立貝形前方後円墳、造出付円墳、円墳、土坑墓という階層差がある。そして規模の大小により階層差が表現される。埋葬施設では、念南寺古墳の家形石棺が最上位に位置付けられる。東北地方南部に多い箱式石棺に限った場合でも、その大きさが階層差を示す可能性もある。そして、埴輪が樹立される古墳も上位に位置付けられる。

第229図に示した古墳のうち、中期前半に位置付けられる古墳には、真野49号墳・塚野目11号墳、そして正直27号墳がある。この段階の石製模造品出土古墳は規模が18～25mで、中・小規模の古墳である。古墳には、墳丘形態と規模、埋葬施設、埴輪の有無といった差から、階層性が認められるものの、古墳の諸属性から導かれる階層性と石製模造品に関連性を見出すことは難しい。

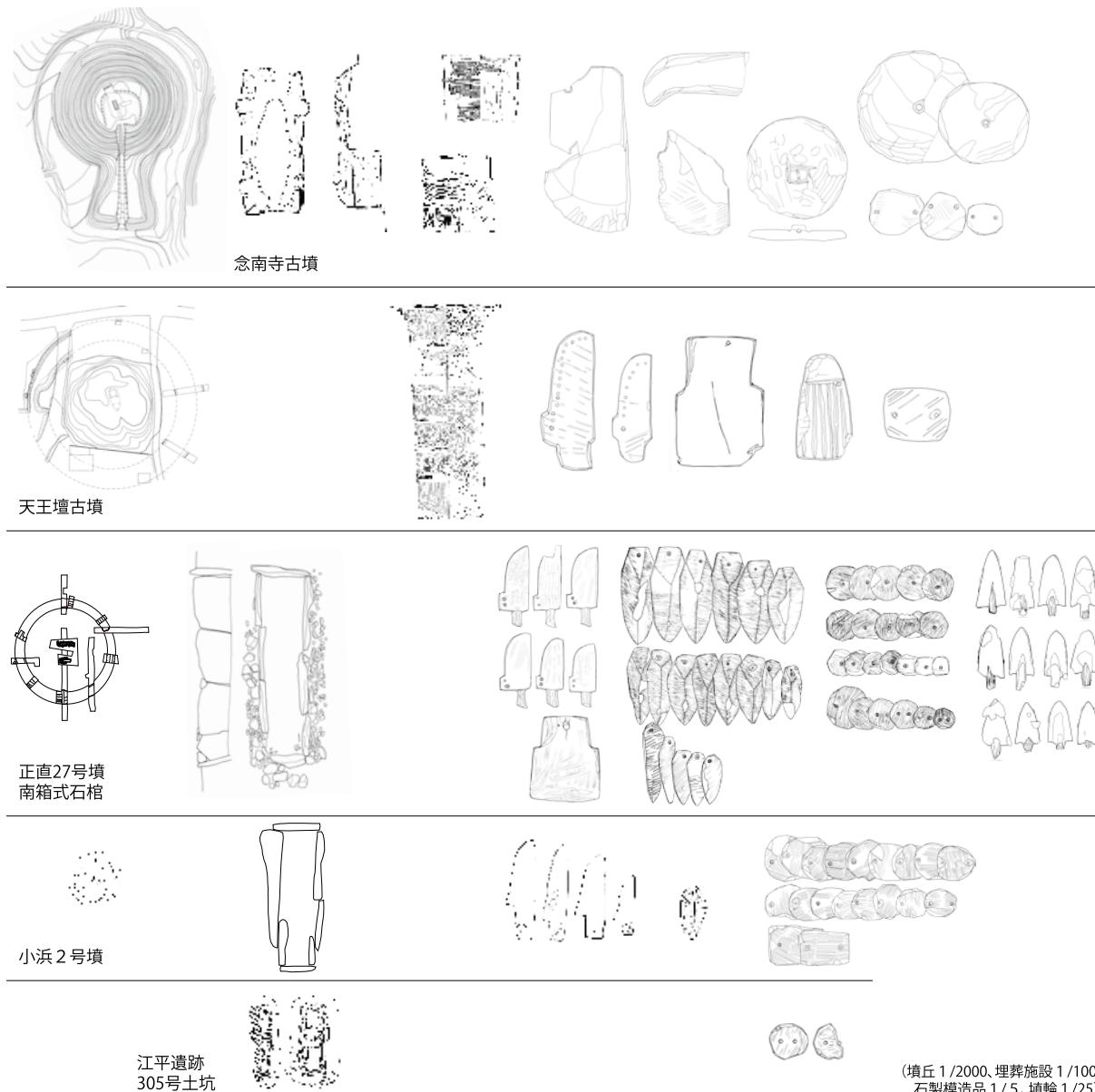
では、石製模造品が端的に示すものは何であろうか。天王壇古墳から出土した櫛形は、他に類を見ないもので、黄色を帯びる石材であることから在地で製作されたものと考えられる。5世紀前半、上毛野西部の首長層は、案・壺・杵あるいは機織具をはじめとする、農工具以外の石製模造品を創出した。天王壇古墳の櫛形は、こうした上毛野の動向と軌を一にするものと考えられる。また、真野49号墳の案形については、類例は白石稻荷山古墳・経塚古墳にあり、明らかに上毛野との強い繋がりを読み取ることができる。

石製模造品は、刀子形の有無から、首長か否かという差を読み取ることができるものの、東北地方の古墳においては、形態・数量などからはそれ以上の階層差を抽出することは難しい。一方では、その共通性から他地域との関係性を推し量ることが可能である。

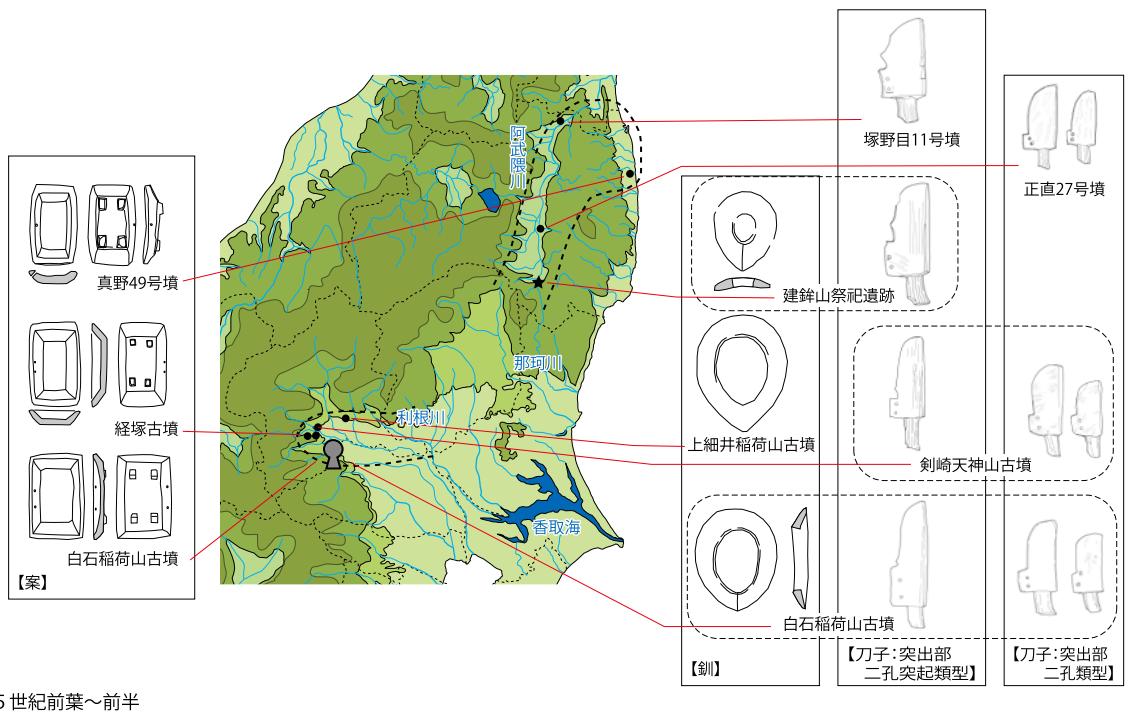
2. 巨視的視点による上位階層の把握（第230図）

筆者はこれまで、東日本有数の祭祀遺跡である建鉢山祭祀遺跡の石製模造品を検討し、関東地方と東北地方との関係性を追究してきた。その結果、福島県内では5世紀前半に群馬県西部の影響を受けた石製模造品が多数存在し、5世紀中葉～後半には、阿武隈川流域と栃木県で形態的特徴の共通する農工具形石製模造品が見られることを明らかにした（佐久間2023）。

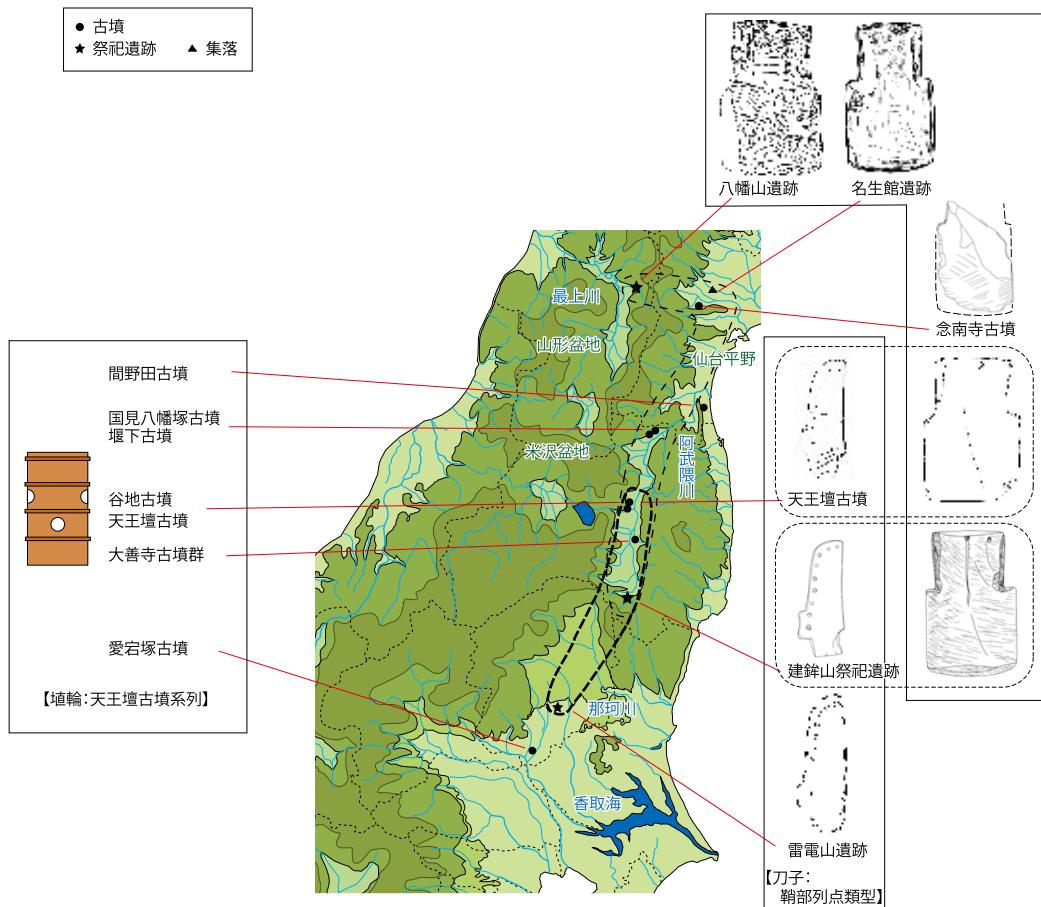
遺跡名	墳形	規模	所在地	埋葬施設	石製模造品他								他出土遺物
					刀子	斧	鎌	他	劍	円板	鏡	白玉	
念南寺古墳	前方後円墳	54m	宮城県色麻町	(埋葬施設盗掘孔)		3	1			5	1		円筒埴輪
天王塙古墳	造出付円墳	38m	福島県本宮市		4	1	1	櫛 1		1	1		円筒埴輪、形象埴輪、須恵器、鉄刀子 1
正直23号墳	円墳	26m	福島県郡山市	木炭槨	6								櫛
正直27号墳	円墳	25m	福島県郡山市	南箱式石棺	6	1			19	24			鉄斧 1、鉄刀子 1、鐵鎌 20
				北箱式石棺西側区画					18	9	783		剣 2、鹿角製刀劍装具 9、ガラス小玉 3
				北箱式石棺東側区画					23	14	673		直刀 1、鉄斧 1、櫛 4、ガラス小玉 7
正直30号墳	円墳	22.5m	福島県郡山市	第1木棺直葬	4				1	4		5	
鷹巣18号墳	円墳	22m	宮城県白石市	箱式石棺						4		422	勾玉 1、鉄鎌 4
真野49号墳	円墳	21m	福島県南相馬市	礫槨	7	1	1	案 1			1	1	
塚野目11号墳	方墳	18m	福島県国見町	木棺?	8	4	4						
小浜2号墳	円墳	12m	福島県富岡町	箱式石棺	4				1	14	162		鉄鎌 1
正直30号墳	円墳		福島県郡山市	墳丘外礫槨					3	5			
江平305号土坑	土坑墓		福島県玉川村	箱式石棺						2			



第229図 東北地方における石製模造品出土古墳の階層性



5世紀前葉～前半



5世紀中葉～後半

第230図 東北地方における石製模造品の特徴

石製模造品から導かれるこうした2つの様相は、単なる遺物の共通性にとどまらず、上位首長層の動向と相関関係にあることが分かつてきた。

先ず5世紀前半に関する事象として、群馬県太田市にある東日本最大の前方後円墳・太田天神山古墳（全長210m）の成立が挙げられる。若狭徹氏は、太田天神山古墳の成立の背景には、上毛野地域の東部（東毛）と西部（西毛）の両勢力による王の共立と、北関東一南東北のネットワークの成立という2つの作用があった可能性が高いとする（若狭2011）。

このうち北関東と南東北のネットワークについては、東北地方南部の首長層への影響力を有する北関東の首長の姿が見え、その時期に東北地方南部に大型古墳が見られないことを考えるうえでも、示唆に富むものと言えよう。すなわち、5世紀前半の正直古墳群の首長たちは、北関東の上位首長層、特に群馬県西部の首長層と深い繋がりを持っていたと想定できる。

一方、5世紀中葉から後半になるとこの関係に変化がみられる。それは藤澤氏が「天王壇古墳系列」とする共通した円筒埴輪の存在である。この埴輪は口縁部直下に突帯を有する特徴的な円筒埴輪で、福島県国見町の国見八幡塚古墳（帆立貝形前方後円墳、全長66～68m）、本宮市の天王壇古墳（造出付円墳、全長38m）など、阿武隈川流域から栃木県南部の古墳で確認される。これは、この地域で共通する形態の石製模造品が出現する現象と強い関連性を示すものと捉えられる。こうした葬送と祭祀のネットワークで結ばれた首長層の存在から、5世紀後半の東北地方南部では、群馬県の首長層の影響が5世紀前半に比べ相対的に弱まった可能性が見て取れる。

（4）葬送における独自性の発現

正直27号墳では、2つの石棺、3つの区画に4人の人物が埋葬されたと考えられる。そして、石製模造品の特徴から、儀礼の際に使用された石製模造品が、埋納の際に本来とは異なるまとまりで埋納された可能性が高い。追葬と考え難い堅穴系の埋葬施設であることから、特に北箱式石棺では石棺の蓋が同時期に閉められたと考えるのが妥当である。こうした点から派生する問題が、モガリについてである。

1. モガリ儀礼の追求

モガリに関する先駆的研究として、石製品や出土状態の特徴などから、モガリの痕跡に踏み込んだものがある。それが千葉県千葉市石神2号墳の事例である。沼沢豊氏は、同一木棺内に置かれた2つの石枕とそれに伴う立花、そして石製模造品に残された「ネズミ歯痕跡」の有無と出土状況から、1つの木棺に埋葬された2人の被葬者は同時に死亡したのではなく、異なる時点で死亡したものが同時に埋葬されたと推察した（沼沢1977）。

そして、杉山晋作氏は沼沢氏の解釈を発展させ、「ネズミ歯痕跡」の有無により、立花がモガリの期間中に一旦取り除かれた可能性を述べた。杉山氏は、先死者のモガリ的期間内に侵入したネズミが、後死者のその期間内には侵入しなかったとする沼沢氏の偶然性を指摘したうえで、沼沢解釈に刀子形の使用を加え準沼沢A～E案として再構築した。しかし、ネズミの侵入過程で偶然性に依拠するという問題が残ることから、ネズミの侵入時期を先死者に対する立花の使用時からではなく、それより後であったとする杉山案を提示した（杉山1991）。

また、千葉県成田市の猫作・栗山16号墳では、1つの木棺から3つの石枕が出土している。3つの石

枕には、それぞれ形態の異なる立花が伴うと考えられる。しかし、中央石枕に伴うはずの立花が南側石枕付近から出土していることなどから、報文によれば、別々に死を迎えたものをモガリなどの儀礼を行い、仮埋葬後に改葬をするなどして、最終的には一緒に埋葬したと考えている（香取郡市文化財センター－1995）。

考古学的事象にとどまらず、古代史の文献も含め、多角的・網羅的に研究する穂積裕昌氏は、古墳における複数埋葬についても論じる。三重県内の事例から、同一墓壙に葬られた複数の棺は、同時死亡でない限り、最後に死亡した被葬者の埋葬に合わせて墓壙に一括埋葬されたと推定したうえで、同一墓壙複数棺埋葬の場合、先死者は最終死亡者の入棺時まで殯所で遺体が維持されていたこともあっただろうと捉えた（穂積2024）。

2. 正直27号墳におけるモガリ儀礼の可能性（第231・232図）

正直27号墳での遺構及び遺物のあり方は、埋葬にいたる過程について示唆を与える。南北2つの石棺が計画的に配置され、さらに北箱式石棺は内部の仕切り石により2つの区画が作られる。その特徴的な構造から、当初より2人を埋葬することが予定されていたことは間違いない。結果的にそのうちの1つの区画に2人が埋葬されることとなった。そして、石製模造品の様相からは、連続して製作された2つのまとまりのものが、埋葬の際には本来とは異なる3つのまとまりとして棺に納められたと考えるのが妥当である。

石製模造品の特徴から、儀礼の際に使用された石製模造品が、使用時とは異なるまとまりで埋納された可能性が高い。少なくとも石製模造品は同時に埋納されたと考えられる。

北箱式石棺東側区画の人骨aの頭蓋骨には、水銀朱の可能性が高い赤色顔料が付着している。この赤色顔料は、白骨化した状態で塗布されたのか、あるいは皮膚の残る状態で塗布されたものが皮膚の消失に伴い頭蓋骨に付着したのだろうか。この点に関しては様々な研究者に実見して頂いたが、意見の一致をみない。白骨化後の付着であれば、白骨化するまでの経過あるいは処置の時間を考える必要がある。しかし皮膚への付着であれば、そうした時間の経過を考慮する必要はなく、西側区画の人骨b・cとともに埋葬されたと考えるのが妥当である。いずれにせよ、北箱式石棺は石棺の蓋が段階的に閉じられたのではないことは確実で、どのような姿であれ3人が同時に埋葬されたことに変わりはない。

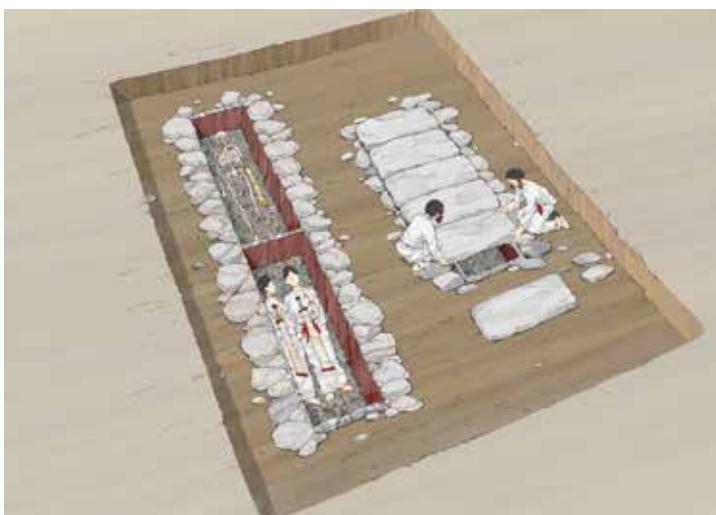
複数人が同時に埋葬される状況を考える際、同時に死亡し同時に埋葬される場合、あるいは異なる時期に死亡しながらも同時に埋葬した場合が想定される。後者の場合は、モガリが想起される。

正直27号墳では、当初より3人の埋葬が予定されていたが、石棺の構造には差が見られ、さらに刀子形・斧形石製模造品の有無から、南箱式石棺の被葬者が、より上位の人物であり、古墳築造の契機となる人物であったと推察される。結果的に4人の人物が埋葬されることとなるが、人骨は解剖学的に本来の位置を保っていたと思われ、他の場所で骨化したものを石棺内に埋納したとは考え難い。そのため、モガリなどの儀礼の時間を想定する場合でも、墳丘の上で行ったことを想定することも可能である。そして長期におよぶものではなく、短期的なものであったと考えられる。

正直27号墳における事例は、今後、モガリなどを考えるうえでも欠くことのできない事例になる。さらに、墳丘外の土器棺を含め、埋葬の様子をより具体的にする良例となる。



復元イラスト1
4人がほぼ同じ時期に死亡し埋葬されたと考える復元イラスト



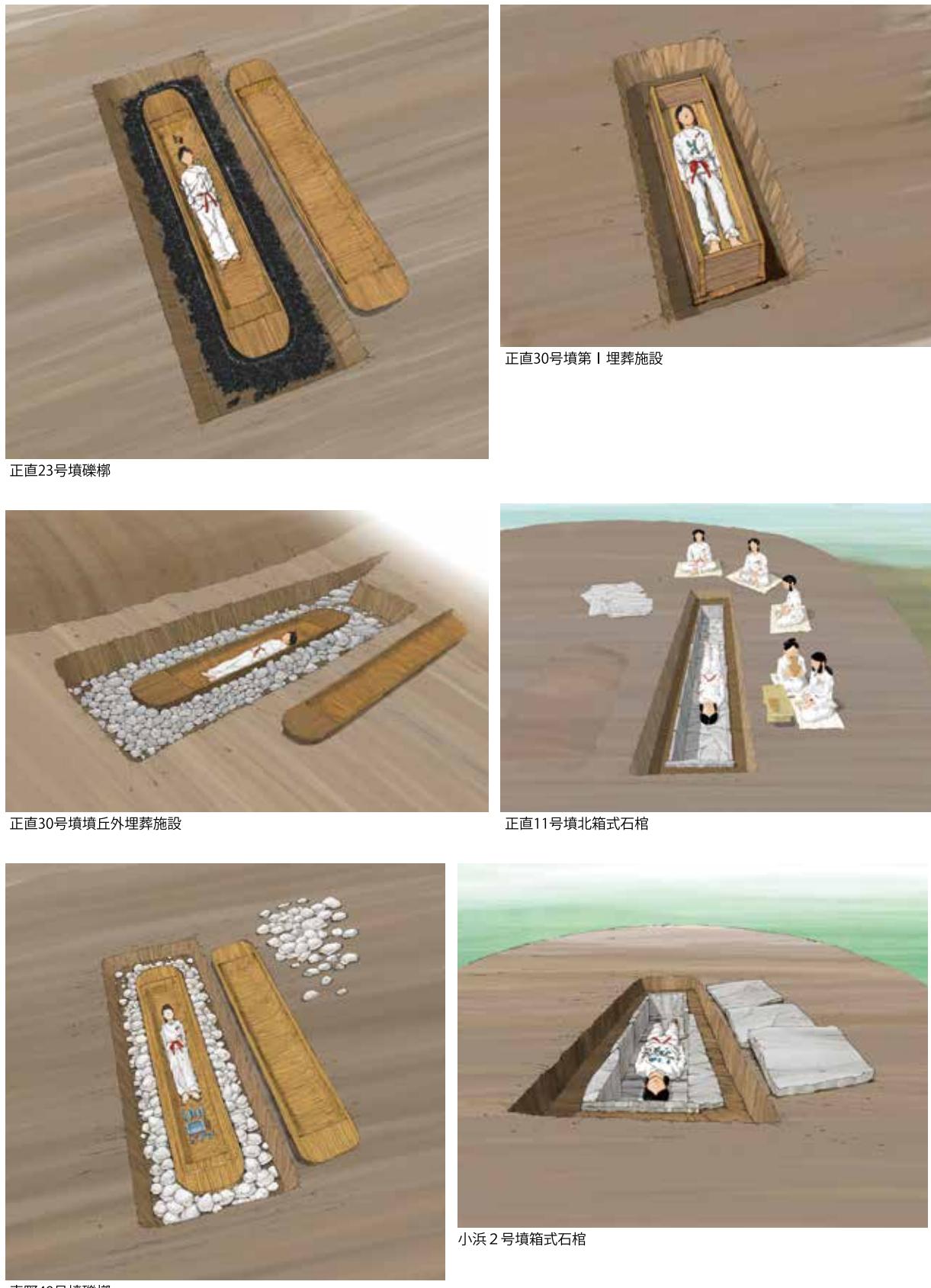
復元イラスト2
4人が異なる時期に死亡したと考える復元イラスト



復元イラスト3
土器棺埋納の復元イラスト

作画:佐久間正明・岩田哲

第231図 正直27号墳における埋葬時の復元イラスト



真野49号墳櫛柳

第232図 正直古墳群および関連古墳における埋葬時の復元イラスト

(作画:佐久間正明・岩田哲)

3. 埋葬施設の多様性（第233図）

正直21号墳や30号墳は木棺を直接据え付ける木棺直葬、27号墳や11号墳は箱式石棺である。また、23号墳は木炭櫛、そして30号墳墳丘外埋葬は礫櫛で、木棺を覆う櫛の構造となる。さらには、墳丘を持たない土坑墓や土器棺なども存在する。こうした棺・櫛の構造の違いは階層差・影響を受ける地域・出自の違いなどが考えられるが、未だ十分に明らかにされているとは言い難い。

東北地方における古墳時代中期の埋葬施設を見ると、様々な棺・櫛の構造がある。東北地方の埋葬施設については、影響を受けた地域や伝播の経路、そして東北地方内部での展開過程に不明な点が多い。そうしたなか、菊地芳朗氏は、木棺・石棺そして被覆施設という各種埋葬施設の消長を整理するとともに、問題を明確に示している。そして東北地方における埋葬施設の成立にあたっては、「単一の起源地からの単線的・集中的波及」を想定するのではなく「複数の起源地からの時期や経路が異なる錯綜的な波及過程」を考えることが適切であると述べる（菊地2020）。

こうした状況のなか、その成立と展開が比較的良く判明しているとされる埋葬施設に礫櫛がある。石橋宏氏の分析によれば、古墳時代中期の礫櫛は、中期初頭（5期）に、白石稻荷山古墳を端緒として埼玉県北部から群馬県を中心とし、栃木県・福島県・宮城県に点的に確認できるとする（石橋2018）。

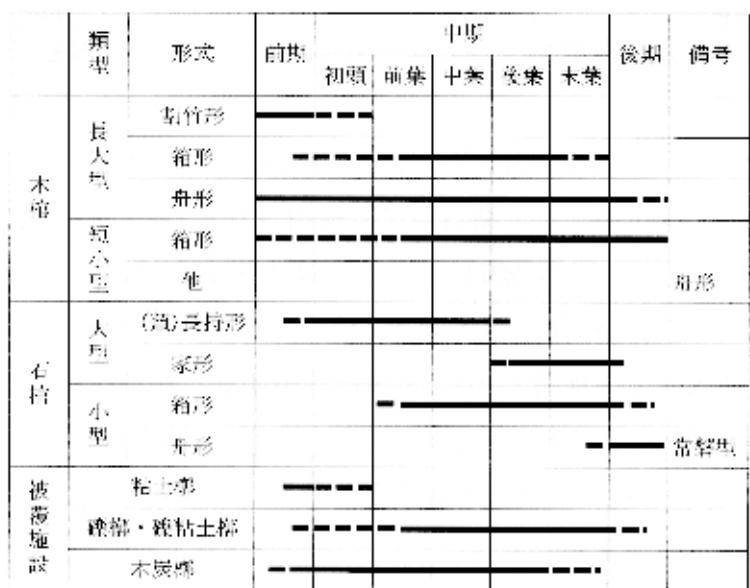
正直27号墳の箱式石棺は、上毛野の影響が考えられる。一方、長大で仕切りを有する特異な構造については、これまでのところ類例がない。内部を仕切る目的が複数埋葬を意図したであろうことは言うまでもないが、こうした埋葬方法の出自を考えた場合、木棺内の複数の石枕から複数埋葬が想定される関東地方の影響を受けていた可能性がある。しかし、いずれにせよ類例がないことに変わりはなく、正直27号墳の独自性を強調することができる。1つの古墳群において、こうした様々な埋葬施設の構造が見られる点においても、正直古墳群の重要性が理解される。

引用・参考文献

- 石橋 宏 2018 「東日本における礫櫛構造を持つ堅穴系埋葬施設について」『野本將軍塚古墳と東国の前期古墳』
早稲田大学東アジア都城・シルクロード研究所
- 菊地芳朗 2020 「東北の古墳時代中期—埋葬施設と副葬品を中心に—」『宮城考古学』第22号 85-102頁
- 佐久間正明 2017 「武具形石製模造品考—石製模造品にみる関東地方と九州・中国地方の一様相—」『考古学雑誌』
第99巻第1号 日本考古学会 3-49頁
- 佐久間正明 2023 『石製模造品による葬送と祭祀 正直古墳群』シリーズ遺跡を学ぶ161 新泉社
- 杉山晋作 1991 「石枕・立花と死者の送り」『古代探叢』Ⅲ 早稲田大学出版部 355-378頁
- 沼沢 豊 1977 「第I部 古墳篇 第2部 合葬の問題」『東寺山石神遺跡』 千葉県文化財センター
- 穂積裕昌 2024 『殯の考古学』 雄山閣
- 若狭 徹 2011 「中期の上毛野」・「上毛野における五世紀の渡来人集団」『古墳時代毛野の実像 季刊考古学・別冊
17』 雄山閣 135-141頁

報告書

- 香取郡市文化財センター 1995 『猫作・栗山16号墳』



「東北における各種埋葬施設の消長」
菊地芳朗2020「東北の古墳時代中期—埋葬施設と副葬品を中心に—」『宮城考古学』第22号より転載

第233図 東北地方における埋葬施設の消長

第4節 正直古墳群の歴史的意義

(1) 主要古墳の評価

1. 正直 35号墳

調査により古墳時代前期の全長 37m の前方後方墳であることが分かった。谷田川を挟んだ対岸には全長 83m の前方後方墳・大安場 1 号墳があり、近接する時期に 2 つの前方後方墳が築造されたことが判明した。当該期、同じ地域に複数の前方後方墳が築造されるのは、福島県内では会津坂下町の森北 1 号墳・出崎山 2 号墳・鎮守森古墳、喜多方市東部の舟森山古墳・深沢古墳・十九塙 3 号墳などが知られるのみで、県内有数の事例と言える。さらに大安場 1 号墳と正直 35 墳に近接して、一辺 9 m の方墳・山中日照田遺跡 A 地区 2 号墳、8 × 6 m の方形周溝墓・山中日照田遺跡 A 地区 4 号方形周溝墓がある。当該地域における大型前方後方墳・中型前方後方墳・小型方墳・方形周溝墓の存在からは、古墳の形態と規模に明確な階層性を読み取ることが可能となる。このように 35 号墳の調査により明らかとなった古墳時代前期における方形基調の墳墓による重層構造は、県内でも希少な事例である。

2. 正直 21号墳

直径 37m の古墳群内で最大の円墳である。調査により出土した壺は、神奈川県逗子市・葉山町の長柄桜山 1 号墳、茨城県坂東市の上出島 2 号墳、いわき市の玉山古墳、埼玉県美里町の川輪聖天塚古墳に類例があることから、4 世紀末に比定することができる。この時期は、東北地方において大型古墳の空白期及び中期古墳が断絶した時期とされてきた。正直 21 号墳の築造時期が判明したことにより、東北地方においても地域により様相が異なることが明らかになった。この点は、東北地方における古墳の変遷を考えるうえで極めて重要である。

3. 正直 27号墳

石製模造品・滑石臼玉・ガラス小玉・鹿角装剣・直刀・鉄鎌・鉄斧・鉄刀子・堅櫛などの副葬品、水銀朱が塗布された人骨など、1500 点を超える多彩な遺物が出土した。これは古墳時代中期の古墳では東北地方最多の出土数を誇る。埋葬施設は、内部にベンガラが塗布された箱式石棺が 2 棺並列の状態で確認された。このうち、北箱式石棺は長軸 4.52m を測る大型の石棺で、同時期のものとしては、全国的にも最大規模である。さらに北箱式石棺は、内部が 2 つの区画に仕切られた非常に特殊な埋葬施設で、全国的にも類例は知られていない。墳丘外埋葬施設である土器棺も、古墳時代中期の事例では東北地方唯一である。こうした遺構と遺物のあり方から、葬送儀礼を具体的に復元することが可能となり、今後の研究において欠くことのできないものであることが理解される。

(2) 正直古墳群築造の背景

石製模造品が出土する古墳や集落・祭祀遺跡の分布から、5 世紀の東北地方南部では、群馬県西部からの影響を多分に受けたことを本章第 3 節で述べた。

亀田修一氏は東日本における渡来系文物の分布から「伊那谷—群馬西部—阿武隈川流域—仙台湾」というルートを示している(亀田2003)。右島和夫氏も、渡来系集団が主導する馬匹生産の開始は「ヤマト

王権が政策的意図」をもって進めたもので、近畿地方中央部から伊那谷そして上毛野という古東山道ルートが成立した可能性を説く（右島2008）。このように文物の流入経路などから、とくに内陸部のルートは当時の王権から重視されたことが先行研究により指摘されてきた。

東北地方南部においてこうしたルートが本格化するのは5世紀でも後半と考えられているが、それは突然起こったものではなく、5世紀前半から継続的に生じた動きの累積によるものであった。

埋葬施設の面からは、箱式石棺は影響を受けた地を絞り込むことは難しいものの、正直27号墳の類例は群馬県達磨山古墳などに求められる可能性がある。また、礫槨については、群馬県西部から埼玉県北部との繋がりを指摘できる。

近畿地方中央部発祥の祭祀についても、東北地方南部では水辺の祭祀、方形区画での祭祀、そして石製模造品を使用した祭祀を随時取り入れている。さらには鍛冶に代表される新来の技術や新たな調理方法である竈など、当時の最先端の文物の導入がある。その背景に、5世紀前半の北関東、特に群馬県西部の首長層の影響があると想定される。

一方、正直古墳群出現の契機となった正直35号墳や21号墳などの4世紀代の古墳については様相が異なる。21号墳の壺の類例は広く関東各地の古墳に類例が見られるもので、一地域の影響は見られない。そして、35号墳の壺はこれまでのところ類例が明らかではなく、不明な点が多い。

（3）正直古墳群の持つ意味

正直古墳群は、東北地方における大型古墳の空白期とされる4世紀末から5世紀前葉も含め、4世紀中頃から5世紀末まで継続して古墳が築かれた、東北地方においては稀有な事例である。

大型前方後円墳などではなく、目立つ古墳群とは決して言えない。その一方、首長あるいはその近親者は、箱式石棺や木棺、棺を覆う礫槨や木炭槨など様々な形態で埋葬されていることが明らかとなり、古墳時代中期における埋葬の姿を具体的に示すものと理解される。

正直27号墳の被葬者は大型の石棺に葬られ、新たな葬送儀礼の道具である石製模造品が副葬された。石製模造品は刀子形や斧形とともに、他の地域の古墳に先んじるように剣形や有孔円板も埋納される。これは、剣形を多数埋納した白石稻荷山古墳、あるいは剣形と有孔円板を主体とする祭祀遺構、いずれかの様相を取り入れたものである。いずれにせよ、古墳における石製模造品使用についての独自性と見て取れる。そして、27号墳に続き23号・30号墳に埋葬された被葬者の葬送を執り行った首長たちは、一度取り入れた石製模造品を使用する葬送儀礼を継続していく。

こうした特徴的な方方は、ヤマト王権が創出した儀礼を取り入れつつ、独自性を発現しようとしたこの地の首長層の姿を表すものである。その独自性は葬送に伴う道具だけにとどまらない。当初から複数埋葬を想定し、内部に仕切りを有する長大な石棺を作るなど、いくつかの特徴的な点にも見ることができる。

正直古墳群を中心とする郡山市南東部の遺跡群の出現は、さらに北への影響力拡大をはかるヤマト王権、より直接的には上毛野の首長層の政策的な意図を反映したものであり、その拠点としての役割を担っていたこの地域の重要性が理解される。

(4) 周辺集落を含めた総合的研究への昇華

東北地方の古墳時代中期前葉に、古墳の築造が著しく低调となることは先に述べた。藤澤氏は、古墳変動の理解として、東北地方南部の「内部の要因」だけで引き起こされたものではなく、「全国的な政治的変動」・「外在的な要因」に強く影響を受けていた点を指摘する。一方、東北地方においては古墳築造自体が衰退しているという特異性から、「政治的な変動の影響」という解釈だけでは十分な説明となっていない点を指摘する。そして、集落の動向などを含めた総合的な検討の必要性を説いている（藤澤2020）。

菊地氏は、東北地方における中期古墳の内容から「衰退」や「後進的」といった評価だけでは必ずしも適当でないと指摘する。そして、当時の社会の動向を知るために、「古墳だけでなく、集落、農業生産、各種手工業生産、さらに復元される政治構造や社会構造の検討」が不可欠であると述べる（菊地2020）。古墳時代研究をリードする藤澤・菊地両氏の提言にあるように、古墳に限らず他の分野を含めた総合的な検討が必要である。

第1章でも触れたように、郡山盆地の阿武隈川西側では、首長居館の一部を構成する方形区画遺構や、水に関する祭祀、東北地方でいち早く導入された鍛冶遺構や竈、算盤玉形紡錘車が確認された清水内遺跡がある。そして、阿武隈川東側の丘陵上の集落では、鍛冶遺構・石製模造品工房、そして陶質土器や把手付甌、さらには多量の須恵器が出土し、渡来系文物が顕著に認められる。それは前後の時期にあたる4世紀及び6世紀に比べ、活況を呈する状況と言える。

そこから、古墳の空白という現象を考えると、古墳築造に労力を注ぐのではなく、柵と堀に囲まれた方形区画や水辺の祭祀に必要な水路の建設、低地での水田開発、それらに必要な鉄器加工技術、新たな土地の自然に働きかける祭祀具の生産といった、開発に労力を注いだ姿が浮かび上がる。開発に注力するあり方も、多分に政治的・外在的影響を受けていることは間違いない。そこにどのような内在的要因を認めることができるか。古墳の築造に政治的な変動という共通性とともに、地域の内在的要因という個別性を認めることができるか。正直古墳群の調査・分析から復元される葬送の姿、そして郡山盆地の集落の調査成果から得られる生活・生産の場の具体像を通して、東北地方南部における社会構造が復元可能となるだろう。

(5) 今後必要となる調査について

支群Aの正直35号墳は、発掘調査により墳丘の形態・規模はほぼ確定した。その一方、墳丘上部が神社造営時の削平等により埋葬施設は検出されず、明確に築造時期を示す資料も得られていない。墳丘北西は築造時の盛土が比較的良好に残り、東側くびれ部も未調査であるため、今後の調査で築造時期を示す遺物が得られる可能性は高い。

支群Bの正直27号墳では、周溝外で土器棺や土坑墓が確認されている。また、周溝は深い部分と浅い部分がある。墳丘東側では掘り残している部分が存在する可能性があり、通路あるいは造り出しといった付帯施設の可能性もある。周溝及び墳丘外側に拡大した調査により、周辺埋葬の状況や古墳の付属施設など、さらなる内容が明らかとなる可能性が高い。

支群Cの正直23号墳は、1949(昭和24)年に埋葬施設の調査が行われたままの状態で、その際のトレ

ンチの痕跡が明瞭に残る。また、墳丘西側には第2次大戦中に掘られたと考えられる防空壕の跡も残っている。古墳を保存する観点からも、現況を把握する必要がある。また、掘削されている壁面を活用すれば、墳丘構築方法の一端も解明できるものと思われる。古墳の北西側は中世の館跡の濠により、東側は耕作・家屋により削平されているため、規模が未確定である。1949(昭和24)年の調査時は直径29m、1964(昭和39)年の『福島県史』刊行当時は直径22m、1985(昭和60)年の測量時は東西26m・南北23mとされている。規模を確定するうえでも、周辺部を含めた調査が必要である。

支群Eは、正直古墳群で唯一調査が加えられていない支群である。正直33号墳は遺存状態も良く、調査がなされ構築時期が判明すれば、古墳の変遷を具体的に把握することが可能となる。

支群Fの正直21号墳は、調査時、墳丘端部を中心にして穴が数多く確認された。これはどの古墳にも該当する状況で、特に35号墳は後方部墳丘内部のいたるところが穴により破壊を受けていた。穴による古墳の破壊は現在進行形で進んでいる問題である。21号墳はかろうじて埋葬施設が残っているが、さらなる破壊が進行する前に保存のための調査、そして整備が必要であろう。

引用・参考文献

- 亀田修一 2003 「陸奥の渡来人(予察)」『古墳時代の東国における渡来系文化の受容と展開』 専修大学文学部
菊地芳朗 2020 「東北の古墳時代中期—埋葬施設と副葬品を中心に—」『宮城考古学』第22号 85-102頁
佐久間正明・渡邊歩 2022 「福島県における渡来系遺物の一様相」『福島考古』第64号 福島県考古学会 89-99頁
佐久間正明 2023 『石製模造品による葬送と祭祀 正直古墳群』シリーズ遺跡を学ぶ161 新泉社
杉山晋作 1991 「石枕・立花と死者の送り」『古代探叢』Ⅲ 早稲田大学出版部 355-378頁
都出比呂志 1992 「墳丘の型式」『古墳時代の研究』7 雄山閣 15-38頁
沼沢 豊 1977 「第I部 古墳篇 第2部 合葬の問題」『東寺山石神遺跡』 千葉県文化財センター
沼沢 豊 1980 「東国の石枕」『古代探叢』 早稲田大学出版部 207-220頁
藤澤 敦 2012 「⑩東北 3地域の展開」『古墳時代の考古学』2 同成社 221-231頁
藤澤 敦 2015 「4 不安定な古墳の変遷」『倭国の形成と東北』 吉川弘文館 107-133頁
藤澤 敦 2020 「東北地方中期古墳の特質」『宮城考古学』第22号 103-132頁
穂積裕昌 2024 『殯の考古学』 雄山閣
右島和夫 2008 「古墳時代における畿内と東国—5世紀後半における古東山道ルートの成立とその背景—」『研究紀要』第13集 由良大和古墳文化研究協会 27-56頁
若狭 徹 2011 「中期の上毛野」・「上毛野における五世紀の渡来人集団」『古墳時代毛野の実像 季刊考古学・別冊17』 雄山閣 135-141頁
若狭 徹 2021 『古墳時代東国の地域経営』 吉川弘文館
和田晴吾 1992 「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』5・近畿I 角川書店

報告書

- 大洗町教育委員会 2019 『磯浜古墳群I 姫塚古墳・車塚古墳・日下ヶ塚(常陸鏡塚)古墳 平成21~24年度測量調査・範囲確認調査成果総括報告書』

大垣市教育委員会 2003『史跡 昼飯大塚古墳』

各務原市教育委員会 2022『坊の塚古墳 第1・2・3・4・5・6次発掘調査報告書』

香取郡市文化財センター 1995『猫作・栗山16号墳』

更埴市教育委員会 1992『史跡 森將軍塚古墳 一保存整備事業保存整備報告書一』

埼玉県教育委員会 2018『史跡埼玉古墳群 総括報告書I』

千葉県文化財センター 1977『東寺山石神遺跡』

富津市教育委員会 2013『内裏塚古墳群総括報告書』

本巣市教育委員会 2017『本巣市船来山古墳群総括報告書』

第5節 保存活用と今後の展望

(1) 調査の課題

2017（平成29）年から始まった保存のための調査は、正直古墳群の主要古墳である支群Aの35号墳、支群Bの27号墳、支群Fの21号墳の調査を中心に行い、古墳群としての歴史的位置づけを明確化してきた。

また、正直古墳群は、過去にも開発に伴う緊急発掘調査により、人骨や様々な副葬品の出土など多くの成果が得られている。

一方、正直古墳群には未調査の支群Eや、学生考古学会による調査が行われたものの、詳細な成果が伝わっていない23号墳を含む支群Cがあるとともに、近年の測量調査で存在が推測され新たな古墳と思われる墳丘が判明するなど、未調査の部分も多い。特に23号墳については、調査後の養生が適切にされていない可能性が高く、保存状態に懸念が残っている。

これら正直古墳群の未調査部分のほか、正直古墳群が存在する正直B遺跡においては、過去に圃場整備等が行われた際の福島県による分布調査以降は調査が殆ど行われておらず、当該遺跡との関係性を整理するためにも、古墳群の調査と並行して正直B遺跡の未調査部分の分布調査を検討する必要がある。

(2) 保存活用と今後の調査

郡山盆地南東の丘陵には、大安場古墳群や正直古墳群をはじめとする古墳のほか、正直A遺跡、山中日照田遺跡、東山田遺跡など数多くの古代の遺跡が存在するが、国道49号や県道・市道の沿線を中心に区画整理や圃場整備、宅地造成など開発が行われている地域もある。

正直古墳群の保存調査の契機も27号墳周辺の開発行為に伴う緊急調査であった。遺跡の保存はこれら開発との折り合いが必要である。田村町正直地区は昔ながらの景観を保ち、28基の古墳の現存を確認しているが、往時には50基以上の古墳が存在したと伝えられている。正直古墳群を今後も保存していくため、所有者の同意を得られた場所から史跡指定を行い、保存の担保を図っていく必要がある。

一方、正直古墳群は、地域では昔から数多くの古墳があることがよく知られているが、市内全域に周知されているとは言い難い。また、古墳は約45万m²と広範囲に点在し、古墳の合間に民家が点在していることから、保存と活用の前提として周辺住民の理解と協力が必要不可欠であり、これまでの調査結果で判明した正直古墳群の歴史的意義・価値を広く周知し、市民や地域の理解を得ることが重要である。

正直古墳群は、古墳時代前期から中期にかけて継続して築造され、円墳とともに前方後方墳も存在し、多様な方法で埋葬されている点に特徴がある。また、谷田川の対岸に位置し古墳時代前期に築造された大安場古墳群との関係もうかがえ、現在策定中の史跡大安場古墳保存活用計画において正直古墳群との関係性をより関連づけた活用を行うことにより、相乗効果も期待できる。

今後の調査にあたっては、未調査の支群の調査や近年の調査で存在が推測される新たな古墳の調査などを継続的に行い、古墳築造時期をより詳細に把握するとともに、古墳群の全体像を把握していくことが重要である。また、調査の手法については、従来の掘削を伴う発掘調査のほか、これまでに発掘され

た遺物の詳細分析やレーダー探査等による非破壊手法による調査を検討する必要がある。これらの調査により、近隣遺跡との関係性や石製模造品をはじめとする関東との交流の痕跡を精査し、正直古墳群の歴史的な位置づけをより一層明らかにしていくことができれば、正直古墳群の更なる価値の向上が期待できる。

また、調査が終了した古墳については、適切な養生・整備を平行して実施し、保存を念頭においていた適切な養生・整備を実施していく必要がある。

報 告 書 抄 錄

書 名	正直古墳群調査保存事業 正直古墳群 総括報告書							
編 著 者	佐久間正明 茂原信生 荒井淑子 芹澤雅夫 江藤盛治 濱田暁子 荒木麻衣							
編 集 機 關	公益財団法人郡山市文化・学び振興公社 文化財調査研究センター							
所 在 地	福島県郡山市喜久田町堀之内字畠田 23 番							
発 行 機 關	福島県郡山市教育委員会							
所 在 地	福島県郡山市朝日一丁目 23 番 7 号							
発行年月日	令和 7 (2025) 年 3 月 27 日							
所収遺跡名	所 在 地	コード(正直B遺跡)		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
正直古墳群	福島県郡山市田村町正直字除古・天井田・南・竹ノ内・北・新館・日向畠・篭田・宮前	2036	0623	37° 20' 36"	140° 23' 36"			開墾 宅地造成 保存事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
正直古墳群	墳墓	古墳時代前期～中期	前方後方墳 1 基 円 墳 43 基 箱式石棺 礫 柳 木炭柳 土坑墓 土器棺	鉄刀 鉄劍 鹿角製刀劍装具 鐵刀子 鐵斧 鐵鎌 刀子形石製模造品 斧形石製模造品 劍形石製模造品 石製模造品有孔円板 滑石管玉 滑石臼玉 ガラス小玉 琥珀玉 瑪瑙勾玉 土師器 堅櫛 人骨	正直 27 号墳は、石製模造品・滑石臼玉・鹿角装劍・鐵鎌をはじめとする副葬品、水銀朱が塗布された人骨など、1500 点を超える多彩な遺物が出土した。2 棺並列して検出された箱式石棺のうち、北箱式石棺は長軸 4.52m を測る大型のもので、内部が 2 つの区画に仕切られている埋葬施設である。 正直 21 号墳は、直径 37 m の円墳で、出土した壺形土器から 4 世紀末の築造と考えられる。			
要 約	正直古墳群は、東北地方における大型古墳の空白期とされる 4 世紀末から 5 世紀前葉も含め、4 世紀中頃から 5 世紀末まで継続して古墳が築かれた、東北地方においては稀有な古墳群である。大型前方後円墳はないが、箱式石棺や木棺、棺を覆う礫柳や木炭柳など様々な形態で埋葬されていることが明らかとなった。新たな葬送儀礼の道具である石製模造品を導入後、古墳群内で継続して副葬された点も確認された。							

正直古墳群調査保存事業
正 直 古 墳 群
— 総 括 報 告 書 —
第2編 自然科学分析・考察編

発行日 令和7（2025）年3月27日
編 集 公益財団法人郡山市文化・学び振興公社
文化財調査研究センター
〒963-0541 福島県郡山市喜久田町堀之内字畠田 23番
発 行 郡市教育委員会
〒963-8601 福島県郡山市朝日一丁目 23番 7号
印 刷 石井電算印刷株式会社
〒963-0724 福島県郡山市田村町上行合字南川田 37-2
